平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

# 籠原裏古墳群

—熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書II—

2005

埼玉県熊谷市教育委員会

平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

かごはらうらこふんぐん

# 籠原裏古墳群

—熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書II—

2005

埼玉県熊谷市教育委員会

第１号墳（昭和61年度調査・南から）

第１号墳（平成元年度調査・北東から）

第１号墳石室

第１号墳（平成元年度調査・南東から）

第１号墳石室　双脚足金具出土状況

# 序

私たちの郷土熊谷には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あります。なかでも原始・古代の集落跡や古墳群、中世の館跡等の埋蔵文化財が、熊谷市内に多く分布することが知られています。

こうした埋蔵文化財は、地域の歴史・文化を伝えるばかりでなく、熊谷市の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。JR 高崎線籠原駅前北口に広がる籠原中央第一土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、古代の集落跡や古墳等が確認され、遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事に関しては、記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、昭和61年度から実施された計５回にわたる発掘調査の成果のうち、古墳時代でも終末期に位置づけられる籠原裏古墳群について報告するものでございます。本古墳群中からは墳丘の形が八角形を呈する古墳が発見され、これは全国的にも類例の少ない大変貴重な資料といえます。また、近年深谷市で発見された古代の役所跡と推測される幡羅遺跡や県内でも最古段階に創建された寺院の１つである熊谷市西別府廃寺、さらには古墳時代後期から平安時代まで長期間にわたって祭祀の行われた西別府祭祀遺跡などといった遺跡群の出現を考える上でも、本古墳群の存在は非常に重要なものといえます。

本書が埋蔵文化財保護ならびに学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました熊谷都市整備部都市計画課、土地区画整理西部事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成17年３月

熊谷市教育委員会
教育長　飯塚誠一郎

# 例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市大字新堀801番地他に所在する籠原裏古墳群（埼玉県遺跡番号59―051―1～9）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章3のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

昭和61年度（第1次調査）：昭和61年8月1日～昭和61年10月15日

昭和62年度（第2次調査）：昭和62年11月12日～昭和63年3月7日

昭和63年度（第3次調査）：平成元年2月8日～平成元年3月31日

平成元年度（第4次調査）：平成元年10月9日～平成2年1月29日

平成4年度（第5次調査）：平成4年11月10日～平成5年1月7日

整理・報告書作成期間は、平成16年4月1日から平成17年3月31日である。

5　発掘調査は、昭和61年度を寺社下博、昭和62・63年度を金子正之、平成元年度を金子、吉野　健、平成4年度を金子、権田宣行がそれぞれ行った。

本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　出土品の整理及び図版の作成は、稲葉真弓、岩瀬悦子、木村のぶ子、松尾伊津恵の協力を得て、松田が行った。第1号墳出土の刀装具については、瀧瀬芳之氏の御教示を得た。

8　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

9　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

青木克尚　新井　悟　小林　高　菅谷浩之　鈴木敏昭　瀧瀬芳之　竹野谷俊夫　利根川章彦

富田和夫　富田孝彦　鳥羽政之　村松　篤　若松良一

大里郡市町村文化財担当者会　埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

埼玉県立埋蔵文化財センター　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 凡　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図…1／800　　古墳平面図…1／100・1／80

古墳断面図…1／80　　石室…1／60・1／40

2　遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりである。

＝地　山　　 ＝焼　土　　 ＝礫

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器…1／4　　須恵器破片…1／6・1／8　　鉄・銅製品…1／2

土製品…1／4　　石器・石製品…1／2・1／4

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

縄文土器繊維　： 　　土師器・陶器断面　：白抜き

須恵器断面　　：黒塗り　　灰釉陶器断面　　：

鉄・銅製品断面： 　　土師器内面黒色処理：

須恵器・灰釉陶器底部調整　回転糸切り　　ᘐ

回転ヘラ削り　　\

回転ヘラナデ　　ᐝ

6　遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子

F…白色針状物質　G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石

L…片岩　M…砂粒　N…礫　O…繊維

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

# 目　次

口　絵
序
例　言
凡　例
目　次

I　発掘調査の概要……1
1　調査に至る経過……1
2　発掘調査・報告書作成の経過……2
3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……3
II　遺跡の立地と環境……4
III　遺跡の概要……10
1　調査の方法……10
2　検出された遺構と遺物……10
IV　遺構と遺物……15
1　古　墳……15
2　その他の時代の遺物……45
VI　調査のまとめ……59

# 挿図目次

第1図　埼玉県の地形図 ……4
第2図　周辺遺跡分布図 ……5
第3図　調査地点位置図 ……11
第4図　調査区全測図 ……13
第5図　第1号墳 ……17
第6図　第1号墳土層断面図 ……19
第7図　第1号墳石室 ……20
第8図　第1号墳石室　鉄・銅製品出土状況 ……21
第9図　第1号墳出土鉄・銅製品・土器 ……21
第10図　第2号墳 ……23
第11図　第2号墳断面図 ……25
第12図　第3号墳 ……26
第13図　第3号墳土層断面図 ……27
第14図　第3号墳石室 ……28
第15図　第3号墳出土鉄製品・土器 ……28
第16図　第4号墳 ……30
第17図　第4号墳石室 ……31
第18図　第5号墳・石室・出土土器 ……33
第19図　第6号墳 ……34
第20図　第7号墳・石室・出土土器 ……36
第21図　第8号墳 ……38
第22図　第8号墳土層断面図 ……39
第23図　第8号墳石室 ……40
第24図　第8号墳石室　鉄製品・骨片出土状況 …41
第25図　第8号墳出土鉄製品・土器 ……42
第26図　第9号墳 ……44
第27図　第1号墳出土遺物(1)　縄文・平安時代 …46
第28図　第1号墳出土遺物(2)　平安時代 ……47
第29図　第2号墳出土遺物(1)　縄文・平安時代 …48
第30図　第2号墳出土遺物(2)　平安時代 ……49
第31図　第2号墳出土遺物(3)　平安時代 ……50
第32図　第2号墳出土遺物(4)　平安時代・中世 …51
第33図　第3号墳出土遺物(1)　平安時代 ……54
第34図　第3号墳出土遺物(2)　平安時代 ……55

第35図　第４号墳出土遺物　縄文・平安時代・中世　57
第36図　第７号墳出土遺物　平安時代・近世 ……57
第37図　第８号墳出土遺物　縄文・平安時代・中世　57
第38図　第９号墳出土遺物　古墳時代前期 ……57
第39図　参考資料　東松山市西原１号墳・毛呂山町西戸９号墳出土双脚足金具 …60
第40図　参考資料　第10号墳・出土遺物 ……61

# 挿表目次

第１表　周辺古墳群一覧表 …… 6
第２表　周辺遺跡一覧表 …… 7
第３表　第１号墳出土鉄・銅製品観察表 ……20
第４表　第１号墳出土土器観察表……20
第５表　第３号墳出土鉄製品観察表……28
第６表　第３号墳出土土器観察表……28
第７表　第５号墳出土土器観察表……33
第８表　第７号墳出土土器観察表……37
第９表　第８号墳出土鉄製品観察表……43
第10表　第８号墳出土土器観察表……43
第11表　第１号墳出土遺物（縄文・平安時代）観察表 ……47
第12表　第２号墳出土遺物（縄文・平安時代・中世）観察表 …52
第13表　第３号墳出土遺物（平安時代）観察表 …55
第14表　第４号墳出土遺物（縄文・平安時代・中世）観察表 …58
第15表　第７号墳出土遺物（平安時代・近世）観察表 ……58
第16表　第８号墳出土遺物（縄文・平安時代・中世）観察表 …58
第17表　第９号墳出土遺物（古墳時代前期）観察表 ……58

# 図版目次

図版１　籠原中央第一土地区画整理事業地内全景（真上から）
籠原中央第一土地区画整理事業地内全景（東から）
図版２　第１区（昭和61年度調査Ａ区）全景（南西から）
第４区（昭和62年度調査Ｂ区）全景（真上から）
図版３　第５区（昭和63年度調査Ａ区）全景（真上から）
第５区（昭和63年度調査Ａ区）全景（南西から）
図版４　第１区（平成元年度調査Ｂ区）全景（南西から）
第６区（平成元年度調査Ａ区）全景（西から）
**遺　構**
図版５　第１号墳（昭和61年度調査・南から）
第１号墳（平成元年度調査・北東から）
図版６　第１号墳（平成元年度調査・南東から）
第１号墳（平成４年度調査・北東から）
図版７　第１号墳石室（南から）
第１号墳石室（西から）
図版８　第１号墳　葺石崩落状況（昭和61年度調査）
第１号墳　葺石崩落状況（平成元年度調査）
第１号墳　葺石崩落状況（平成４年度調査）
第１号墳　南東側周堀（昭和61年度調査）
第１号墳　北東側周堀土層断面（平成４年度調査）
第１号墳石室近景
第１号墳石室（前庭部から）
第１号墳石室　羨門部付近（東から）

図版９　第１号墳石室　玄門部付近（東から）
第１号墳石室　玄門部付近（西から）
第１号墳石室(礫床除去後)
第１号墳石室　玄室奥壁(礫床除去後)
第１号墳石室　玄室東側壁(礫床除去後)
第１号墳石室　玄室西側壁(礫床除去後)
第１号墳石室　羨道部東側壁(礫床除去後)
第１号墳石室　羨道部西側壁(礫床除去後)
図版10　第１号墳　前庭部東側葺石
第１号墳　前庭部西側葺石
第１号墳石室　刀装具出土状況
第１号墳石室　双脚足金具出土状況
第１号墳石室　鞘口・鞘尻金具出土状況
第１号墳石室　鞘口金具出土状況
第１号墳石室　鞘尻金具出土状況
作業風景
図版11　第２号墳(南から)
第２号墳(北から)
図版12　第３号墳(南から)
第３号墳石室(南から)
図版13　第２号墳　主体部(南から)
第２号墳　前庭部礫・遺物出土状況
第３号墳石室(前庭部から)
第３号墳石室　玄室東側壁
第３号墳石室　羨道部西側壁
第３号墳　前庭部東側葺石
第３号墳　前庭部西側葺石
図版14　第４号墳(南西から)
第４号墳石室(南から)
図版15　第４号墳石室　玄室奥壁
第４号墳石室　玄室西側壁
第４号墳石室(礫床除去後)
第４号墳石室　玄室奥壁(礫床除去後)
第４号墳石室　玄室東側壁(礫床除去後)
第４号墳石室　玄室西側壁(礫床除去後)
第４号墳石室　羨道部東側壁(礫床除去後)
第４号墳石室　羨道部西側壁(礫床除去後)
図版16　第５号墳(北西から)
第６号墳(南東から)
図版17　第７号墳(南東から)
第８号墳(南から)
図版18　第８号墳石室(南から)
第８号墳石室(東から)
図版19　第８号墳　北東側周堀(南東から)
第８号墳　南西側周堀(南東から)
第８号墳石室　玄室西側壁(東から)
第８号墳石室　羨道部西側壁(東から)
第８号墳　前庭部西側葺石
第８号墳石室　玄室西側壁(南から)
第８号墳石室　羨道部西側壁(南から)
第８号墳　前庭部東側葺石
図版20　第８号墳石室　玄室西側壁(礫床除去後)
第８号墳石室　人骨出土状況
第８号墳石室　鉄鏃出土状況
第８号墳　周堀内土器出土状況
第９号墳　墳丘土層断面(北西から)
第９号墳　墳丘土層断面(北東から)
第９号墳　北西側周堀
第９号墳　東側周堀

**遺　物**

**古墳時代**

**銅・鉄製品**

図版21　第１号墳　刀装具一括(第９図１～６)
第１号墳　第９図１・２・３
図版22　第１号墳　第９図４・５・６・７
図版23　第３号墳　第15図１
図版24　第８号墳　第25図１・２・３・４・５・６・７・８・９・10・11・12・13

**須恵器・土師器**

図版23　第１号墳　第９図８
第５号墳　第18図１
第７号墳　第20図１・２

第８号墳　第25図15表裏・16

縄文時代

土　器

図版25　第２号墳　第29図１

第４号墳　第35図３

石　器（打製石斧・石鏃）

図版30　第１号墳　第27図１・２

第８号墳　第37図１・２

平安時代

須恵器・土師器・灰釉陶器

図版25　第１号墳　第27図５・６・13・27

第28図29・30・31・33

図版26　第２号墳　第29図29・32・35

第30図48・49・67・70

第31図98・99

図版27　第３号墳　第33図１・５・８墨書・13・26・30

第34図54

図版28　第１号墳　第27図15・16・18・19・20・23・24・25

第２号墳　第30図72・73・74・75

第31図78・79・80・85・86・87・88・90・91

図版29　第３号墳　第33図31・32・33・34・35・36・37・38

第34図39・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53

土製品（土錘）

図版29　第１号墳　第28図34・35・36

第３号墳　第34図60・61

鉄製品（刀子・鉄斧・鉄釘）

図版30　第２号墳　第32図104・105・106・107

石製品（軽石・砥石）

図版30　第１号墳　第28図37

第８号墳　第37図３

中・近世

陶　器

図版27　第７号墳　第36図２・３

第８号墳　第37図４・４内面

石製品（板碑？）

図版30　第２号墳　第32図108

# Ⅰ　発掘調査の概要

## 1　調査に至る経過

昭和61年７月８日付けで熊谷市土地区画整理西部事務所長より、籠原中央第一区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在及び試掘に関する依頼書が提出された。熊谷市教育委員会では、事業地内には周知の埋蔵文化財が所在する旨を回答し、遺跡の範囲確認調査を実施した。その結果、平安時代から中・近世にかけての集落跡及び古墳時代末期の古墳群が分布することが確認された。この結果を踏まえ、熊谷市教育委員会教育長から土地区画整理西部事務所長あてに次のように通知した。

区画整理事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（籠原裏遺跡、籠原裏古墳群）が所在する。当該地は開発計画予定地から除外し、現状保存することが望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第57条の３の規定により文化庁長官へ埋蔵文化財発掘届けを提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。なお、発掘調査を実施する場合には、事前に当教育委員会及び埼玉県教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第57条の３の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、熊谷市長より以下の通り提出された。

昭和61年度　昭和61年７月17日付け熊教社発第628号
昭和62年度　昭和62年９月７日付け熊教社発第748号
昭和63年度　平成元年２月10日付け熊教社発第1291号
平成元年度　平成元年10月７日付け熊教社発第708号
平成４年度　平成４年10月12日付け熊教社発第653号

発掘調査は、昭和61・62・63・平成元・４年度の計５回実施された。文化財保護法第98条の２の規定に基づく発掘調査に関わる熊谷市教育委員会からの通知及び文化庁からの通知は、以下のとおりである。

昭和61年度（第１次調査）　昭和61年７月17日付け61熊教社発第629号
　　昭和61年10月29日付け61委保記第２―3576号
昭和62年度（第２次調査）　昭和62年９月７日付け62熊教社発第749号
　　昭和63年７月８日付け63委保記第２―906号
昭和63年度（第３次調査）　平成元年２月10日付け63熊教社発第1290号
　　平成元年３月27日付け元教文第３―319号
平成元年度（第４次調査）　平成元年10月７日付け元熊教社発第707号
　　平成２年５月21日付け元委保記第５―5647号
平成４年度（第５次調査）　平成４年10月12日付け４熊教社発第652号
　　平成５年４月16日付け４委保記第５―6900号

## 2　発掘調査・報告書作成の経過

### (1)　発掘調査

昭和61年度（第１次調査）

発掘調査は、昭和61年８月１日から10月15日まで行った。調査面積は、A・B区（第１・２区）あわせて2,694㎡である。８月初旬から重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代末期の古墳や平安時代の遺構・遺物が検出された。８月中旬から９月中旬にかけて作業員による遺構の発掘作業を行い、９月下旬から遺構図面を作成し、10月中旬に完掘写真の撮影を行った。

昭和62年度（第２次調査）

発掘調査は、昭和62年11月12日から昭和63年３月７日まで行った。調査面積は、A・B区(第３・４区)あわせて1,100㎡である。11月中旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代末期の古墳や平安時代から中・近世までの遺構・遺物が検出された。12月初旬から２月上旬にかけて遺構発掘作業を行い、２月中旬から遺構図面を作成し、３月初旬に完掘写真及び航空写真撮影を行った。

昭和63年度（第３次調査）

発掘調査は、平成元年２月８日から３月31日まで行った。調査面積はA区（第５区）、B区（第１区）あわせて540㎡である。２月上旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代末期の古墳や平安時代から中・近世までの遺構・遺物が検出された。２月中旬から３月上旬にかけて遺構発掘作業を行い、３月中旬から遺構図面を作成し、３月下旬に完掘写真及び航空写真撮影を行った。

平成元年度（第４次調査）

発掘調査は、平成元年10月９日から平成２年１月29日まで行った。調査面積は、A区(第６区)、B区（第１区）あわせて900㎡である。10月上旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代末期の古墳や平安時代から中世までの遺構・遺物が検出された。10月下旬から12月中旬にかけて遺構発掘作業を行い、12月下旬から遺構図面を作成し、１月下旬に完掘写真及び航空写真撮影を行った。

平成４年度（第５次調査）

発掘調査は、平成４年11月10日から平成５年１月７日まで行った。調査面積は100㎡である。11月中旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代末期の古墳や平安時代から中・近世までの遺構・遺物が検出された。11月下旬から12月中旬にかけて遺構発掘作業を行い、12月下旬から遺構平面図を作成し、１月初旬に完掘写真撮影を行った。

### (2)　整理・報告書作成

整理作業は、平成16年度４月から平成17年３月まで実施した。第１四半期は、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第２四半期は、遺物の実測・トレース、遺構のトレースを開始し、第３四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第４四半期に入ると、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け・編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、校正を行い、３月末日に報告書を刊行した。

## 3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

(1)　発掘調査

昭和61年度（第１次調査）

教育長　関根　幸夫
教育次長　岡田　　詮
社会教育課長　茂木　　優
社会教育課長補佐　高田　普通
社会教育課振興係長　北　　俊明
主査　山川　　建
主事　寺社下　博
主事　金子　正之
主事　米澤ひろみ

昭和62年度（第２次調査）

教育長　関根　幸夫
教育次長　岡田　　詮
社会教育課長　茂木　　優
社会教育課長補佐　高田　普通
社会教育課振興係長　北　　俊明
主任　森田　博明
主任　平井加余子
主任　米澤ひろみ
主任　金子　正之

昭和63年度（第３次調査）

教育長　関根　幸夫
教育次長　岡田　　詮
社会教育課長　高田　普通
社会教育課長補佐　小林　武夫
社会教育課振興係長　北　　俊明
主査　森田　博明
主任　米澤ひろみ
主任　金子　正之
主事　権田　宣行

平成元年度（第４次調査）

教育長　関根　幸夫
教育次長　島田　和男
社会教育課長　高田　普通
社会教育課長補佐　岡田　伸洋
社会教育課文化財保護係長　金子　正之
主事　権田　宣行
主事　吉野　　健

平成４年度（第５次調査）

教育長　関根　幸夫
教育次長　大久保道夫
社会教育課長　坂巻　　篤
社会教育課長補佐　翠田　晴夫
社会教育課文化財保護係長　金子　正之
主事　権田　宣行
主事　吉野　　健

(2)　整理・報告書作成事業

平成16年度

教育長　飯塚誠一郎
教育次長　増田　和己
社会教育課長　平井　　隆
社会教育課担当副参事　岩本　克昌
社会教育課長補佐　並木　博雄
社会教育課文化財保護係主幹兼係長　金子　正之
主査　寺社下　博
主査　吉野　　健
主任　松田　　哲
主事　松村　　聡

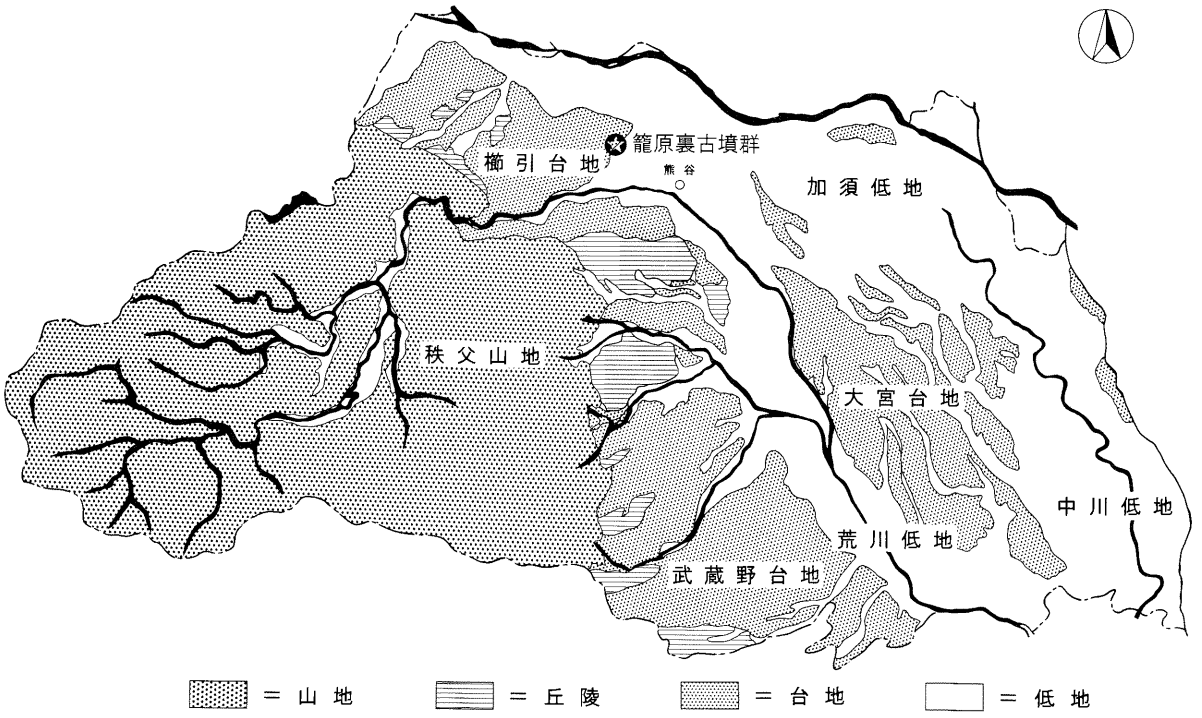
# II　遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置している。市の南側には荒川、北側には妻沼町を挟んで利根川がそれぞれ西から南東方向に向って流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には、市の西側に櫛引台地、東側に妻沼低地が広がっているが、市の大半が妻沼低地上にある（第１図）。

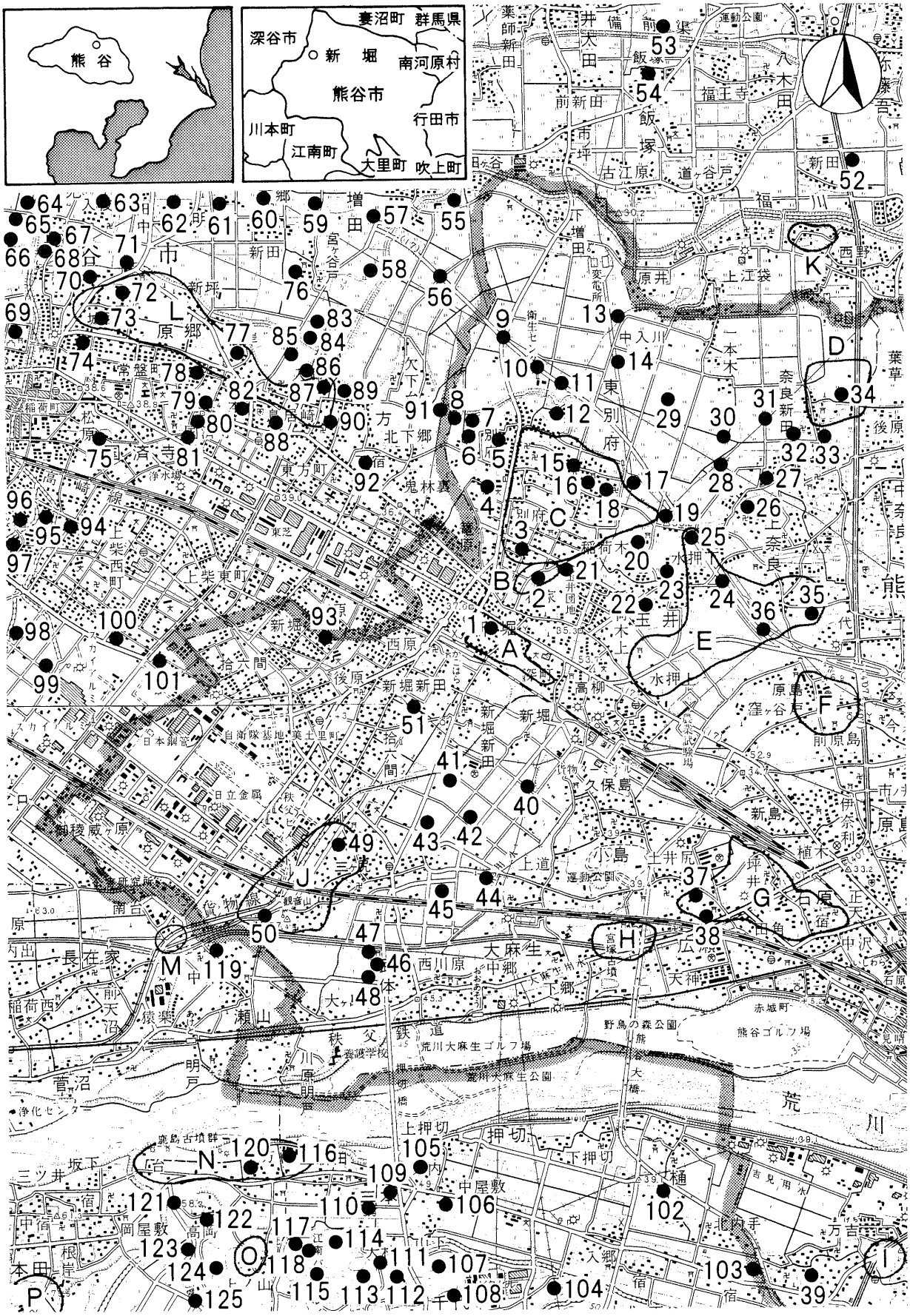
櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで、妻沼低地に向って緩やかに下っていく。また、三ヶ尻や西別府地区では、台地裾にかつて湧水地が多数あったという。

櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する川本町の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛引台地南東端には、丘陵地である観音山（標高81m、第３紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mを測る。

今回報告する籠原裏古墳群は、標高約37mの櫛引台地東端縁辺部の平坦面に立地している。熊谷市西部の新堀地区に所在し、すぐ西側には深谷市が隣接する。古墳群はJR高崎線籠原駅前北側、国道17号線との間約350mの間に広がっており、同所には平安時代から中･近世までの集落跡である籠原裏遺跡（１）も所在している。この辺り一帯は、関東造盆地運動による地盤の沈降及び河川の氾濫等の影響を受け、ローム層までは厚い表土層に覆われており、現地表面から関東ローム層までは深い所で約1.8mを測る。そのため、今回報告する籠原裏古墳群中には、墳丘までもが覆われていたものもみられ、残存状態は良好であった。なお、籠原裏古墳群は現在までに10基が確認されているが、今回報告するのは１～９号墳




第１図　埼玉県の地形図




第２図　周辺遺跡分布図

であり、10号墳については既に報告済みである（籠原裏遺跡調査会2000）。

次に籠原裏古墳群周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は、本古墳群と同所に所在する籠原裏遺跡から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。その他には、荒川右岸の江南台地上に立地する江南町西原遺跡（115）以外にみられない。

縄文時代は早期段階まで溯る。荒川右岸では多数遺跡がみられるが、本遺跡周辺では櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（89）において、早期の尖頭器が検出されているのみである。前期になると遺跡数も次第に増えはじめ、台地のみならず低地上からも寺東遺跡（17）などの集落跡が確認されている。中期は遺跡数が非常に多くなり、特に中期後半、加曽利Ｅ式期のものが多い。前期同様、台地及び低地上からも集落跡が確認されているが、特に櫛引台地北東端及び台地下の妻沼低地自然堤防上に集中する。隣接する深谷市でも集落跡が多数確認されているが、自然堤防上にあるものが多い。後期になると遺跡数は減少するが、中期同様、櫛引台地北東端及び台地下の自然堤防上に立地する。深谷市内においても台地縁辺部及び台地下の自然堤防上から遺跡が確認されている。晩期はさらに遺跡数が減少する。地図中には示せなかったが、市内では近年、市東部の低地上に立地する諏訪木遺跡で集落跡が確認されたが、その他にはみられない。深谷市では低地上にいくつかの遺跡が認められる。上敷免遺跡（63）では、晩期でも終末の浮線文土器片が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代については、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。遺跡は、縄文時代中期以降集落が営まれている櫛引台地北東端部及び台地下の自然堤防上に集中している。

特筆すべき事項としては、自然堤防上に位置する横間栗遺跡（10）から前期末～中期前半の再葬墓が13基確認されたことが挙げられる。再葬墓一括資料は、1999年３月に埼玉県指定になっている。横間栗遺跡の南東に位置する関下遺跡（11）では、弥生時代中期中頃の竪穴住居跡が確認され、南側に隣接する石田遺跡（12）からも同時期の遺構と遺物が検出されており、集落跡が広がっているのかもしれない。また地図中には示せなかったが、市東部では東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡やその墓域とされる行田市小敷田遺跡などがある。深谷市では自然堤防上にいくつか遺跡がみられ、上敷免遺跡では横間栗遺跡と同時期の再葬墓が確認されている。また包含層からではあるが、県内では初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期後半以降は、市東部では北島遺跡、前中西遺跡などがみられるが、西部では確認例が少なく、深谷市では明戸東遺跡（59）など後期の遺跡が自然堤防上においていくつか点在するだけである。

古墳時代になると、自然堤防上への進出がより活発化する。前期は本遺跡周辺では確認例がやや少な

**第１表　周辺古墳群一覧表**

| No. | 遺跡名 | 時代 | No. | 遺跡名 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 熊谷市 | | J | 三ヶ尻古墳群 | 古墳後 |
| A | 籠原裏古墳群 | 古墳末 | | 妻沼町 | |
| B | 在家古墳群 | 古墳後 | K | 上江袋古墳群 | 古墳後 |
| C | 別府古墳群 | 古墳後 | | 深谷市 | |
| D | 奈良古墳群 | 古墳中期後～末 | L | 木の本古墳群 | 古墳後 |
| E | 玉井古墳群 | 古墳後 | | 川本町 | |
| F | 原島古墳群 | 古墳後 | M | 長在家古墳群 | 古墳末 |
| G | 石原古墳群 | 古墳後 | N | 鹿島古墳群 | 古墳後～末 |
| H | 広瀬古墳群 | 古墳末 | O | 清水山古墳群 | 古墳後 |
| I | 村岡古墳群 | 古墳後 | P | 上大塚古墳群 | 古墳後 |

## 第２表　周辺遺跡一覧表

| No. | 遺　跡　名 | 時　　代 | No. | 遺　跡　名 | 時　　代 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 熊　谷　市 | | 63 | 上敷免遺跡 | 縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安 |
| 1 | 籠原裏遺跡 | 縄文、古墳後、平安、中・近世 | 64 | No.142遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 2 | 在家遺跡 | 古墳後、奈良・平安 | 65 | 皿沼西遺跡 | 古墳前、平安 |
| 3 | 別府三丁目遺跡 | 奈良・平安 | 66 | No.145遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 4 | 大竹遺跡 | 古墳後、奈良・平安 | 67 | 皿沼城跡 | 中世 |
| 5 | 西別府館跡 | 平安末～中世 | 68 | No.180遺跡 | 弥生中、古墳後、奈良・平安 |
| 6 | 西別府廃寺 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 | 69 | 深谷城跡 | 古墳前、平安、中・近世 |
| 7 | 西方遺跡 | 奈良・平安、中・近世 | 70 | 城西遺跡 | 奈良・平安 |
| 8 | 西別府祭祀遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 | 71 | 八日市遺跡 | 縄文晩、古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 9 | 根絡遺跡 | 縄文中、古墳前・後、奈良・平安 | 72 | 伝幡羅館跡 | 中世 |
| 10 | 横間栗遺跡 | 縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良・平安、近世 | 73 | No.194遺跡 | 古墳後 |
| 11 | 関下遺跡 | 縄文中、弥生中、古墳後 | 74 | No.195遺跡 | 古墳後 |
| 12 | 石田遺跡 | 縄文中・後、弥生中、古墳前 | 75 | No.250遺跡 | 奈良・平安 |
| 13 | 入川遺跡 | 縄文後、古墳前・後 | 76 | 宮ヶ谷戸遺跡 | 縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 14 | 深町遺跡 | 縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安 | 77 | 根岸遺跡 | 縄文中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 15 | 埋鳥遺跡 | 縄文中、奈良・平安 | 78 | 常磐町東遺跡 | 縄文前・中、古墳後 |
| 16 | 別府城跡 | 平安、中世 | 79 | No.199遺跡 | 縄文中、古墳後、奈良・平安 |
| 17 | 寺東遺跡 | 縄文前～後 | 80 | No.198遺跡 | 平安 |
| 18 | 別府氏館跡 | 平安末～中世 | 81 | 庁鼻和城跡 | 中世 |
| 19 | 稲荷東遺跡 | 古墳後、奈良・平安 | 82 | No.200遺跡 | 古墳後 |
| 20 | 玉井陣屋跡 | 平安末～中世 | 83 | No.249遺跡 | 奈良・平安 |
| 21 | 五反畑遺跡 | 中世 | 84 | No.189遺跡 | 奈良・平安 |
| 22 | 稲荷木上遺跡 | 古墳後 | 85 | No.190遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 23 | 水押下遺跡 | 古墳後 | 86 | 城下遺跡 | 縄文中・後、古墳後、平安、中・近世 |
| 24 | 下河原中遺跡 | 奈良・平安 | 87 | 杉町遺跡 | 縄文中、古墳後、奈良・平安 |
| 25 | 新ヶ谷戸遺跡 | 古墳後、奈良・平安 | 88 | No.202遺跡 | 縄文中、古墳後、奈良・平安 |
| 26 | 奈良氏館跡 | 平安末～中世 | 89 | 東方城跡 | 縄文早・後、中世 |
| 27 | 土用ケ谷戸遺跡 | 古墳後、奈良・平安 | 90 | No.203遺跡 | 奈良・平安、中世 |
| 28 | 天神下遺跡 | 古墳前・後、奈良・平安 | 91 | 幡羅遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 29 | 別府条里遺跡 | 奈良・平安 | 92 | No.204遺跡 | 縄文中・後、古墳後、奈良・平安 |
| 30 | 一本木前遺跡 | 古墳前・後、奈良・平安、中・近世 | 93 | No.205遺跡 | 古墳前 |
| 31 | 中耕地遺跡 | 縄文中、古墳前・後、奈良・平安 | 94 | No.88遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 32 | 西通遺跡 | 古墳後 | 95 | No.87遺跡 | 縄文後 |
| 33 | 東通遺跡 | 古墳後 | 96 | 桜ケ丘組石遺跡 | 縄文後 |
| 34 | 横塚遺跡 | 古墳前、平安 | 97 | No.208遺跡 | 縄文中、古墳前・後、平安 |
| 35 | 本代遺跡 | 古墳後、近世 | 98 | No.93遺跡 | 縄文中・後、古墳後、奈良・平安 |
| 36 | 下河原上遺跡 | 近世 | 99 | No.94遺跡 | 縄文中・後 |
| 37 | 高根遺跡 | 縄文前、古墳後、平安、中・近世 | 100 | No.207遺跡 | 縄文中 |
| 38 | 不二ノ腰遺跡 | 奈良・平安 | 101 | No.206遺跡 | 縄文中 |
| 39 | 万吉西浦遺跡 | 縄文中、古墳、平安、近世 | | 江　南　町 | |
| 40 | 東遺跡 | 平安、中世 | 102 | 宮前遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 41 | 樋ノ上遺跡 | 縄文前・中、古墳後、奈良・平安、中・近世 | 103 | 宿遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 42 | 黒沢館跡 | 中世 | 104 | 上前原遺跡 | 縄文早～後 |
| 43 | 若松遺跡 | 中・近世 | 105 | 堀ノ内遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 44 | 庚申塚遺跡 | 近世 | 106 | 中屋敷遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 45 | 松原遺跡 | 中・近世 | 107 | 宮下遺跡 | 縄文早、古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 46 | 社裏遺跡 | 中世 | 108 | 東原遺跡 | 縄文早～中、中世 |
| 47 | 社裏北遺跡 | 中世 | 109 | 新屋敷遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中・近世 |
| 48 | 社裏南遺跡 | 中世 | 110 | 大林遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 49 | 三ヶ尻遺跡 | 縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世 | 111 | 権現坂埴輪窯跡 | 古墳後 |
| 50 | 森遺跡 | 古墳後 | 112 | 権現坂遺跡 | 縄文前・中、古墳中・後 |
| 51 | 拾六間後遺跡 | 古墳後、奈良・平安、中世 | 113 | 北方遺跡 | 縄文早 |
| | 妻　沼　町 | | 114 | 冨士山遺跡 | 縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良 |
| 52 | 弥藤吾新田遺跡 | 古墳前・中 | 115 | 西原遺跡 | 旧石器、縄文前～後、奈良・平安 |
| 53 | 飯塚北遺跡 | 弥生中、古墳後、奈良・平安 | 116 | 新田裏遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 54 | 飯塚遺跡 | 弥生中、古墳後、奈良・平安 | 117 | 姥ヶ沢遺跡 | 縄文早～後、弥生後、古墳前・後 |
| | 深　谷　市 | | 118 | 姥ケ沢埴輪窯跡 | 古墳後 |
| 55 | 前遺跡 | 古墳前、奈良・平安、中世 | | 川　本　町 | |
| 56 | 清水上遺跡 | 縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良・平安 | 119 | 大門遺跡 | 奈良・平安 |
| 57 | 原遺跡 | 縄文後・晩、古墳後 | 120 | 鹿島平方裏遺跡 | 古墳後、奈良・平安 |
| 58 | 東川端遺跡 | 古墳前・後、奈良・平安 | 121 | 山之越遺跡 | 縄文後 |
| 59 | 明戸東遺跡 | 縄文中・後、弥生後、古墳後、奈良・平安 | 122 | 舟山遺跡 | 縄文早～後、中世 |
| 60 | 新田裏遺跡 | 古墳中、弥生後、奈良・平安、中世 | 123 | 竹ノ花遺跡 | 縄文早・前、奈良・平安 |
| 61 | 新屋敷東遺跡 | 縄文中、古墳後、奈良・平安 | 124 | 荷鞍ケ谷戸遺跡 | 縄文後 |
| 62 | 本郷前東遺跡 | 縄文後、古墳後、奈良・平安 | 125 | 諦光寺廃寺 | 奈良・平安 |

いが、一本木前遺跡（30）では、90数軒という膨大な数の住居跡の他に4基の方形周溝墓等も確認されている。特筆すべき事項としては、2号方形周溝墓の主体部からヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が検出されたことが挙げられる。なお、住居跡群と周溝墓群には若干の時期差が存在し、集落跡が古く、周溝墓群が新しいことが判明している。深谷市では、東川端遺跡（58）をはじめとして自然堤防上で集落跡、方形周溝墓等が確認されている。中期は、本遺跡周辺では5世紀末の古墳として市の指定史跡になっている横塚山古墳（D：奈良古墳群）があるのみである。B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。市北東部では、北島遺跡、中条遺跡、中条古墳群周辺などで確認例がみられる。後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、自然堤防上にも多数営まれるようになる。そして、これらの集落跡は奈良・平安時代へと継続して営まれるものが多い。古墳は群として形成され、今回報告する籠原裏古墳群の他にも多数の古墳群が台地及び自然堤防上に築造されている。荒川左岸の櫛引台地上には、籠原裏古墳群（A）、在家古墳群（B）、別府古墳群（C）、三ヶ尻古墳群（J）、川本町長在家古墳群（M）、自然堤防上には、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、広瀬古墳群（H）、石原古墳群（G）、妻沼町上江袋古墳群（K）、深谷市木の本古墳群（L）などがあり、荒川右岸の台地上でも、埼玉県指定史跡である川本町鹿島古墳群（N）をはじめとして多数の古墳群が築造されている。また、古墳群の他にも江南町権現坂埴輪窯跡（111）、蛯ヶ沢埴輪窯跡（118）など埴輪の窯跡もみられるようになる。古墳群は概ね6世紀から7世紀ないし8世紀初頭にかけて築造されたものであるが、籠原裏古墳群と同じく埴輪を待たない古墳時代末期の古墳群としては、在家古墳群や玉井古墳群、広瀬古墳群などがある。

市内の古墳群で特筆すべきことは、今回報告する籠原裏古墳群では、墳形が八角形を呈する古墳時代末期の八角墳が検出されたことや、地図中には示せなかったが、市中央部にある肥塚古墳群では埋葬施設に荒川水系の石材である河原石を使用した古墳と利根川水系の角閃石安山岩を使用した古墳が混在すること、また、広瀬古墳群（I）中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な形態をしていること（昭和38年に国指定史跡）などが挙げられる。特に今回報告する籠原裏古墳群は、後述する深谷市幡羅遺跡（91）や熊谷市西別府廃寺（6）、西別府祭祀遺跡（8）などといった郡衙及び郡衙と関連があると思われる遺跡と時期的・地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群といえる。

律令体制の始まる奈良・平安時代は、本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市西部、深谷市東部、妻沼町等を含む一帯が該当すると考えられている。深谷市幡羅遺跡では、平成13年に郡衙の正倉と推定される大型建物群が確認され、幡羅郡衙推定地として確認調査が開始されている。その結果、これまでに20数棟の大型正倉建物群や区画大溝などが確認されている。郡庁や館、厨などの施設は未確認であるが、熊谷市西別府廃寺や西別府祭祀遺跡も含めてこの地域一帯は、当時の中心地だったことが徐々に明らかになってきている。

集落跡は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。また本遺跡周辺の集落跡から出土する須恵器は、武蔵国四大窯跡の1つである寄居町末野窯跡産のものを多く含む傾向にあり、鳩山町南比企窯跡産を主体とする市内東部の遺跡とは様相が異なっている。

集落跡以外で注目すべき遺跡としては、前述の西別府廃寺と西別府祭祀遺跡がある。両遺跡は、櫛引

台地北東端の市内北西部西別府地区に所在する。西別府廃寺は、8世紀初頭に創建された県内でも古い寺院跡であり、平成2・4年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には9世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺の北西部の台地縁辺部に位置し、湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは、土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺での祭祀に用いられたと考えられている。平成4年度におこなわれた発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、平安時代の終わり頃まで祭祀遺跡として存続していたものと思われる。

西別府廃寺及び西別府祭祀遺跡と深谷市幡羅遺跡は、時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白であり、今後実施される確認調査によって詳細がさらに判明してくるものと思われる。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになるが、その実態は不明なものが多い。本遺跡の北東にある別府城跡（16）は、別府氏の居館で現在も土塁と空堀が一部残っている。また、市内では南西部の三ヶ尻地区で中世の遺跡や遺構が比較的多く確認されている。中でも黒沢館跡（42）は、発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口跡等が検出され、渡辺崋山が記した文献『訪瓢録（ほうへいろく）』所収の「黒沢屋敷」と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。また、周辺に所在する樋ノ上遺跡（41）、若松遺跡（43）、社裏遺跡（46）、社裏北遺跡（47）、社裏南遺跡（48）からは、埋葬跡が多数検出されている。深谷市では、皿沼城跡（67）、深谷城跡（69）、庁鼻和城跡（81）、東方城跡など城跡が多数確認されている。

近世については、櫛引台地北東縁辺部に立地する西方遺跡（7）から墓地群が確認されている。西方遺跡をはじめとしていくつか例がみられるが、中世同様、不明な点が多いのが実状である。

# III　遺跡の概要

## 1　調査の方法

発掘調査は、昭和61年度から昭和62年度、昭和63年度、平成元年度、平成４年度の計５回実施された。すべての調査において、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。そして、各調査区内に一辺５ｍのグリッド方式を用いて全体を網羅できる様にし、調査区北西隅をＡ－１として南へＡ・Ｂ・Ｃ…、東へ１・２・３…とし、Ａラインは西から東へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３…と呼称した。Ｂライン以南もＡラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行っていった。なお、実測作業を行うにあたってはグリッド交点に設定した杭を基準に水糸による１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

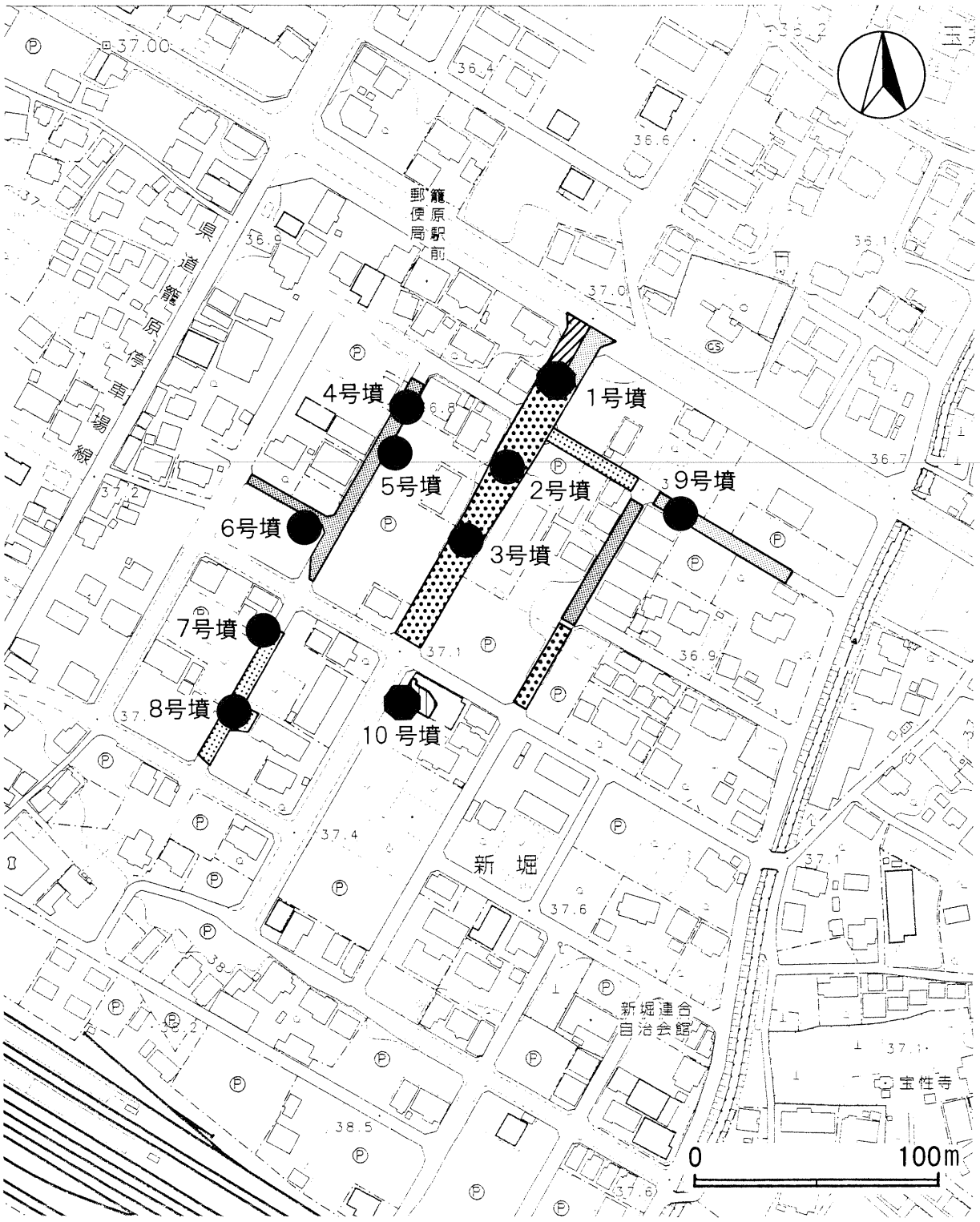
## 2　検出された遺構と遺物

籠原裏古墳群は現在までに10基の古墳が確認されているが、第II章でも述べたとおり、10号墳については既に報告済みである（籠原裏遺跡調査会2000）。よって、今回報告するのは１～９号墳である。

古墳が検出された調査区は、第１・４～６区である。昭和61年度調査（第１区）では３基（１～３号墳）、62年度調査ではＢ区（第４区）から３基（４～６号墳）、63年度調査ではＡ区（第５区）から２基（７・８号墳）が検出された。平成元年度調査ではＡ区（第６区）から１基（９号墳）、Ｂ区（第１区）から１基の計２基が検出されたが、後者は昭和61年度に調査した１号墳の北東部にあたり、平成４年度調査で検出した１基も１号墳の北西部にあたる。よって、検出された古墳は全調査区を通して９基である。

発掘調査は区画整理に伴う街路築造部分のみであるため、古墳の全形を検出したものはない。１～３号墳は主体部を含むほぼ全形が検出されたが、東西の周堀ないし墳丘の一部が調査区外にある。なお、１号墳は前述のとおり、３回の発掘調査によってほぼ全形を検出することとなった。４・８号墳は主体部及び墳丘の大半は検出されたが、４号墳は墳丘及び周堀の東側、８号墳は墳丘東側及び東西の周堀の大半が調査区外にある。５・６号墳は周堀のみ検出された。５号墳は西側、６号墳は北側のみの検出である。７号墳は主体部及び前庭部の東側と周堀南東部のみ検出された。９号墳は墳丘を表土掘削時に削平してしまったため、検出できたのは周堀の北西部と東側の一部のみである。本古墳群は同所に所在する籠原裏遺跡の遺構に所々を切られており、特に７号墳は中・近世の遺構に激しく破壊されていた。

第II章でも述べたとおり、本古墳群はその立地環境から墳丘の残存するものがみられた。墳丘が検出された古墳は、１～４・８号墳である。墳丘はすべて頂部が削平されており、下段のみ検出された。低いもので約0.5m、高いもので約１ｍ残存していた。規模は１・８号墳が10m以上を測り、他の古墳に比べてやや大きい。その他の古墳は８ｍ前後であった。平面形態は円墳が主体となるが、１号墳のみ八角形を呈する八角墳であった。１号墳は周堀も含めて平面形態が八角形を呈するものの、やや丸味を帯びる箇所がみられることから正八角形にはならない。八角墳は全国的にも類例の少ないものであり、貴重な資料といえる。２号墳は残存する葺石から墳丘を復元すると多角形状を呈するが、規則性がみられな




= 昭和61年度調査区
= 昭和62年度調査区
= 昭和63年度調査区
= 平成元年度調査区
= 平成4年度調査区
= 平成11年度調査区
（籠原裏遺跡調査会）

第3図　調査地点位置図

いため、円墳に範疇に入るものと思われる。

各古墳の外部施設には葺石と周堀がみられた。埴輪列はいずれの古墳からも検出されていない。

葺石は墳丘の残存する古墳から検出されたが、そのほとんどが崩落しており、原位置を保っていたものは少ない。葺石には河原石が使用され、大きさは主体部に使用されたものより一回り小さい。

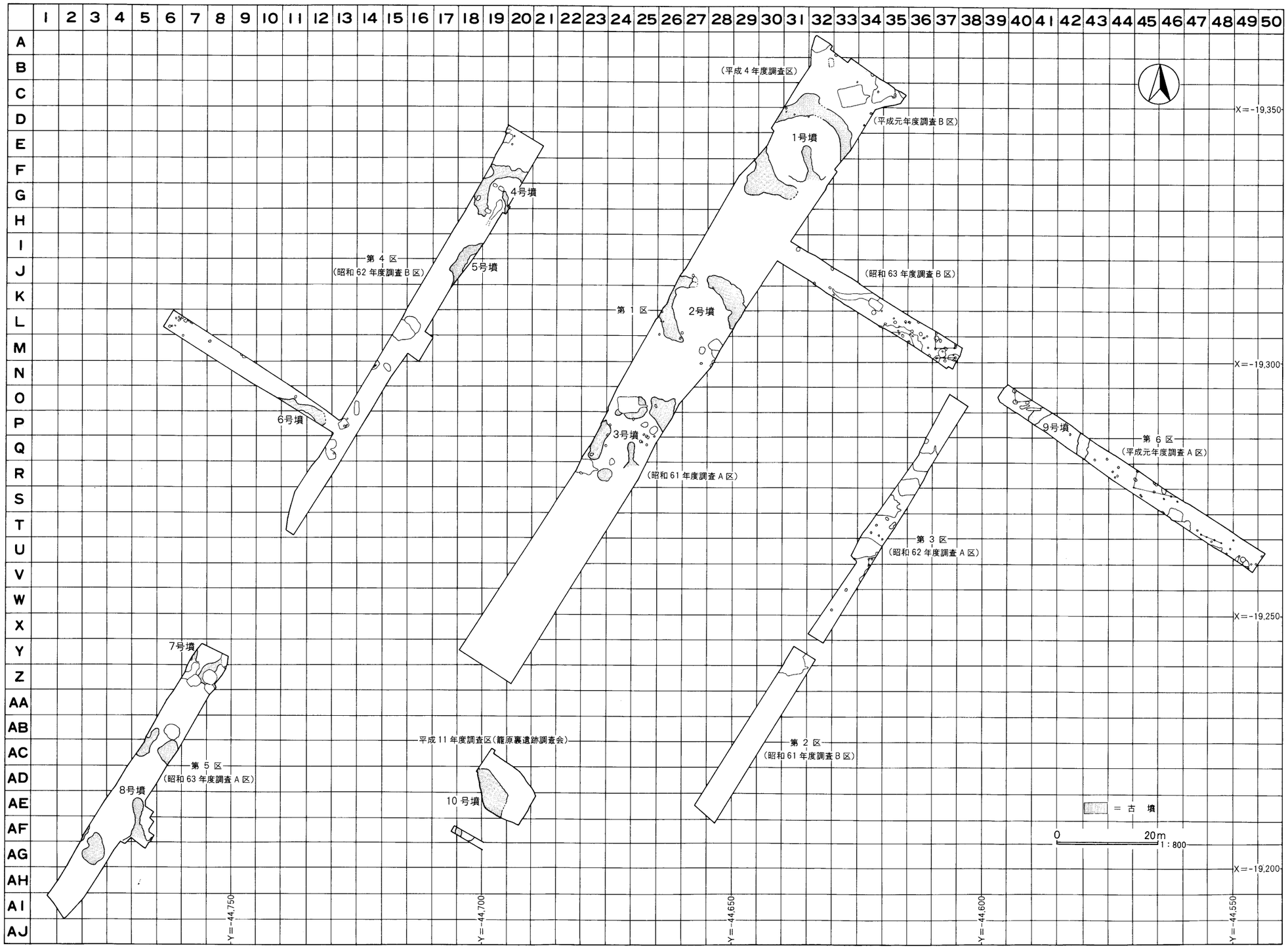
周堀はすべての古墳において確認されたが、全周するものと所々で途切れるものの二者がみられた。前者には1・4～7・9号墳、後者には2・3・8号墳が該当し、概して大型の部類に入る古墳の周堀が途切れる傾向にある。ただし、八角墳である1号墳は大型の部類に入るが、周堀が途切れず全周していた。また、周堀の北側と南西部には八角形の稜角の延長線上に張り出し部を有していた。主体部前はいずれの古墳もすべて陸橋となっている。このうち、2・4号墳は他の古墳に比べて幅広であった。

主体部は、1・3・4・7・8号墳で検出された。それぞれ欠損箇所があるものの、7号墳以外はほぼ全形を検出することができた。いずれも荒川中流域にみられる河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。天井部は残存していない。4号墳のみ奥壁が縦長の緑泥片岩一枚で構築されていた。石室には掘り方を持つものと持たないものがみられた。前者には3・8号墳、後者には1・2・4・7・9号墳が該当する。なお、2号墳は主体部を著しく破壊されており、根石が僅かに残るだけであったが、その痕跡から他と同じく河原石による胴張り型の横穴式石室であったと思われる。また、9号墳も墳丘同様、主体部を検出できなかったが、その痕跡から胴張り型の横穴式石室であったと思われる。

古墳に伴う遺物は、鉄・銅製品（刀装具、鉄鏃、刀子、不明鉄製品など）や土器（須恵器、土師器）などがあるが、検出数は少ない。また、人骨が検出された古墳は少なく、1・8号墳の石室から骨片が僅かに検出されただけである。遺物の出土した古墳は、1・3・5・7・8号墳の5基であり、2・4・6・9号墳からは古墳に伴う遺物は全く検出されなかった。

1号墳では、大刀自体は検出されなかったが、刀装具(鉄製鵐目金具、鞘口金具、責金具、鞘尻金具、銅製双脚足金具）が石室からまとまって検出された。その他にも墳丘から須恵器平瓶の口縁部片や先端が片刃状を呈する不明鉄製品が出土した。3号墳では、石室から鉄鏃、前庭部から内面に放射状暗文を有する土師器坏が出土した。5号墳では周堀から土師器甕の底部が検出された。7号墳では周堀から須恵器蓋、前庭部から須恵器壺の肩部片が検出された。8号墳では石室から鉄鏃や刀子、不明鉄製品などの鉄製品がまとまって出土した。鉄鏃はすべて鏃身部と頸部の境に関が無く、関箆被ないし棘箆被を持つ有茎鏃である。鏃身部の形態は様々であった。また、南西側の周堀底面からは土師器坏、墳丘からは須恵器長頸瓶の頸部片、前庭部からは須恵器甕の胴部片が検出された。

各古墳からは上記の古墳に伴う遺物の他にも、他の時代の遺物が多数検出された。これらは本古墳群と同所に所在する籠原裏遺跡からの流れ込みである。遺物の時代・時期は縄文時代前・中期、古墳時代前期、平安時代、中・近世と幅広い。縄文時代前・中期の遺物は土器、石器（石鏃、打製石斧)、古墳時代前期の遺物は土師器のみ、平安時代の遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器、土製品（土錘)、鉄製品（刀子、鉄斧、鉄釘)、石製品（軽石、砥石)、中・近世の遺物は陶磁器、板碑と思われる石製品などがある。最も多く検出されたのは、籠原裏遺跡の主体となる平安時代の遺物である。平安時代の集落跡は、9世紀後半から10世紀初頭に限定されることから、遺物も同段階のものであった。


1号墳
2号墳
3号墳
4号墳
5号墳
6号墳
7号墳
8号墳
9号墳
10号墳
第1区
第2区
第3区
第4区
第5区
第6区
(平成4年度調査区)
(平成元年度調査B区)
(昭和63年度調査B区)
(昭和61年度調査A区)
(昭和61年度調査B区)
(昭和62年度調査A区)
(昭和62年度調査B区)
(昭和63年度調査A区)
(平成元年度調査A区)
平成11年度調査区(籠原裏遺跡調査会)
X=-19,350
X=-19,300
X=-19,250
X=-19,200
Y=-44,750
Y=-44,700
Y=-44,650
Y=-44,600
Y=-44,550
= 古 墳
0
20m
1:800

第4図　調査区全測図

# Ⅳ　遺構と遺物

## 1　古　墳

### 第１号墳

#### 位置・状態

第１区Ｃ～Ｇ―29～33グリッドに位置する。現在、確認されている10基の古墳のうち最北端にあり、南西約20ｍに２号墳、西側約40ｍに４号墳がある。

本墳は昭和61年度、平成元・４年度の計３回の発掘調査によってほぼ全形が検出された。主体部を含むＦライン以南を昭和61年度、Ｅ―31グリッドから北東部を平成元年度、Ｅ―32グリッドから北西部を平成４年度の調査によって検出した。周堀の北西部と南東部は調査区外にある。昭和61年度及び平成元年度調査では、他の遺構との重複関係はみられなかったが、平成４年度調査で検出した北西部では、周堀及び墳丘を籠原裏遺跡の時期不明のピット群や後世の攪乱により一部破壊されていた。

#### 墳丘・外部施設（第５・６図）

墳丘は現地表面下0.5～0.7ｍ程で確認された。墳頂部は既に削平を受けていたが、昭和61年度、平成元・４年度のいずれの調査においても約0.8～１ｍの高さで下段のみ検出された。葺石はそのほとんどが周堀内及びテラス上に崩落していたが、墳丘東側や前庭部付近（Ａ～Ｄ）では原位置を保っており、残存状態が良好であった。特に平成元年度の調査で検出した墳丘東側の葺石（Ａ～Ｂ）は残りが良く、約60度の傾斜で八～十段程積まれていた。残存する葺石から墳丘を復元すると、本墳は後述する周堀も含めて平面形態が八角形を呈する八角墳であることが確認された。墳丘裾部における八角形の一辺は約５ｍを測るが、前庭部付近をはじめやや丸みを帯びる箇所がみられたことから正八角形にはならないと思われる。本墳を八角墳と判断した根拠など詳細については、第Ⅴ章で述べることとする。

墳丘の規模は対辺間で約12ｍ、対角間で約13ｍを測る。墳丘盛土は主体部の構築にあわせて下から褐色土、黒褐色土の順でほぼ全面に盛り、その上に黄色や褐色系の土を主体部から外側へ積み重ねていた。ほとんどの層にローム粒や黒褐色粒などの混入物を含む。盛土は全体的にしまりがあまり良くない。

残存する葺石は八角形の辺に合わせて直線的かつ礫の長軸を辺に交差させる形で配置されていた。葺石はすべて河原石であり、長軸30㎝、短軸15㎝、厚さ10㎝前後を測るものが多くみられた。また、八角形の稜角に置かれた葺石は、他と比べて石材や大きさ、形などに違いはみられなかった。

周堀は現地表面下1.5ｍ程で検出された。北西部と南東部は調査区外にある。周堀もその形状からみてほぼ八角形状に全周すると思われる。主体部を挟んだ稜角（Ｃ・Ｄ）の延長線上から掘り込まれており、主体部前は陸橋となっている。周堀を含む規模は対辺間で約20ｍ、対角間で約22ｍを測る。一辺の長さは約8.4ｍ、幅は2.5ｍ前後、深さは0.7～１ｍ程を測る。舟底ないし平底を呈するが、外側の立ち上がりは緩やかで不明瞭な部分もあった。周堀南西部と北側には稜角（Ｅ・Ｈ）の延長線上に張り出し部がみられた。幅は南西部が6.8ｍ、北側が4.5ｍを測る。後者の底面には長軸1.95ｍ、短軸1.22ｍ、底面からの深さ0.12ｍを測る土坑状の掘り込みも検出された。周堀内にはローム粒やロームブロックを含む黒褐色土や暗褐色土が堆積し、その上に本古墳群及び籠原裏遺跡全体を覆う黄色土が堆積していた。この状況は後述する古墳においても同様であった。墳丘及び周堀からも埴輪の検出はみられなかった。

**主体部（第７図）**

主体部は河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。天井部は既に崩落し、玄室奥壁から東側壁は上部を欠くが、残存状態は比較的良好であった。石室の主軸はN―15°―Wを示し、南側に開口する。石室の規模は全長4.9m、玄室の長さは3.4m、幅は奥壁が0.8m、ほぼ中央の最大幅が1.9m、玄門部が１mを測る。羨道部は長さ1.6m、羨門部の幅は0.8mを測る。羨道部と玄室の比率は、ほぼ１：２の割合となる。平面形態は玄室が馬蹄形を呈し、奥壁から弧を描きながらほぼ中央で最大幅となり、玄門部に向かって直線的に狭まる。なお、玄室中央からやや北西寄りが本墳の中心となる。羨道部は玄門部から羨門部に向かって直線的に狭まり、前面にはハの字に開く前庭部が広がる。奥壁及び側壁は河原石による小口積みであり、残りの良い羨道部及び玄門部付近では約0.75mの高さまで残存していた。根石はほぼ二段であったが、奥壁付近では三段の箇所もみられた。径約20cm、厚さ５cm程の円形ないし楕円形の扁平なものが据えられており、根石の上には主に長軸35cm、短軸15cm、厚さ15cm前後を測る葺石よりやや大きめの石が積み重ねられていた。ただし、玄門部及び羨門部にはさらに大きい河原石が根石段階から配置されていた。羨門部及び玄門部の床面には、梱石として長軸30cm、短軸20cm、厚さ15cm程の河原石が長軸を南北に向けて据えられており、羨道部内には拳大、玄室内には拳大から人頭大のものを敷いて床面としていた。閉塞施設は、羨道部に梱石とほぼ同じ大きさの河原石を向きも梱石にあわせて積まれており、その間に拳大の河原石や小砂利が充塡されていた。また、羨門部や玄門部付近では緑泥片岩も若干検出されており、閉塞施設に使用されたと思われる。本墳の石室は掘り方を持たないが、石室設置箇所は墳丘構築面より若干低くなっており、石室構築に際して整地されたと思われる。

**出土遺物**

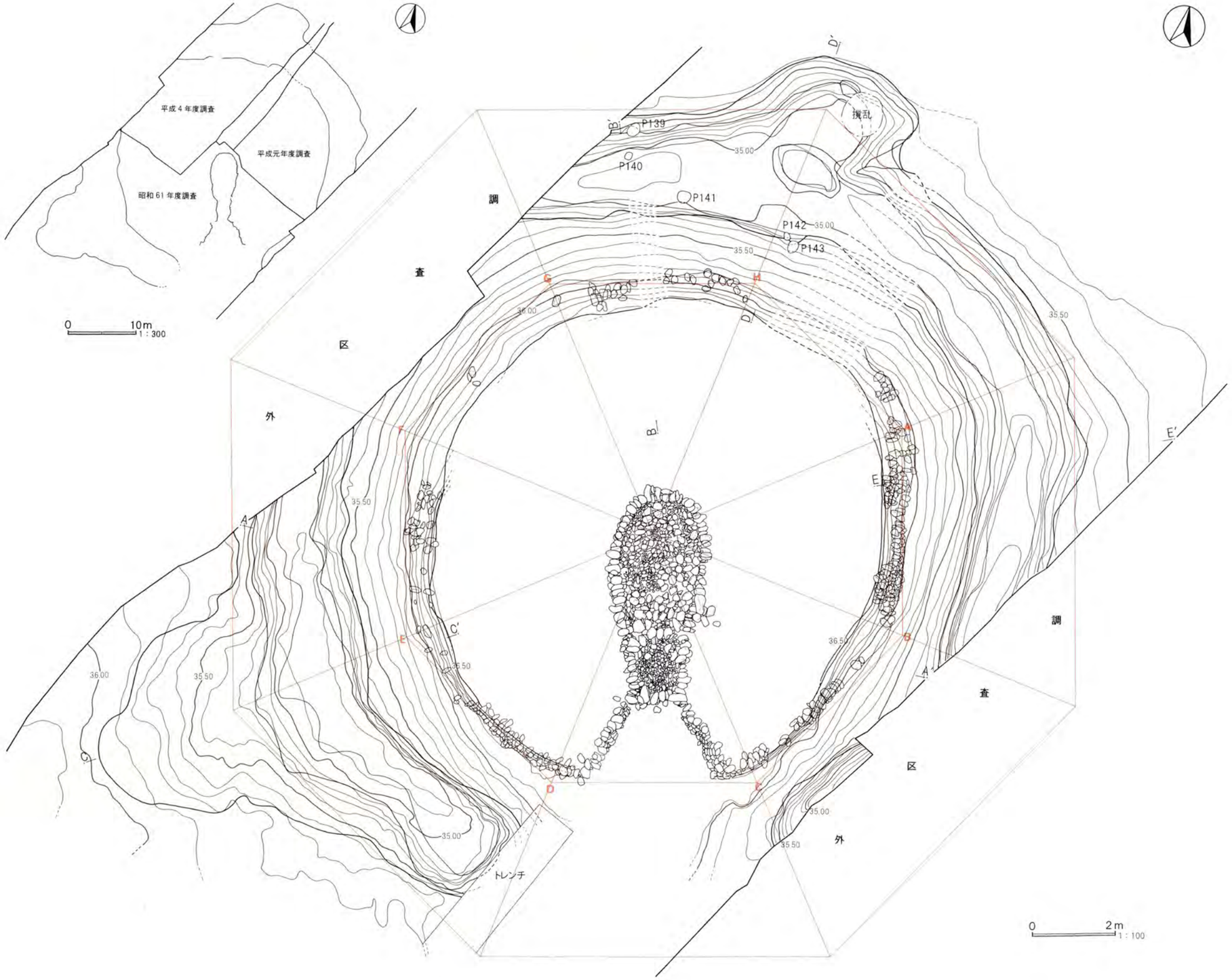
本墳に伴う遺物は少なく、そのほとんどが石室から検出された。出土遺物は、鉄・銅製品（第９図１～７）、土器（８）がある。また、石室からは人骨片も僅かではあるが検出された。

**鉄・銅製品（第９図１～７）**

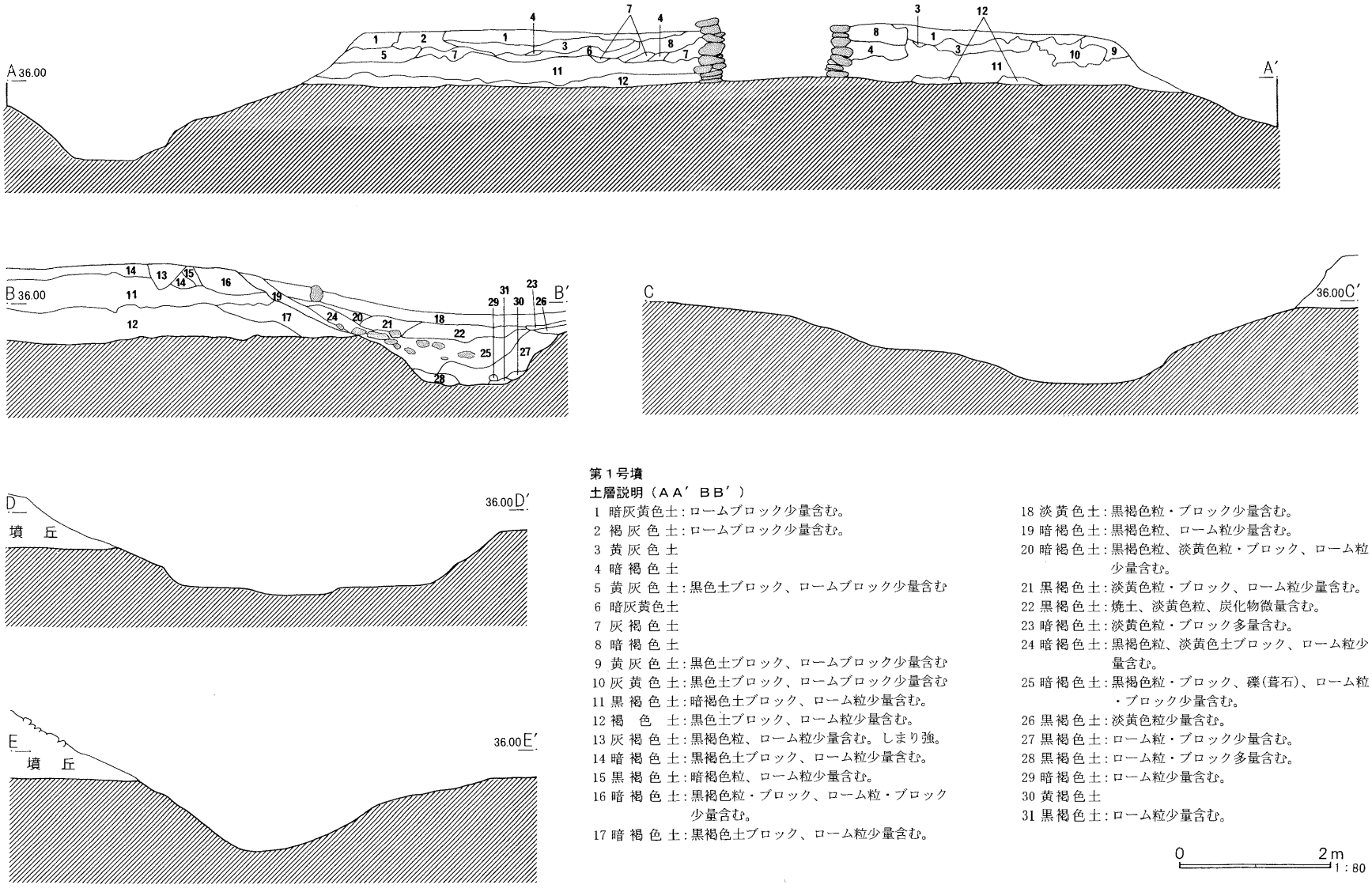
１～６は刀装具である。すべて石室玄室の西側礫床面より出土した(第８図)。本墳からは大刀そのものは検出されていないが、これらの刀装具はその特徴からみて方頭大刀に装着されていたと考えられる。１～３・５・６が鉄製、４のみ銅製である。１・２は鉄製鵐目金具。筒状を呈し、上端部が僅かに外反する。ともに完形品。１は上端部及び内面、２は上端部に継ぎ目が認められた。端部は鉄板を巻いてから造り出したと考えられる。１の外面には木質が付着していた。３は鉄製鞘口金具・鐺。佩表側を欠く。鞘口金具の内面には一部木質が付着していた。４は銅製双脚足金具。完形品。枠形櫓金に段を持ち、両側が双脚より長く張り出している。５は鉄製責金具。半分を欠く。鞘口金具の残り具合から推定すると佩裏側と考えられる。６は鉄製鞘尻金具。中央の抉りを僅かに欠く。内面には木質が付着していた。７は不明鉄製品。ＡとＢは接合関係になかったが、同一個体と思われる。幅広の板状を呈し、先端部は片刃状になっている。本墳に伴うものではない可能性もある。墳丘から出土した。

**土　器（第９図８）**

８は須恵器平瓶の口縁部片。産地は不明であるが、胎土は白っぽく、黒色粒を多量含む。外面下部にはカキ目がみられ、内外面には自然釉が僅かに付着する。墳丘から出土した。


平成４年度調査
平成元年度調査
昭和61年度調査
0
10m
1：300
調
査
区
外
P139
P140
P141
P142
P143
撹乱
35.00
35.50
36.00
トレンチ
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
0
2m
1：100

第５図　第１号墳

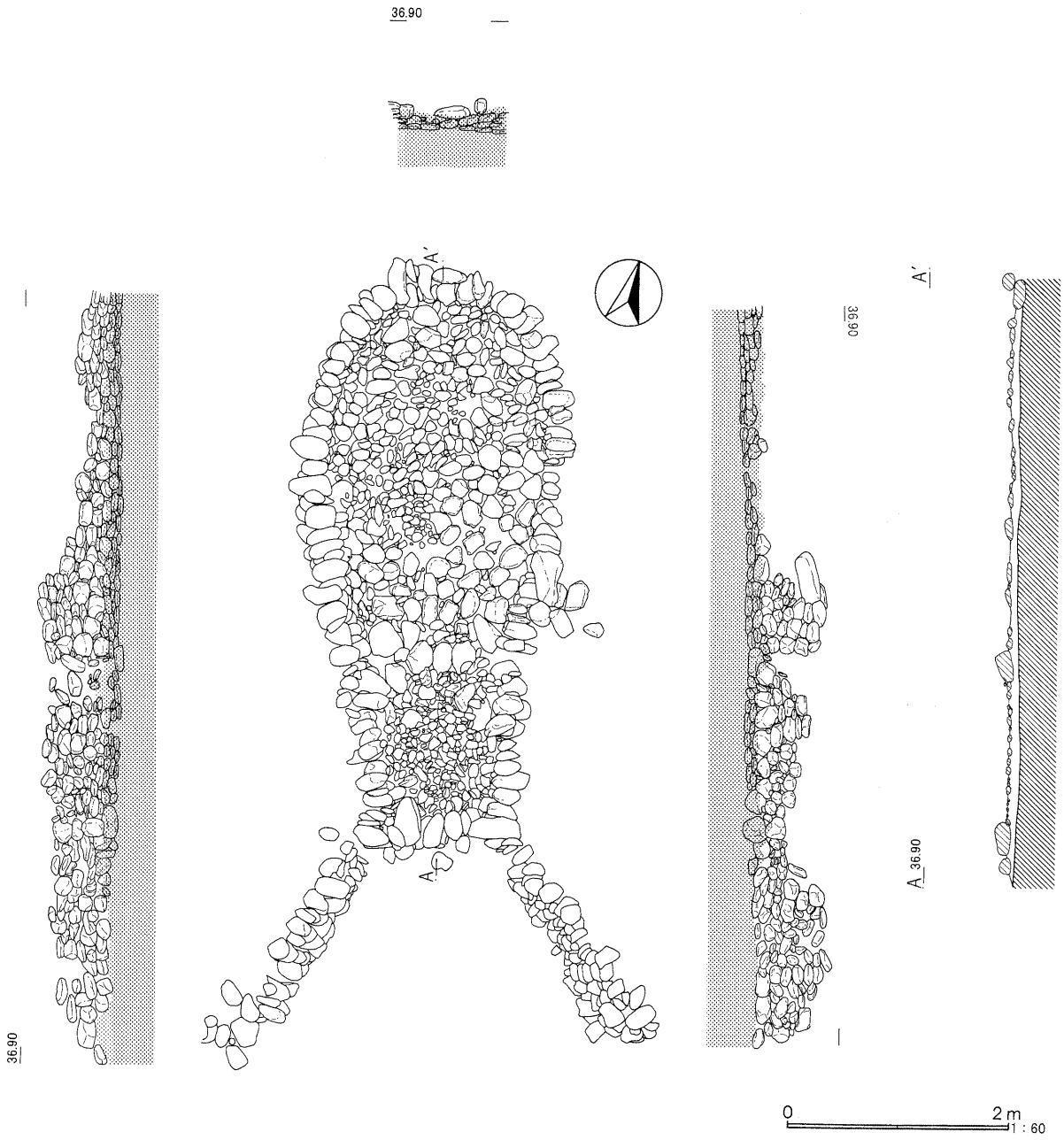



**第１号墳**

**土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）**

1 暗灰黄色土：ロームブロック少量含む。
2 褐 灰 色 土：ロームブロック少量含む。
3 黄 灰 色 土
4 暗 褐 色 土
5 黄 灰 色 土：黒色土ブロック、ロームブロック少量含む
6 暗灰黄色土
7 灰 褐 色 土
8 暗 褐 色 土
9 黄 灰 色 土：黒色土ブロック、ロームブロック少量含む
10 灰 黄 色 土：黒色土ブロック、ロームブロック少量含む
11 黒 褐 色 土：暗褐色土ブロック、ローム粒少量含む。
12 褐　色　土：黒色土ブロック、ローム粒少量含む。
13 灰 褐 色 土：黒褐色粒、ローム粒少量含む。しまり強。
14 暗 褐 色 土：黒褐色土ブロック、ローム粒少量含む。
15 黒 褐 色 土：暗褐色粒、ローム粒少量含む。
16 暗 褐 色 土：黒褐色粒・ブロック、ローム粒・ブロック少量含む。
17 暗 褐 色 土：黒褐色土ブロック、ローム粒少量含む。
18 淡 黄 色 土：黒褐色粒・ブロック少量含む。
19 暗 褐 色 土：黒褐色粒、ローム粒少量含む。
20 暗 褐 色 土：黒褐色粒、淡黄色粒・ブロック、ローム粒少量含む。
21 黒 褐 色 土：淡黄色粒・ブロック、ローム粒少量含む。
22 黒 褐 色 土：焼土、淡黄色粒、炭化物微量含む。
23 暗 褐 色 土：淡黄色粒・ブロック多量含む。
24 暗 褐 色 土：黒褐色粒、淡黄色土ブロック、ローム粒少量含む。
25 暗 褐 色 土：黒褐色粒・ブロック、礫(葺石)、ローム粒・ブロック少量含む。
26 黒 褐 色 土：淡黄色粒少量含む。
27 黒 褐 色 土：ローム粒・ブロック少量含む。
28 黒 褐 色 土：ローム粒・ブロック多量含む。
29 暗 褐 色 土：ローム粒少量含む。
30 黄 褐 色 土
31 黒 褐 色 土：ローム粒少量含む。

第６図　第１号墳土層断面図



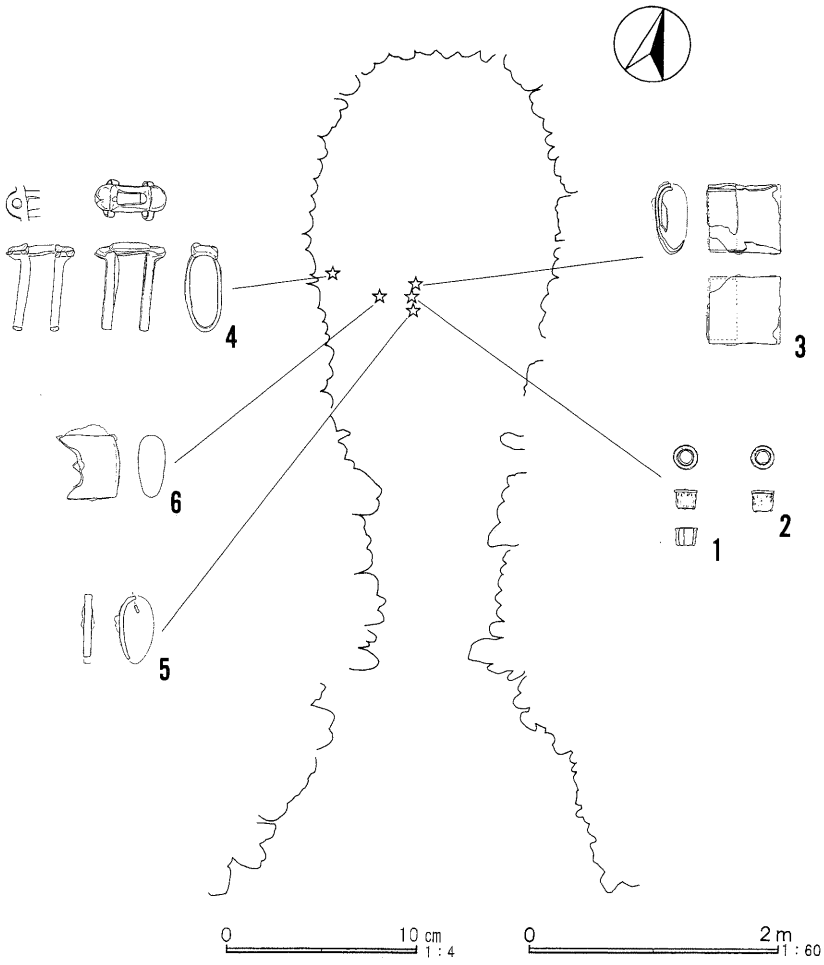

第７図　第１号墳石室

**第３表　第１号墳出土鉄・銅製品観察表**

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 法　量・重　量・残　存　状　態・備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 玄　室 | 鉄製鵐目金具 | 上端径1.3cm、下端径1.0cm、最大厚0.95cm、孔径0.75cm。重量1.6ｇ。完形。外面木質付着。継ぎ目有。 |
| 2 | 玄　室 | 鉄製鵐目金具 | 上端径1.25cm、下端径1.05cm、最大厚1.1cm、孔径0.75cm。重量1.4ｇ。完形。継ぎ目有。 |
| 3 | 玄　室 | 銅製双脚足金具 | 最大高4.55cm、最大幅3.75cm。枠形櫓金：最大長3.7cm、最大幅1.4cm、最大高0.7cm、帯執引通孔：最大長1.55cm、幅0.6cm前後、腹帯：長径4.1cm、短径1.9cm、幅cm0.5前後、最大厚0.2cm。重量17.6ｇ。完形。 |
| 4 | 玄　室 | 鉄製鞘口金具・鎦 | 鞘口金具：長径3.55cm、短径(1.7)cm、最大長3.75cm、最大厚0.15cm。半分欠。鎦：長径(3.15)cm、短径(1.3)cm、最大長1.55cm、最大厚0.15cm。大半欠。重量(0.9)ｇ。 |
| 5 | 玄　室 | 鉄製責金具 | 長径(3.5)cm、短径(1.9)cm、最大幅0.4cm、最大厚0.15cm。重量(12.8)ｇ。半分欠。 |
| 6 | 玄　室 | 鉄製鞘尻金具 | 長径3.3cm、短径1.9cm、最大長(3.2)cm。重量(21.2)ｇ。一部欠。 |
| 7 | 墳　丘 | 不明鉄製品 | A：最大長2.4cm、最大幅1.5cm、最大厚0.2cm。B：最大長4.4cm、最大幅1.45cm、最大厚0.15cm。重量A＋B＝(9.8)ｇ。 |

**第４表　第１号墳出土土器観察表**

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 墳　丘 | 須恵器　平瓶 | (9.6) | (3.4) | － | AB | 灰色 | A | 口縁部20% | 産地不明。内外面自然釉付着。 |

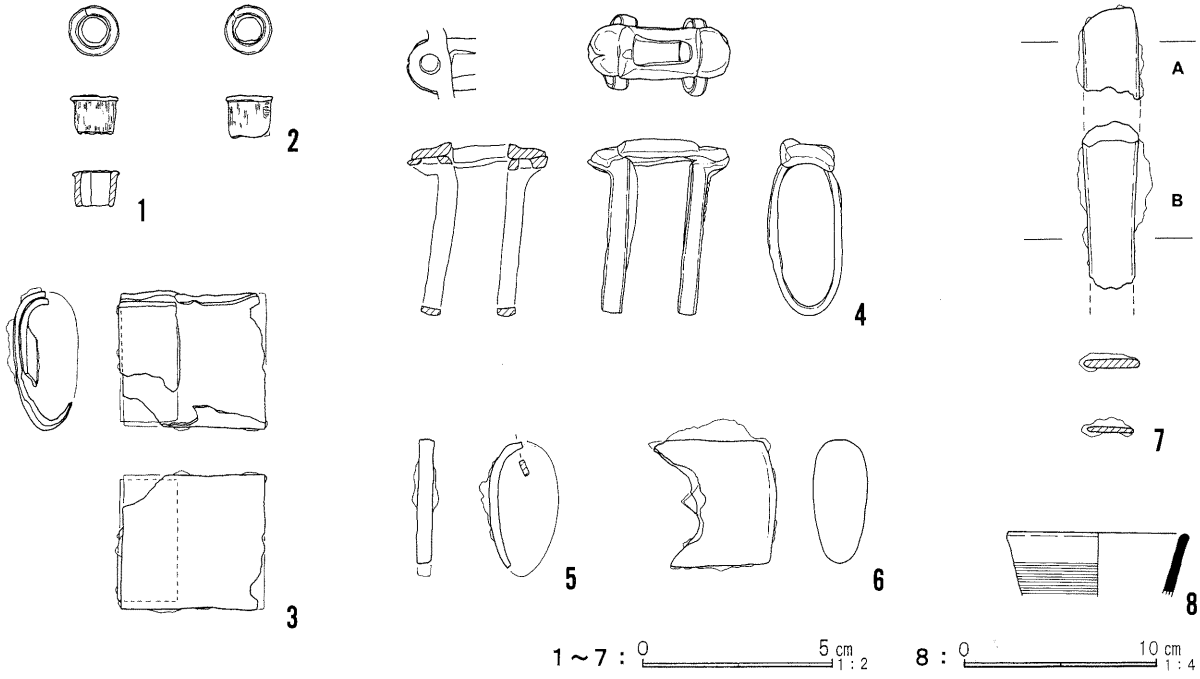



第8図　第1号墳石室　鉄・銅製品出土状況

## 小　結

本墳は墳丘及び周堀の形態、葺石の配列状況から、平面形態が八角形を呈する八角墳であることが確認された。ただし、やや丸みを持つ箇所があることから正八角形にはならない。規模は12m前後を測る。周堀は全周し、北側と南西部には稜角の延長線上に張り出し部がみられた。主体部は河原石による胴張り型の横穴式石室である。掘り方はないが石室は墳丘構築面より若干低く整地された面に造られていた。玄室からは大刀は検出されなかったが、刀装具がまとまって出土した。

本墳は刀装具や刀装具から想定される方頭大刀の存在、主体部の形態などから7世紀後半頃の築造と考えられる。




第9図　第1号墳出土鉄・銅製品・土器

### 第２号墳

#### 位置・状態

第１区Ｊ～Ｍ―26～29グリッドに位置する。１・３号墳のほぼ中間にあり、北東方向にある１号墳とは約20m、南西方向にある３号墳とは約13mの距離にある。

本墳もほぼ全形が検出されたが、周堀北西部と南東部は調査区外にある。周堀北側及び西側から南西部にかけては、籠原裏遺跡の時期不明のピット群に所々を切られている。

#### 墳丘・外部施設（第10・11図）

墳丘は現地表面下0.4mで確認された。墳頂部は既に削平されていたが、墳丘は１m前後の高さで下段のみ検出された。葺石は墳丘の周りから検出されたが、そのほとんどが崩落していた。原位置を保つ葺石は墳丘北側及び東側、東西の前庭部付近でのみ若干検出され、礫の長軸を辺に交差させる形で直線的に配置されていた。残存する葺石から墳丘を復元すると本墳は多角形状を呈しているが、１号墳のように規則性がみられないことから円墳の範疇に入るものと思われる。２号墳についても詳細は第Ⅴ章で詳しく述べることとする。

墳丘の規模は径８m前後を測る。墳丘盛土は主に主体部付近に褐色土、その周囲に黒褐色土や暗褐色土、黄褐色土などを積み重ねて構築されていた。ローム粒を含む層が多く、その他にも焼土、炭化物、黒色粒などの混入物を含む層がみられた。盛土は全体的にしまりがあまり良くない。

葺石には河原石が使用され、大きさは長軸25cm、短軸15cm、厚さ10cm前後のものが多くみられた。

周堀は現地表面下1.4m程で検出された。北西部と南東部は調査区外にある。主体部の前後が陸橋になっており、主体部前の陸橋は９m程と幅広い。周堀の幅は３m前後を測るが、中段が最も膨らみ、陸橋付近は1.5m程と狭くなる。深さは0.7～１m程である。周堀内は凹凸が顕著であり、外側の立ち上がりが不明瞭な部分もみられた。本墳も埴輪は検出されなかった。

#### 主体部

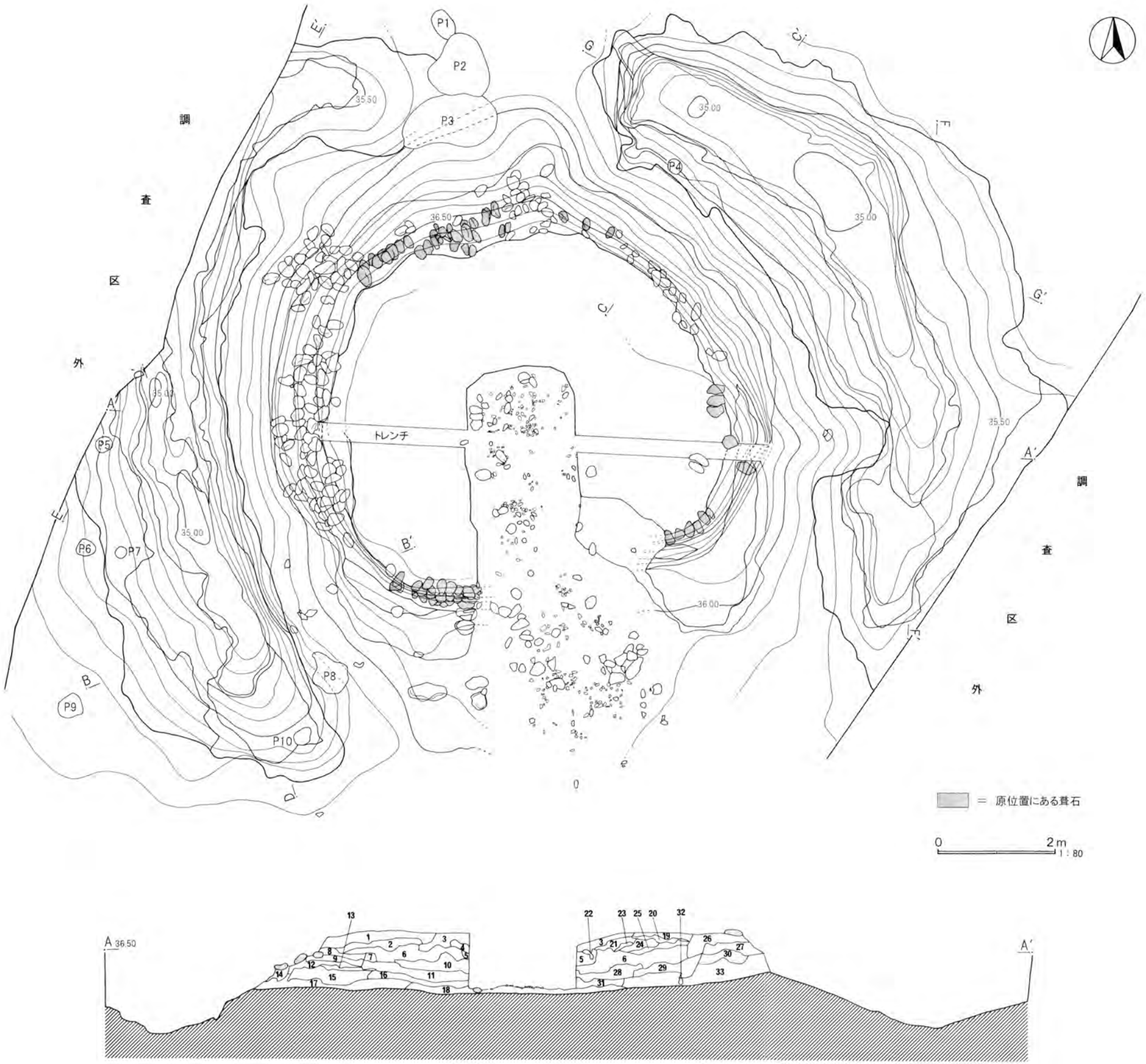
主体部は損傷が著しく、玄室の根石や敷石が僅かに残るだけであった。また、前庭部から陸橋付近には、主体部に使用されたと思われる河原石や緑泥片岩が散っていた。規模など詳細は不明であるが、本墳の主体部も１号墳と同じく河原石による胴張り型の横穴式石室であったと思われる。また、本墳の石室も掘り方はみられなかった。

#### 出土遺物

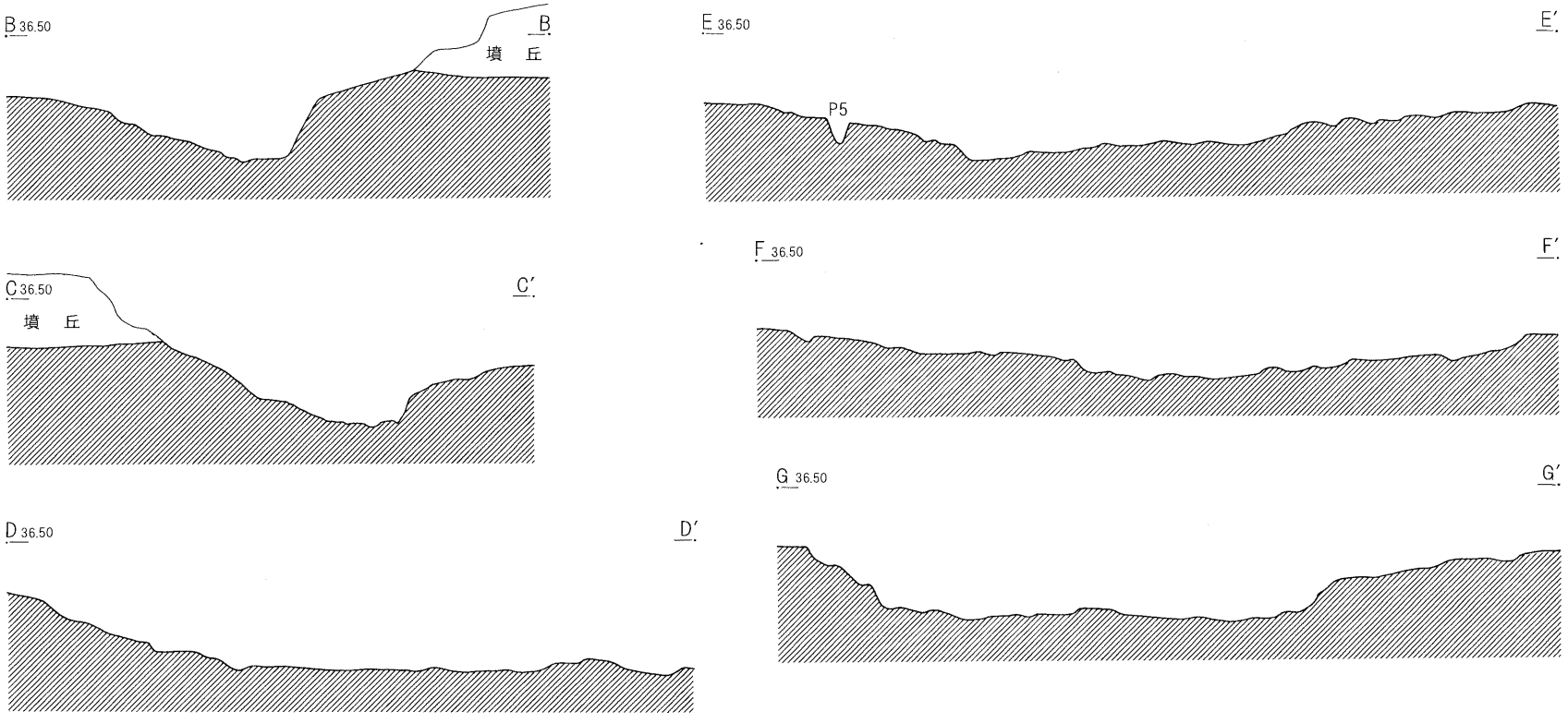
出土遺物は籠原裏遺跡から流れ込んだ他の時代のものであり、本墳に伴う遺物は検出されなかった。

#### 小　結

本墳は本報告が出るまで１号墳とともに八角墳とされてきたが、残存する葺石はごく一部であり、１号墳のように規則性はみられない。また、周堀や等高線からみても八角墳とするにはやや説得力が乏しい。よって、本墳は多角形状を呈してはいるが、円墳の範疇でとらえておくこととする。墳丘の規模は径８m前後を測る。残存する葺石は直線的な配列となっていた。周堀は全周せず、主体部の前後が陸橋となる。特に主体部前の陸橋は幅が広い。主体部は損傷が激しいが、河原石による胴張り型の横穴式石室であったと思われる。掘り方はみられない。本墳に伴う遺物は出土しなかったが、埴輪を持たないこと、主体部の構造などから７世紀以降の築造と思われる。


調
査
区
外
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
トレンチ
35.50
36.50
35.00
36.00
A
A'
B
B'
G
G'
= 原位置にある葺石
0
2m
1:80
A 36.50
A'

第10図　第２号墳




**第２号墳**

**土層説明（ＡＡ′）**

1 黒 褐 色 土
2 暗 褐 色 土：黒色粒、白色粒、ローム粒少量含む。
3 灰 褐 色 土：黒色粒ブロック、白色粒、ロームブロック少量含む。
4 褐　色　土：焼土、白色粒、ロームブロック少量含む。
5 褐　色　土：白色粒、ローム粒少量含む。
6 褐　色　土：黒色粒、ローム粒少量含む。
7 暗褐色土と褐色土の混在層。
8 黒 褐 色 土：ローム粒少量含む。
9 黒褐色土と褐色土の混在層。ローム粒微量含む。
10 褐　色　土：黒色粒、白色粒、ローム粒少量含む。
11 褐色土と黒色土の混在層。
12 暗 褐 色 土：ローム粒少量含む。
13 にぶい黄褐色土
14 黒　色　土：白色粒、ローム粒少量含む。
15 黒 褐 色 土：ローム粒微量含む。
16 黒　色　土：ローム粒微量含む。
17 暗 褐 色 土
18 褐　色　土
19 黒 褐 色 土：ローム粒微量含む。
20 褐　色　土：白色粒、ローム粒少量含む。
21 黄 褐 色 土：白色粒、ローム粒少量含む。
22 灰 褐 色 土：しまり無。
23 褐　色　土：砂質。
24 黒 褐 色 土：白色粒、ローム粒微量含む。
25 暗 褐 色 土：炭化物、白色粒少量含む。
26 明黄褐色土：黒色粒少量含む。
27 暗 褐 色 土：黒色粒、ローム粒少量含む。
28 褐　色　土：黒色土少量含む。
29 暗 褐 色 土：褐色土少量含む。
30 黒 褐 色 土：褐色土、ローム粒少量含む。
31 黒 褐 色 土：褐色土微量、ローム粒少量含む。
32 黄 褐 色 土
33 黒 褐 色 土

0　2m
1：80

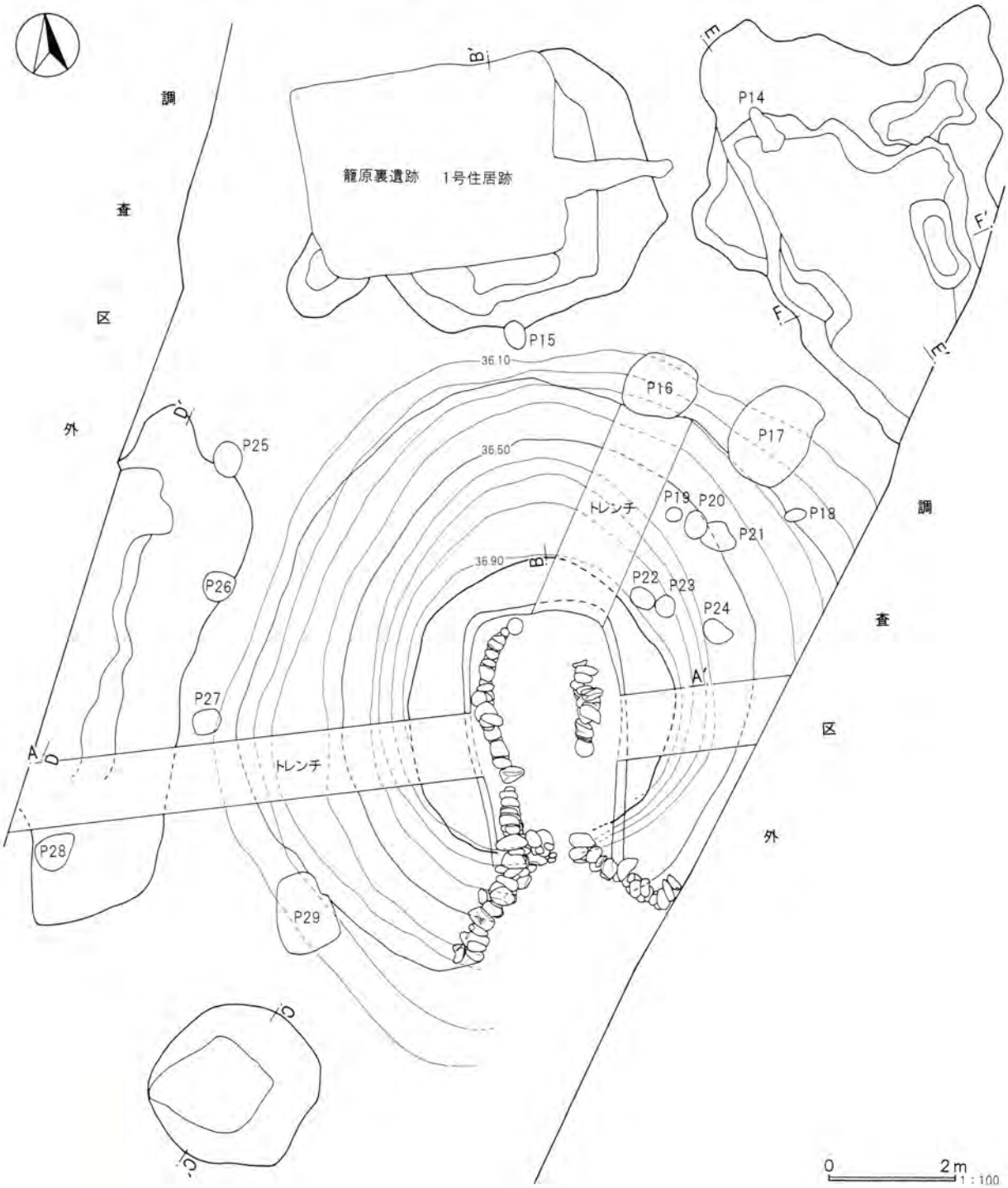
第11図　第２号墳断面図

## 第３号墳

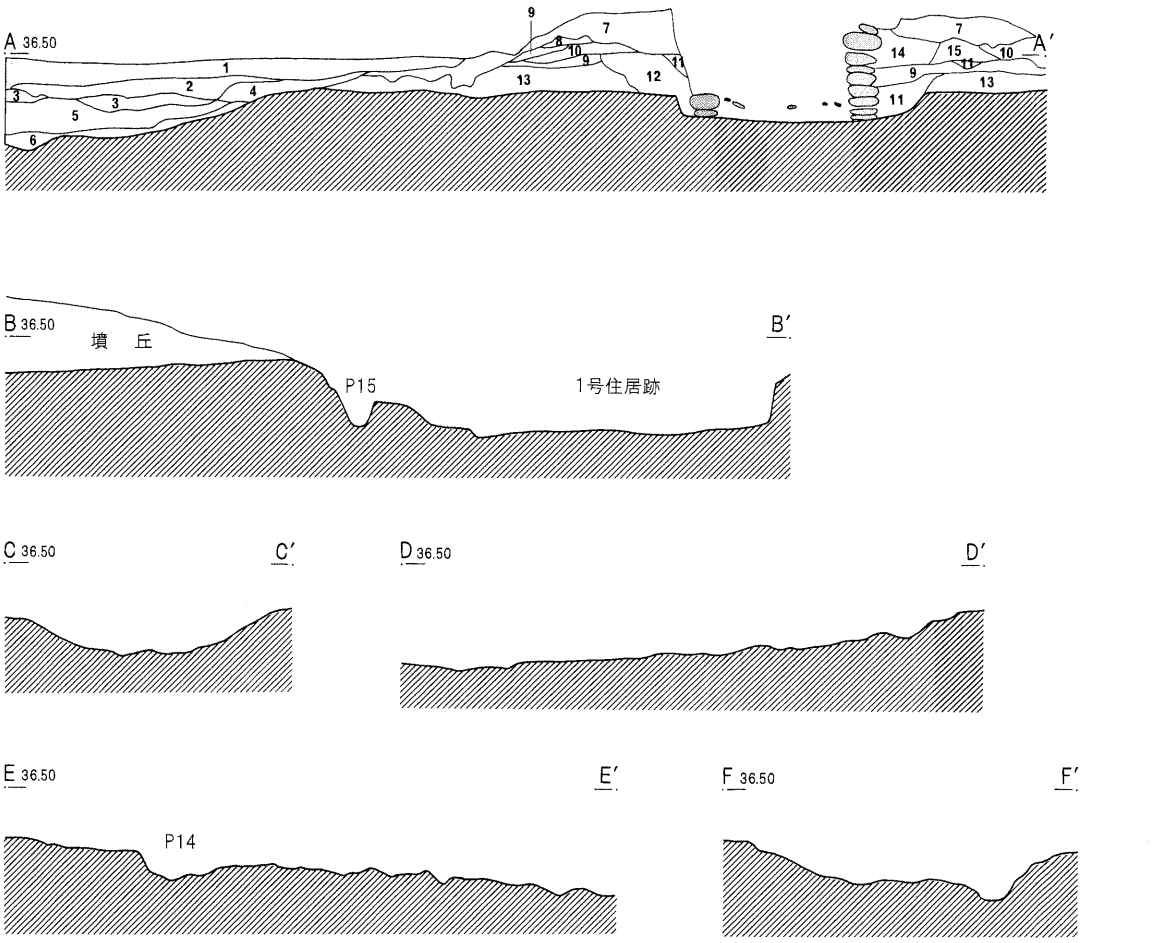
### 位置・状態

第１区Ｏ～Ｒ―23～26グリッドに位置し、現在確認されている本古墳群のほぼ中心にある。

本墳は主体部を含む大半が検出されたが、墳丘東側や周堀の東西が調査区外にある。周堀北側は大部分を籠原裏遺跡の平安時代の１号住居跡に切られ、他にも所々を時期不明のピット群に切られている。なお、籠原裏遺跡の報告（熊谷市教委2004）では、南西部にある土坑状の周堀を平安時代の土坑（４号




第12図　第３号墳




第３号墳
土層説明（ＡＡ′）

1 淡黄色土：火山灰少量含む。
2 褐灰色土：暗褐色土、ロームブロック少量含む。
3 黒褐色土：ロームブロック少量含む。
4 褐灰色土：暗褐色土、ロームブロック多量含む。
5 黒　色　土：ロームブロック少量含む。
6 黒褐色土：ロームブロック少量含む。
7 褐灰色土：白色粒、ロームブロック多量含む。
8 黒褐色土：ロームブロック多量含む。
9 黒褐色土：８層より明るい。
10 黒　色　土：ロームブロック少量含む。
11 暗褐色土：ロームブロック少量含む。
12 黒褐色土：暗褐色土、褐色土を斑状に含む。
13 黒　色　土：ロームブロック少量含む。
14 褐灰色土
15 褐灰色土：ローム粒少量含む。

0　2m
1：80

**第13図　第３号墳土層断面図**

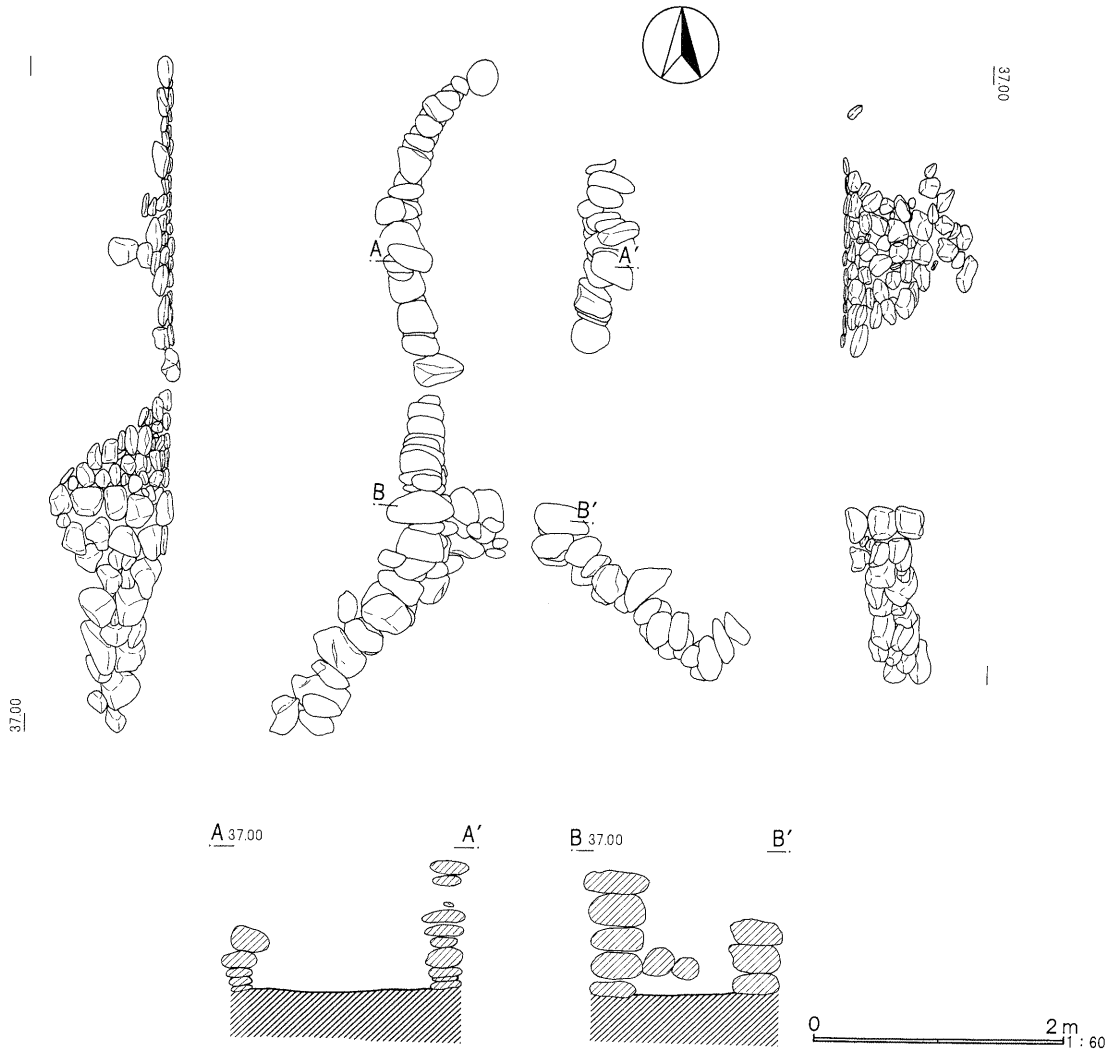
土坑）として報告したが、本墳に伴う周堀であったことが判明したため、ここで訂正する。

**墳丘・外部施設（第12・13図）**

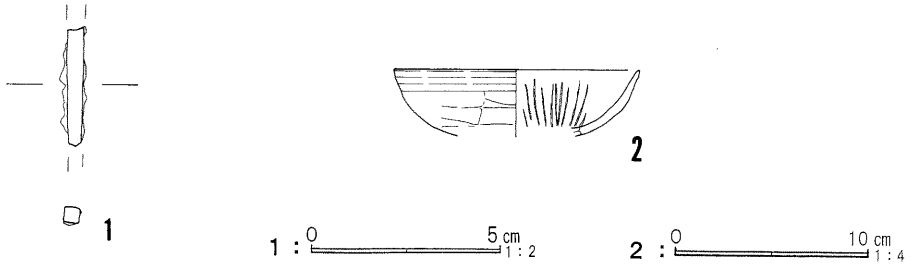
本墳は径9.7m程の円墳である。墳丘は現地表面下0.4m程で確認された。墳頂部は既に削平されていたが、墳丘は約0.8mの高さで下段のみ検出された。墳丘盛土は、主体部の構築にあわせて主にロームブロックを含む黒色系の土を積み重ねて構築されていた。盛土は全体的にしまりがあまり良くない。

葺石はハの字に開く前庭部でのみ確認された。前庭部以外では崩落したものも含めて全く検出されなかったため、葺石が墳丘全体を覆っていたかは不明である。主に長軸40cm、短軸20cm、厚さ25cm前後を測るやや大型の河原石が使用されており、本墳の主体部に使用されたものよりも大きいものであった。葺石は礫の長軸を辺に交差させる形で配置されていた。

周堀は現地表面下1.3m程で検出された。北西部と南東部は調査区外にある。所々で途切れており、全




第14図　第３号墳石室




第15図　第３号墳出土鉄製品・土器

第５表　第３号墳出土鉄製品観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 法　量　・　重　量　・　残　存　状　態　・　備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 羨道部 | 鉄　鏃 | 最大長(3.1)cm、最大幅(0.45)cm、最大厚(0.4)cm。重量(1.7)ｇ。箆被部のみ。 |

第６表　第３号墳出土土器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 前庭部 | 土師器　坏 | (13.0) | (3.5) | － | ABGI | にぶい褐色 | B | 10% | 内面放射状暗文有。 |

周しない。主体部前は東側が調査区外にあるが、やや幅広の陸橋になると思われる。周堀の幅は2.6～4.2mと一定しない。深さは最深部で0.8m程を測る。周堀内は凹凸が顕著であり、外側の立ち上がりは不明瞭な部分がみられた。本墳も埴輪は検出されなかった。

**主体部（第14図）**

主体部は河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。残存状態が悪く、玄室奥壁付近や西側壁の上部、羨道部東側壁、玄室・羨道部の礫床面など大半を欠く。天井部は既に崩落していた。石室の主軸はN－1°－Eを示し、ほぼ南に開口する。石室の正確な規模は不明であるが、全長3.7m程、玄室の長さは2.4m程、幅はほぼ中央の最大幅が1.3mとなる。羨道部は長さ1.3m程、幅は羨門部で0.65mとなり、羨道部と玄室の比率は、ほぼ1：2の割合になる。平面形態は玄室が馬蹄形を呈し、ほぼ中央で最大幅となる。羨道部は残存する西側壁では、ほぼ直線的であった。奥壁及び側壁は河原石による小口積みであり、残りの良い玄室東側壁では約1.1m、羨門部西側壁では約1mの高さまで残存していた。根石には径20cm前後、厚さ5cm程の円形ないし楕円形の扁平な河原石が一・二段据えられており、根石の上には主に長軸35cm、短軸20cm、厚さ10cm前後のものが積み重ねられていた。ただし、玄門部及び羨門部にはさらに大きい河原石が根石段階から配置されていた。梱石は羨門部でのみ確認された。長軸30cm、短軸20cm、厚さ20cm程の河原石が長軸を南北に向けて据えられていた。閉塞施設は、羨門部に梱石とほぼ同じ大きさの石を向きも長軸を南北にあわせて積み上げられており、その間に拳大の河原石や小砂利が充塡されていた。なお、本墳の石室は掘り方内に構築されていた。掘り方は長軸4.2m、短軸2.58mの長方形を呈し、墳丘構築面からの深さは0.16mを測る。

**出土遺物**

本墳に伴う遺物は、鉄製品（第15図1）、土器（2）のみである。鉄製品は1以外にもほぼ完形の鉄鏃が前庭部から数本出土したが、発掘調査時に盗難にあったため、図示不可能であった。

**鉄製品（第15図1）**

1は有茎鏃の篦被部片。大半を欠くため、形態などは不明である。石室羨道部から出土した。

**土　器（第15図2）**

2は土師器坏。口径は推定で13cmを測る。口縁部はやや外に開く。浅身で丸底である。口縁部には横ナデ、体部外面には横位のヘラ削り、内面には放射状暗文が施されている。前庭部から検出された。

**小　結**

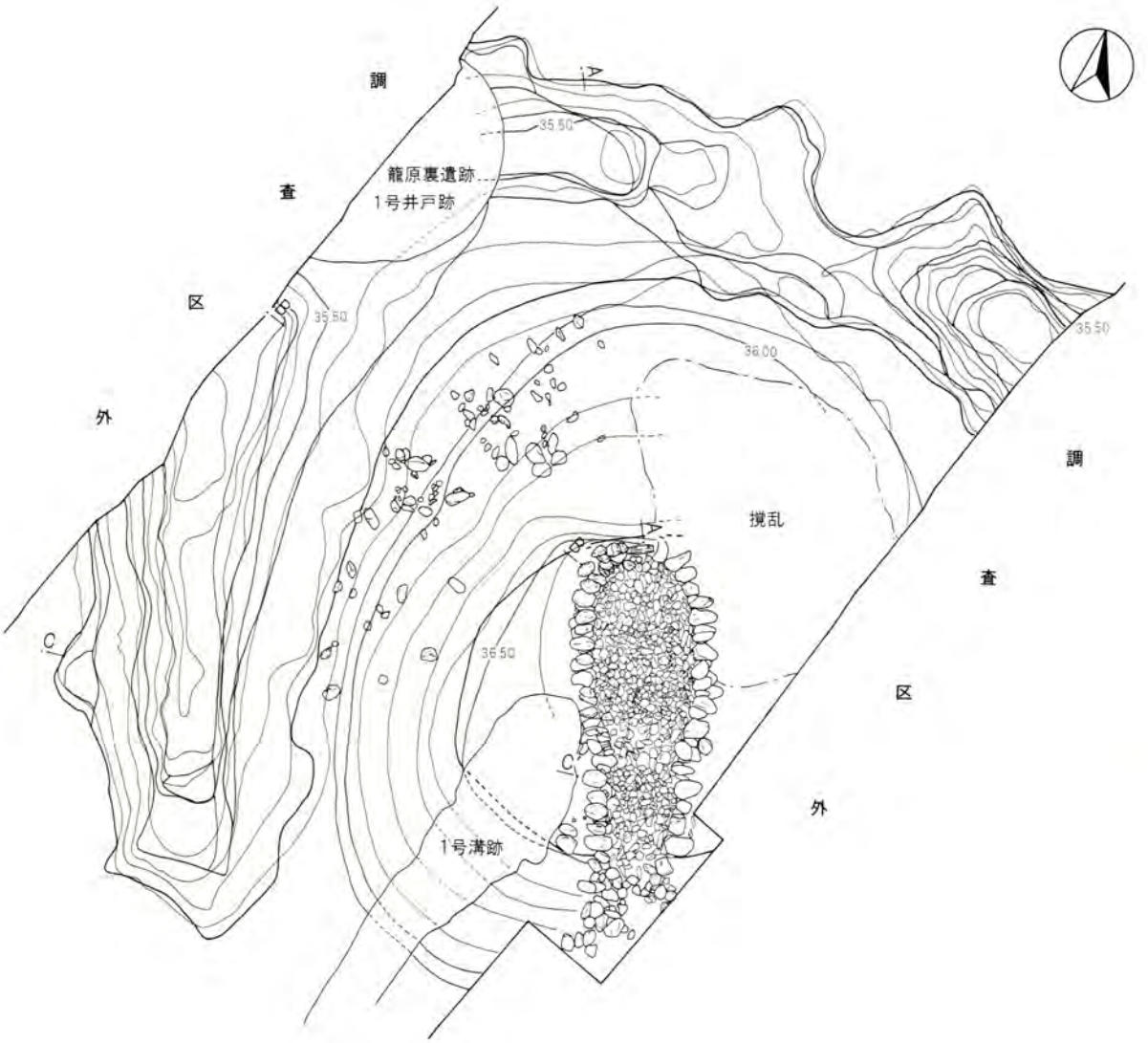
本墳は径9.7m程の円墳である。主体部は河原石による胴張り型の横穴式石室であり、掘り方内に構築されていた。葺石は全体を覆っていたか不明である。周堀は所々で途切れる。前庭部出土の土師器は7世紀末～8世紀初頭頃に位置づけられるものであり、埋葬後の儀礼に伴う可能性も考えられる。よって、本墳は同段階ないしそれ以前に築造されたと思われる。

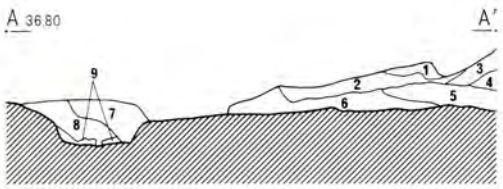
## 第4号墳

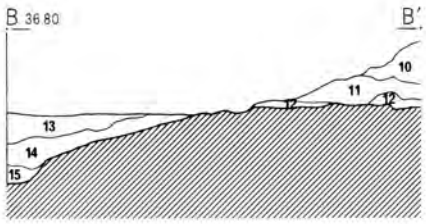
**位置・状態**

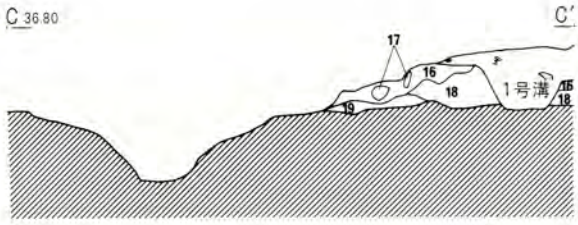
第4区F～H―18～20グリッドに位置する。南西方向にある5号墳とは、約6mと近い。

本墳は主体部を含む大半が検出されたが、周堀北西端や墳丘・周堀の東側、主体部南側が調査区外に



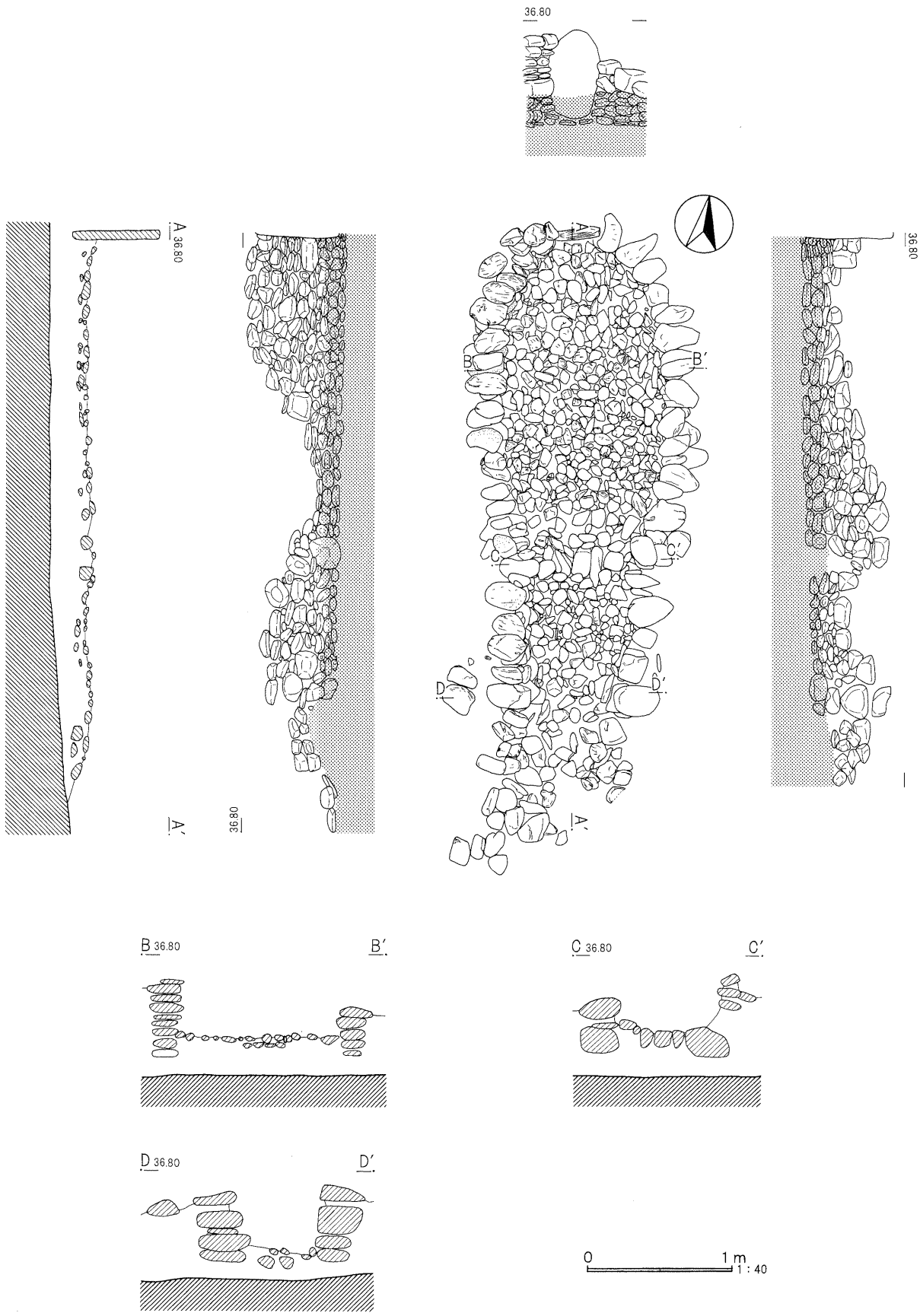

**第4号墳**

**土層説明（AA′ BB′ CC′）**

1 黄褐色土
2 暗褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
3 暗褐色土：ローム粒多量含む。
4 暗黄褐色土：ロームブロック多量含む。
5 黒褐色土：ロームブロック多量含む。
6 暗褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
7 暗褐色土：ローム粒少量含む。
8 黒褐色土：ローム粒少量含む。
9 暗褐色土：ローム粒多量含む。
10 暗褐色土：ローム粒、砂少量含む。
11 黒褐色土：ローム粒、暗褐色土ブロック少量含む。
12 暗褐色土
13 黒褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
14 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
15 暗黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
16 暗黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
17 黒褐色土：ローム粒多量含む。
18 黒褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
19 暗褐色土：ローム粒少量含む。

0 2m 1：80

**第16図　第4号墳**


36.80
A 36.80
A′
36.80
B
B′
C
C′
D
D′
A
A′
36.80
B 36.80
B′
C 36.80
C′
D 36.80
D′
0
1 m
1 : 40

第17図　第４号墳石室

ある。周堀北西部や主体部西側では、籠原裏遺跡の中・近世の１号井戸跡や１号溝跡に切られ、周堀西側及び墳丘北西部の上部では、直接的な切り合い関係はみられなかったが、中・近世の土坑（６～９号土坑）が本墳埋没後に構築されていた。なお、墳丘北東部は攪乱により削平されていた。

**墳丘・外部施設（第16図）**

本墳は径7.5m程の小円墳である。墳丘は現地表面下0.6m程で確認された。墳頂部は既に削平されていたが、墳丘は約0.7mの高さで下段のみ検出された。墳丘盛土は、旧地表面に暗褐色土を盛った後、主体部の構築にあわせて暗褐色土や黒褐色土、黄褐色土を積み重ねていた。ほとんどの層にローム粒やロームブロックを含んでいた。他の古墳同様、盛土は全体的にしまりがあまり良くない。

葺石は墳丘北西部で検出されたが、原位置を保っていない。また、前庭部でも検出されたが、残りが悪く、大半が調査区外にある。葺石は河原石であり、大きさは拳大から人頭大のものまでみられた。

周堀は現地表面下1.3m程で検出された。北西部と南東部は調査区外にある。周堀の幅は２m前後、深さは最深部で0.74mを測り、逆台形状を呈する。また、北東部では幅が急激に狭くなる箇所もみられた。幅は1.04mを測る。主体部前は東側が調査区外にあるが、幅広の陸橋になると思われる。本墳も埴輪は墳丘及び周堀からも検出されなかった。

**主体部（第17図）**

主体部は河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。天井部は既に崩落し、玄室東西の側壁や羨道部東側壁の上部を一部欠くが、比較的残存状態が良好であった。石室の主軸はN―11°―Wを示し、南側に開口する。石室の規模は羨門部の梱石を欠くためはっきりしないが、全長3.3m程である。玄室の長さは2.3m、幅は奥壁が0.6m、ほぼ中央の最大幅が1.1m、玄門部が0.6mを測る。羨道部は長さが１m程、幅は0.6m前後である。羨道部と玄室の比率は、ほぼ１：２の割合になる。平面形態は玄室が馬蹄形を呈するが、胴の張りが弱い。羨道部はほぼ直線的であった。本墳の奥壁は他の古墳と異なり、縦長の緑泥片岩一枚で構築されていた。大きさは長軸0.6m、短軸0.35m、厚さ７cm程である。側壁は河原石による小口積みであり、残りの良い羨道部西側壁では約0.5m、玄室西側壁では約0.7mの高さまで残存していた。根石には径10cm前後、厚さ５cm程の円形ないし楕円形の扁平な河原石が使用されており、奥壁では一段、側壁では二・三段据えられていた。根石の上には主に長軸30cm、短軸15cm、厚さ８cm前後の石が積まれていたが、玄門部及び羨門部にはさらに大きい河原石が根石段階から配置されていた。梱石は、玄門部床面には側壁に使用されたものより一回り小さい河原石が据えられていたが、羨門部では検出されなかった。玄室及び羨道部の床面には主に拳大の河原石が敷かれていたが、羨道部では羨門部の梱石を欠くため、礫が前庭部に散っていた。また、閉塞施設も前庭部付近を削平された影響からか明確には認められなかった。本墳の石室に掘り方はみられなかった。

**出土遺物**

出土遺物は籠原裏遺跡から流れ込んだ他の時代のものであり、本墳に伴う遺物は検出されなかった。

**小　結**

本墳は径7.5m程の小円墳である。主体部は河原石による胴張り型の横穴式石室であるが、胴の張りが弱い。また本古墳群中、唯一奥壁に緑泥片岩を使用していた。周堀は全周するが、主体部前の陸橋は幅広い。出土遺物がないが、埴輪がないことと主体部の構造からみて７世紀後半以降の築造と思われる。

## 第５号墳

### 位置・状態

第４区Ｉ～Ｋ―17・18グリッドに位置する。北東方向にある４号墳とは約６ｍの距離にある。墳丘や主体部を含む大半が調査区外にあり、検出できたのは周堀西側のみである。

### 墳丘・外部施設（第18図）

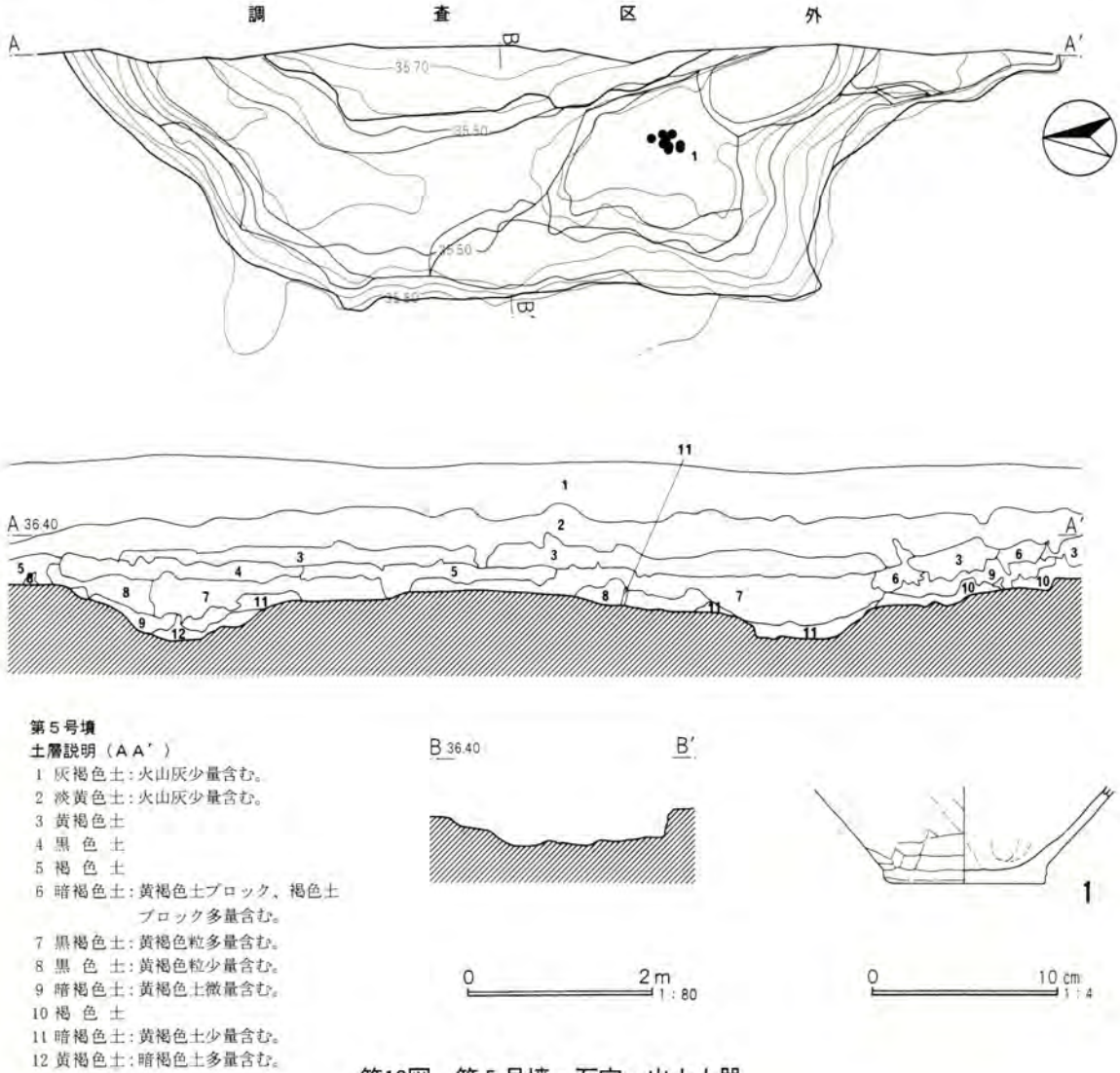
墳丘は検出できなかったが、円形に回る周堀の状況から径約7.5mの小円墳と推定される。

周堀は現地表面下1.2～1.3mで検出された。周堀の幅は２ｍ前後を測り、深さは最深部で0.3mと浅い。周堀底面はやや凹凸がみられた。葺石及び埴輪は検出されなかった。

### 出土遺物

### 土　器（第18図１）

１は土師器甕の底部。円柱状を呈する。胴部はやや膨らむ。周堀南西部から出土した。




第５号墳
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：火山灰少量含む。
2 淡黄色土：火山灰少量含む。
3 黄褐色土
4 黒　色　土
5 褐　色　土
6 暗褐色土：黄褐色土ブロック、褐色土ブロック多量含む。
7 黒褐色土：黄褐色粒多量含む。
8 黒　色　土：黄褐色粒少量含む。
9 暗褐色土：黄褐色土微量含む。
10 褐　色　土
11 暗褐色土：黄褐色土少量含む。
12 黄褐色土：暗褐色土多量含む。

第18図　第５号墳・石室・出土土器

第７表　第５号墳出土土器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 土師器　甕 | - | (5.3) | 8.8 | ABEGHN | 赤褐色 | B | 底部90% | |

## 小　結

本墳は周堀の状況から径7.5m程の小円墳と推定される。詳細については不明であるが、埴輪を持たないことから７世紀以降の築造と思われる。

## 第６号墳

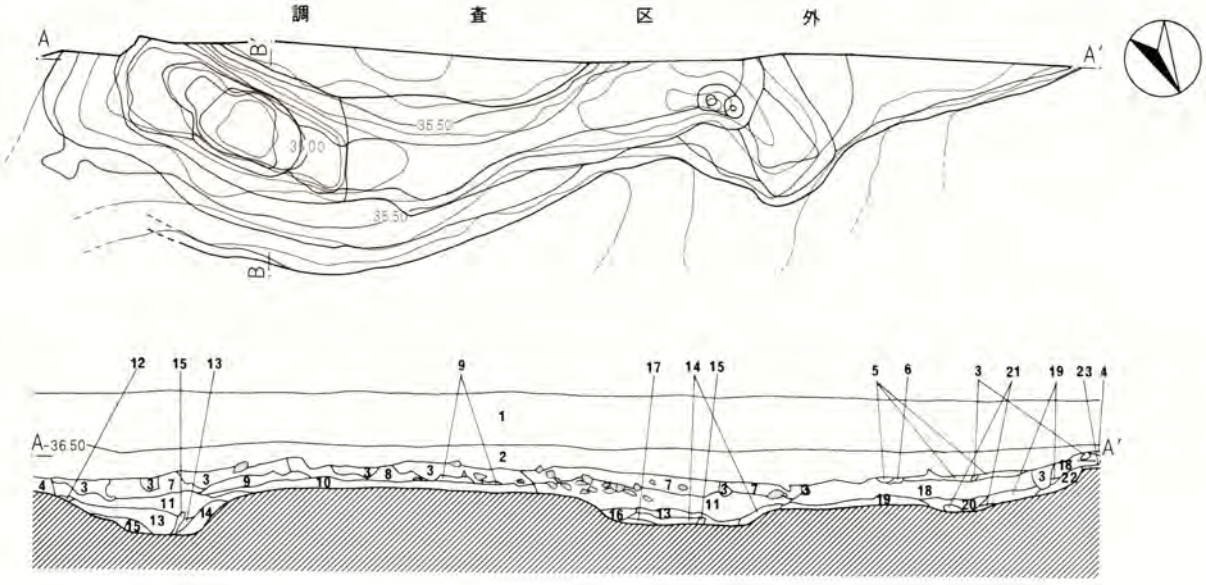
### 位置・状態

第４区Ｏ・Ｐ―10～12グリッドに位置する。北東方向にある５号墳とは約36m、東側にある３号墳とは約52mの距離にある。５号墳同様、主体部を含む大半が調査区外にあり、検出されたのは周堀北側のみである。なお、本墳のすぐ東側には籠原裏遺跡の16号土坑があり、坑内底面から本古墳群と同時期の須恵器長頸瓶の頸部片が出土している。本墳と関連のある遺構と思われるが、詳細は不明である。

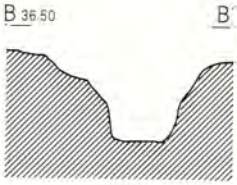
### 墳丘・外部施設（第19図）

墳丘は検出できなかったが、円形に回る周堀の状況から径約７ｍの小円墳と推定される。

周堀は現地表面下0.7～１ｍで検出された。周堀の幅は１～2.1m、深さは0.3～0.4mを測る。周堀北東部及び北西部では、ピット状の掘り込みがみられた。前者は長軸1.7m、短軸0.8m、底面からの深さは0.45m、後者は長軸0.52m、短軸0.3m、底面からの深さは0.20mを測る。調査区壁の土層断面では、崩落した葺石と思われる礫が多数確認された。埴輪は検出されなかった。




第６号墳
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：火山灰少量含む。
2 淡黄色土：火山灰少量含む。
3 黄褐色土
4 褐　色　土：白色粒、ローム粒少量含む。
5 暗褐色土：ローム粒多量含む。
6 灰褐色土
7 暗褐色土：礫、ローム粒少量含む。
8 褐　色　土：粘土質。ローム粒少量含む。
9 暗褐色土：ローム粒少量含む。
10 褐　色　土：ローム粒微量含む。
11 暗褐色土：礫多量、ローム粒少量含む。７層より暗い。
12 黄褐色土：３層より暗い。
13 暗褐色土：ローム粒多量含む。11層より明るい。
14 褐　色　土：黒色粒微量含む。
15 黄褐色土
16 黄　色　土：白色粒微量、黒色土斑状に含む。
17 暗褐色土：13層より暗い。
18 暗褐色土：砂質。ローム粒微量含む。
19 褐　色　土：黒色粒微量含む。14層より明るい。
20 暗褐色土：砂質。ローム粒少量含む。18層より暗い。
21 黄褐色土
22 灰褐色土：白色粒微量含む。
23 褐　色　土：ローム粒少量含む。４層より明るい。




0　2m
1：80

第19図　第６号墳

### 出土遺物

本墳からは流れ込みの遺物も含めて何も検出されなかった。

### 小　結

本墳は周堀の状況から径７ｍ程の小円墳と推定される。詳細については不明であり、出土遺物もないが、埴輪を持たないことから７世紀以降の築造と思われる。

## 第７号墳

### 位置・状態

第５区Ｙ・Ｚ－７・８グリッドに位置する。南西方向にある８号墳とは約12ｍの距離にある。

検出されたのは、主体部羨道部付近、前庭部付近、周堀南東部であり、大半が調査区外にある。また、前庭部付近及び周堀南東部は、籠原裏遺跡の中・近世の土坑群（31～36号土坑）に著しく切られており、主体部も上部の大半が破壊されていたことから、残存状態が非常に悪い。

### 墳丘・外部施設（第20図）

墳丘は大半が調査区外にある。また、検出された南東部も葺石の残る前庭部東側付近以外は削平されていた。正確な規模は不明であるが、主体部の位置や周堀の状況から径８ｍ程の小円墳と推定される。

葺石はハの字に開く前庭部でのみ検出された。西側は調査区境で、東側は若干残存する墳丘とともに検出されたが、後者については原位置を保っているものは少なく、ほとんど崩れた状態であった。葺石が墳丘全体を覆っていたかは不明である。葺石には河原石が使用されており、長軸20cm、短軸10cm、厚さ10cm前後のものが多くみられた。主体部の側壁に使用されたものより小さい。

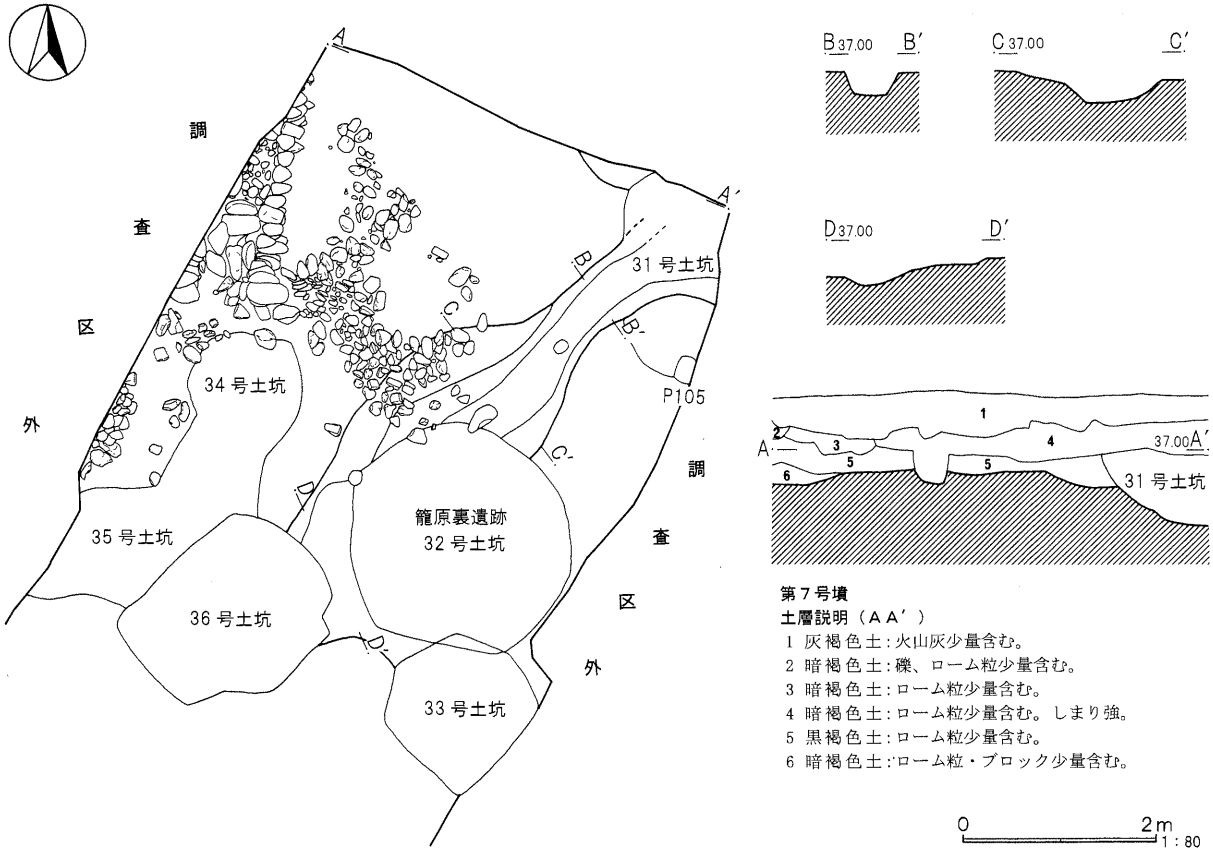
周堀は現地表面下0.8m程で検出された。籠原裏遺跡の中・近世の土坑群に切られていたため、原形をとどめていないが、主体部前は陸橋になると思われる。周堀の幅は0.55～1.7mと一定でなく、深さは最深部で0.25mと浅い。断面形は逆台形ないし舟底状を呈する。本墳も埴輪は検出されていない。

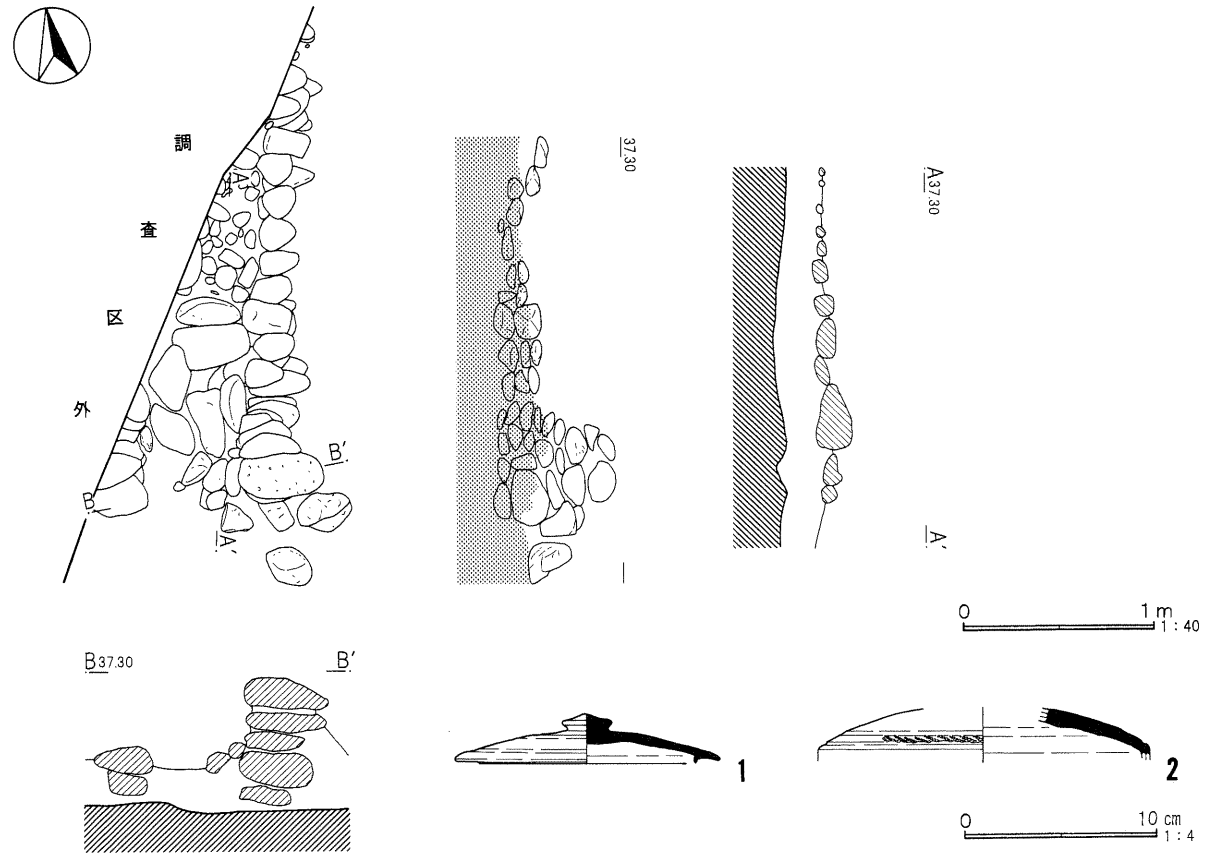
### 主体部（第20図）

検出されたのは羨道部付近のみであり、大半が調査区外にある。天井部は既に崩落しており、検出された東側壁も上部大半を欠く。その構造から河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。石室の主軸はＮ－10°－Ｅを示すと思われ、南側に開口する。羨道部の長さは１ｍ程、羨門部の幅は0.5mを測る。その他の規模は不明である。側壁は河原石による小口積みであり、残りの良い羨門部で約0.6mの高さまで残存していた。根石は径20cm前後、厚さ５cm程の円形ないし楕円形の扁平な河原石が玄門部付近では一・二段、羨道部では三段据えられていた。根石の上には主に長軸20cm、短軸15cm、厚さ７cm前後のものが積まれていたが、玄門部及び羨門部にはさらに大きい河原石が配置されていた。梱石は明確でなく、羨道部床面では長軸30cm、短軸20cm、厚さ15cm程の河原石が不規則な状態で検出された。本来は後述する８号墳のように長軸を南北に向けて据えられていたと思われるが、破壊されたことで崩れてしまった可能性が高い。また、閉塞施設についても明確には認められなかった。なお、僅かに検出された玄室床面では拳大の河原石が敷かれていたのが確認された。本墳の石室に掘り方はみられない。

### 出土遺物

出土遺物は、土器（第20図１・２）２点のみである。７世紀末～８世紀初頭頃のものと思われる。と




第20図　第７号墳・石室・出土土器

第８表　第７号墳出土土器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 須恵器　蓋 | (14.2) | 2.6 | - | ABCHJM | 灰黄色 | C | 50% | 産地不明。 |
| 2 | 前庭部 | 須恵器　壺 | - | (2.8) | - | ABH | 灰色 | A | 40% | 産地不明。肩部刺突有。外面自然釉付着。 |

もに石室外からの検出であり、石室内からは何も検出されなかった。

### 土　器（第20図１・２）

１・２は須恵器。ともに産地は不明である。１は蓋。つまみと内面にかえりを持つ。焼成が悪く、内外面ともに灰黄色を呈する。周堀から検出された。２は壺の肩部片。肩部には６条１単位の刺突列が施されている。また、外面には自然釉が付着している。前庭部から検出された。

### 小　結

本墳は主体部の位置や周堀の状況から径約８ｍの小円墳と推定される。主体部は河原石による胴張り型の横穴式石室である。掘り方はみられない。葺石は全体を覆っていたか不明である。周堀は他の小円墳同様、全周すると思われる。出土した須恵器はともに石室外での検出であり、埋葬後の儀礼に伴う可能性も考えられる。よって、本墳は７世紀末～８世紀初頭頃ないしそれ以前に築造されたと思われる。

## 第８号墳

### 位置・状態

第５区 AB～AH－３～６グリッドに位置する。本古墳群のうち南西端にあり、北東方向にある７号墳とは約12m、東側にある10号墳とは約50mの距離にある。

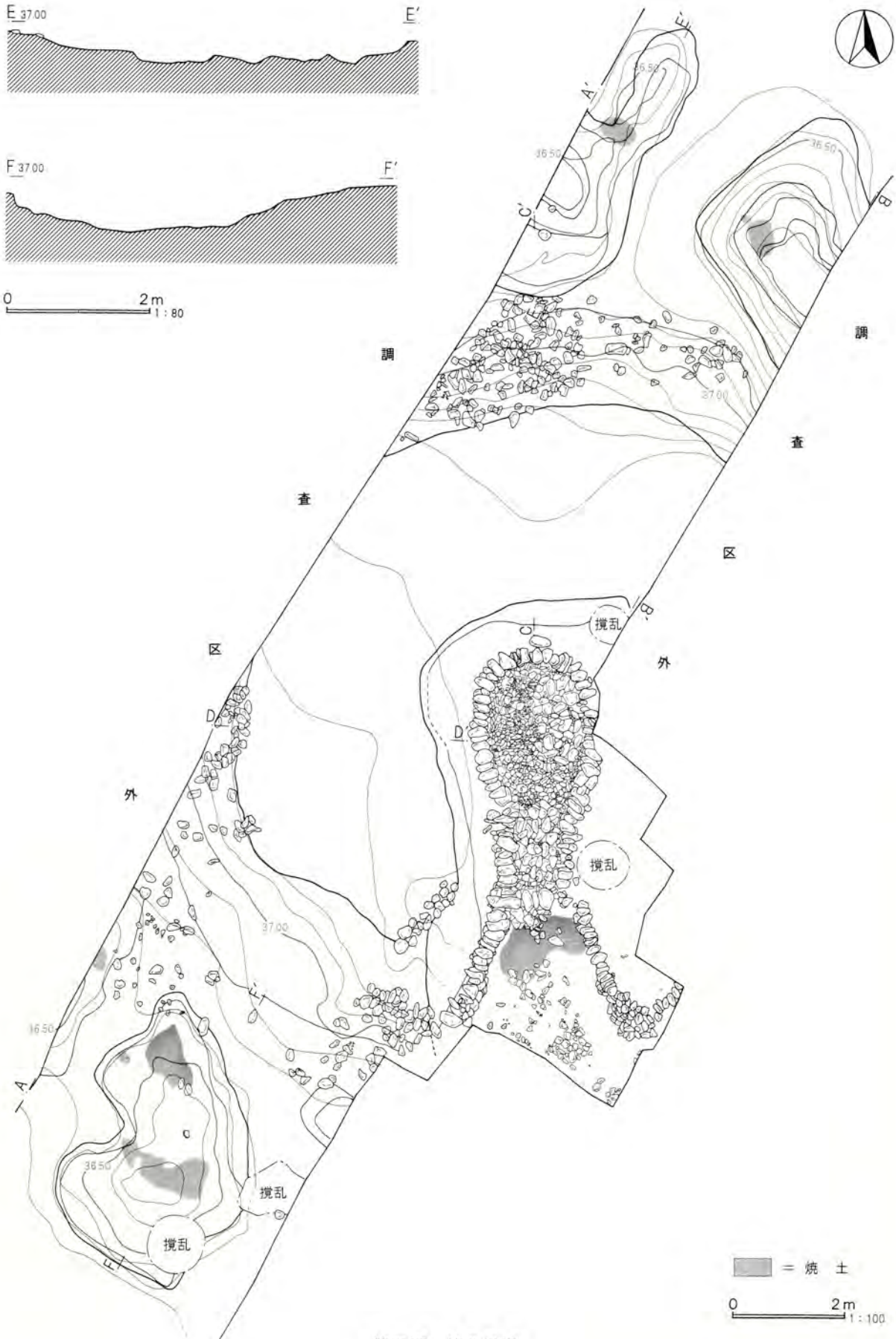
本墳は主体部を含む墳丘西側大半及び周堀の北東部と南西部の一部が検出された。墳丘東側及び周堀の大半は調査区外にある。他の遺構との重複関係はみられない。

### 墳丘・外部施設（第21・22図）

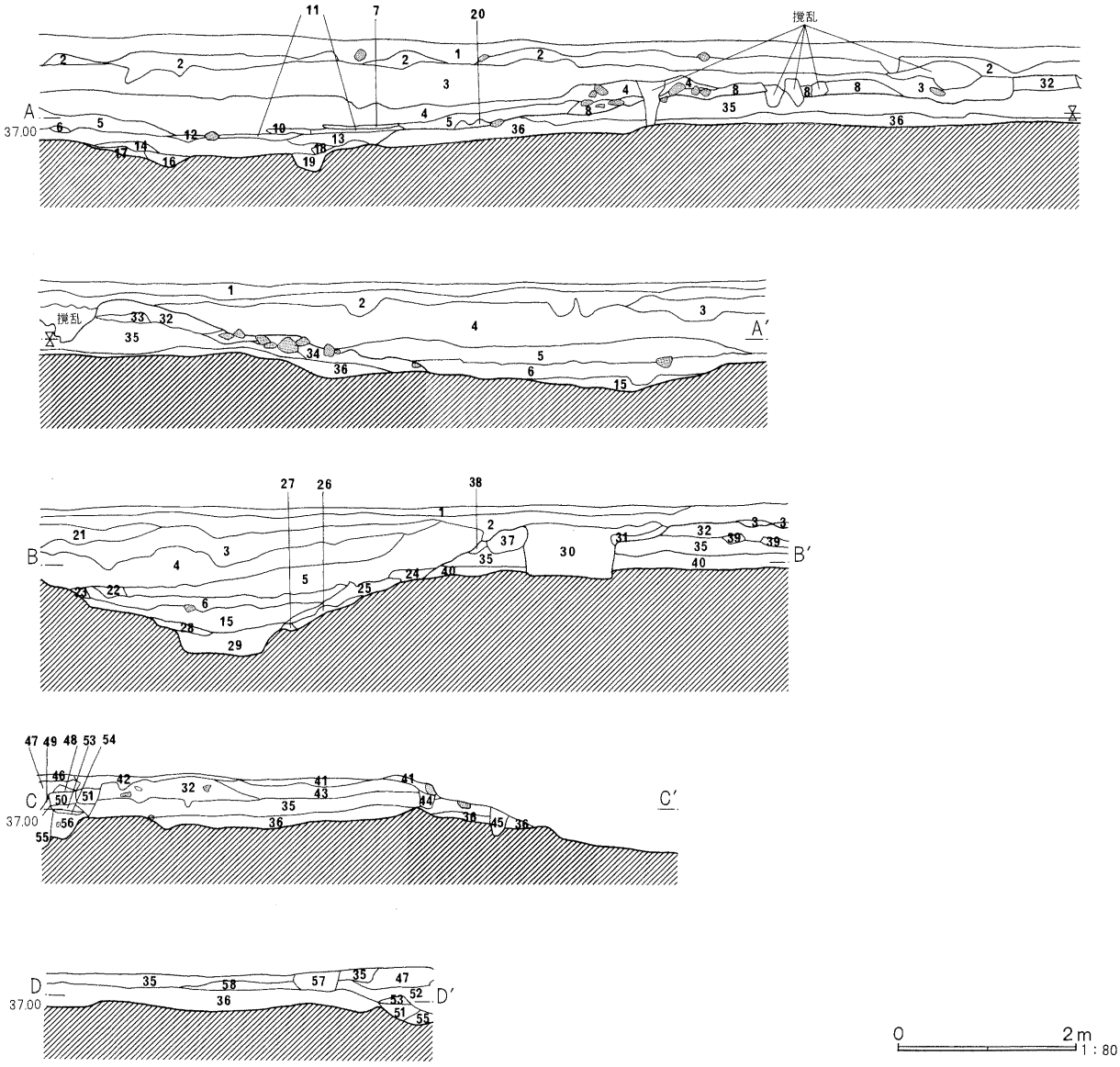
本墳は径約13mの円墳である。現在確認されている古墳群中、最も大きい古墳である。墳丘は現地表面下0.2～0.3m程で確認された。墳頂部は既に削平されていたが、墳丘は約0.5mの高さで下段のみ検出された。墳丘盛土は主に下から順に褐色土、黒褐色土、暗褐色土が積まれており、掘り方を有する主体部の周囲にも墳丘の構築にあわせて黄褐色土や黒色土などが裏込め土として積み重ねられていた。盛土は、ほとんどの層にローム粒やロームブロックを含んでおり、他の古墳と同じく全体的にしまりがあまり良くない。また、墳丘北東部の調査区壁の土層断面では、土坑状の掘り込み（30層）が確認されたが、これは墳丘が崩れるのを防ぐためのいわゆる「掘りこみ遺構」の可能性がある。

葺石は墳丘西側及び北側の調査区境や前庭部付近から検出された。墳丘西側及び北側の葺石は、ほとんど崩落しており、原位置を保っていない。ハの字状に開く前庭部付近の葺石は残りが良く、礫の長軸を辺に交差させる形で積み重ねられていた。また、前庭部西側では墳丘上段の葺石もやや崩れた状態ではあったが、若干検出された。上段の葺石は、下段の葺石から約１ｍ離れた箇所をハの字に併走していた。検出された長さは1.6m程である。主体部羨道部でも玄門部に近い所につながると思われる。葺石はすべて河原石であり、主に長軸25cm、短軸15cm、厚さ10cm前後を測るものが多くみられた。

周堀は現地表面下0.8～1.2mで検出された。検出できたのは北東部と南西部の一部分だけであり、大半が調査区外にある。周堀は全周せず、所々で途切れていた。主体部前は調査区外にあるが、南東部が


E 37.00
E'
F 37.00
F'
0
2m
1:80
調
査
区
外
調
査
区
外
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
36.50
37.00
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
= 焼 土
0
2m
1:100

第21図　第8号墳

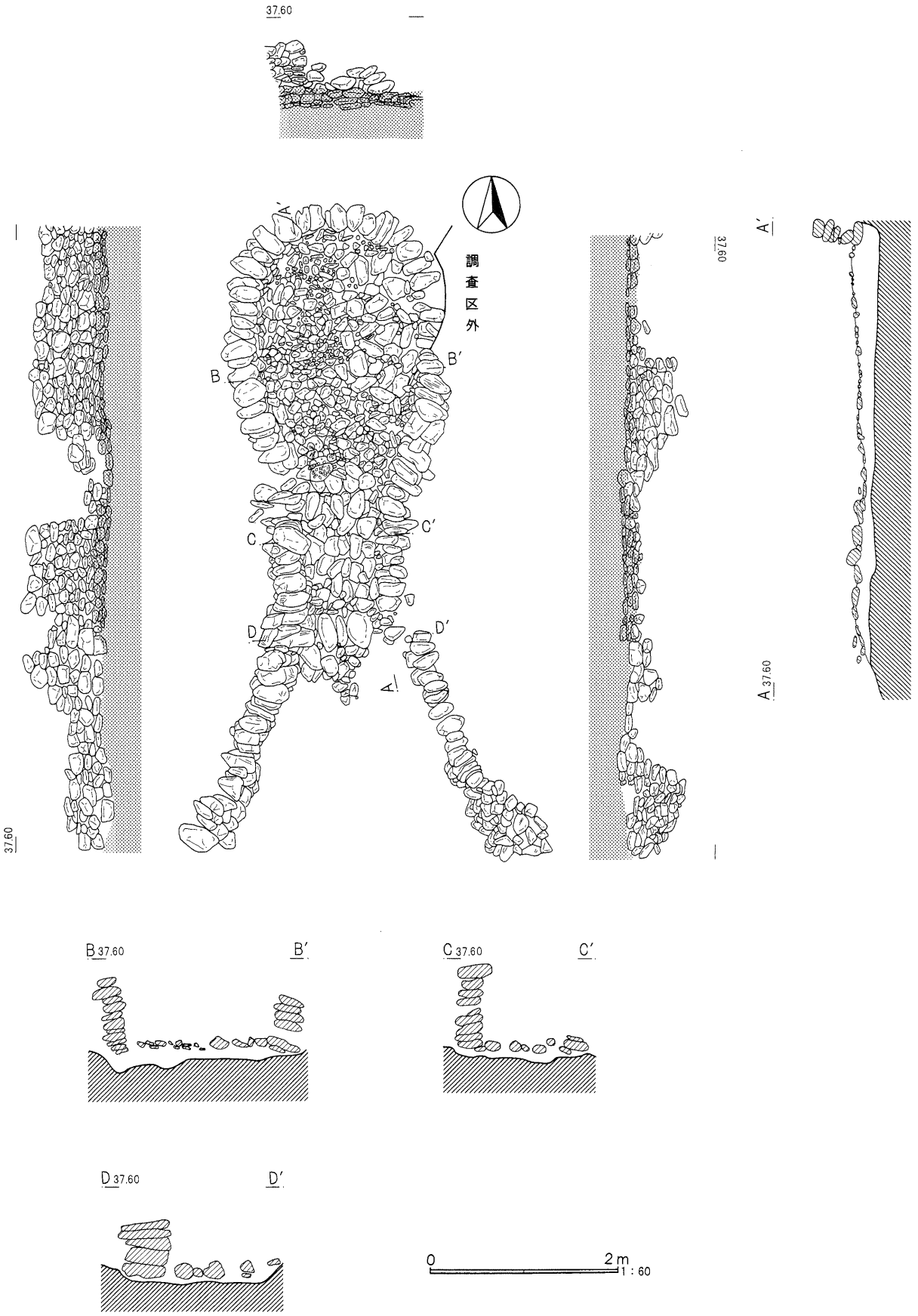



**第８号墳**

**土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＤＤ′）**

1 灰褐色土：火山灰少量含む。
2 灰褐色土：火山灰少量含む。しまり無。
3 暗褐色土：火山灰、ローム粒少量含む。
4 淡黄色土：シルト質。
5 淡黄色土：粘土質。
6 黒褐色土：淡黄色粒・ブロック少量含む。
7 灰褐色土：酸化鉄少量含む。粘土質。
8 暗褐色土：黒色土少量含む。しまり無。
9 黒褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
10 砂　　層
11 灰褐色土：酸化鉄少量含む。
12 黒褐色土：淡黄色粒多量含む。
13 黒褐色土
14 黒　色　土：ローム粒少量含む。
15 黒褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
16 暗褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
17 褐　色　土：黒色土少量含む。
18 黒　色　土：焼土少量含む。
19 暗褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
20 暗褐色土：ローム粒少量含む。しまり無。
21 灰褐色土：砂、礫多量含む。
22 黄褐色土：淡黄色粒・ブロック少量含む。
23 黄褐色土：淡黄色粒多量含む。
24 暗褐色土：淡黄色粒多量含む。
25 黒褐色土：淡黄色粒・ブロック少量含む。
26 黄褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
27 暗褐色土：ロームブロック少量含む。
28 暗褐色土：ローム粒少量含む。
29 黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
30 暗褐色土：ローム粒少量含む。
31 褐　色　土：ロームブロック多量含む。
32 暗褐色土：黒色粒・ブロック、ローム粒・ブロック少量含む。
33 褐　色　土：黒色粒、ローム粒少量含む。
34 黒褐色土：淡黄色粒少量含む。
35 黒褐色土：ローム粒少量含む。
36 褐　色　土：炭化物、ローム粒少量含む。
37 褐　色　土：ローム粒少量含む。
38 褐　色　土：ローム粒・ブロック少量含む。
39 褐　色　土：ロームブロック多量含む。
40 黒褐色土：下部に褐色土少量含む。
41 黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
42 暗褐色土
43 黒褐色土：褐色粒・ブロック少量含む。
44 黄褐色土：黒色土少量含む。
45 黒　色　土：ロームブロック少量含む。
46 暗褐色土：ローム粒少量含む。
47 黄褐色土：黒色土、ローム粒・ブロック少量含む。
48 黒褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
49 黄褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
50 暗褐色土：黒色土、ローム粒少量含む。
51 黄褐色土：黒色土、ローム粒・ブロック少量含む。
52 暗褐色土：黒色土、ローム粒少量含む。
53 褐　色　土：ローム粒少量含む。
54 黒　色　土
55 暗褐色土：ローム粒少量含む。
56 黒　色　土：褐色土、ロームブロック多量含む。
57 灰褐色土：黒色土、ローム粒少量含む。
58 褐　色　土：ロームブロック多量含む。

**第22図　第８号墳土層断面図**



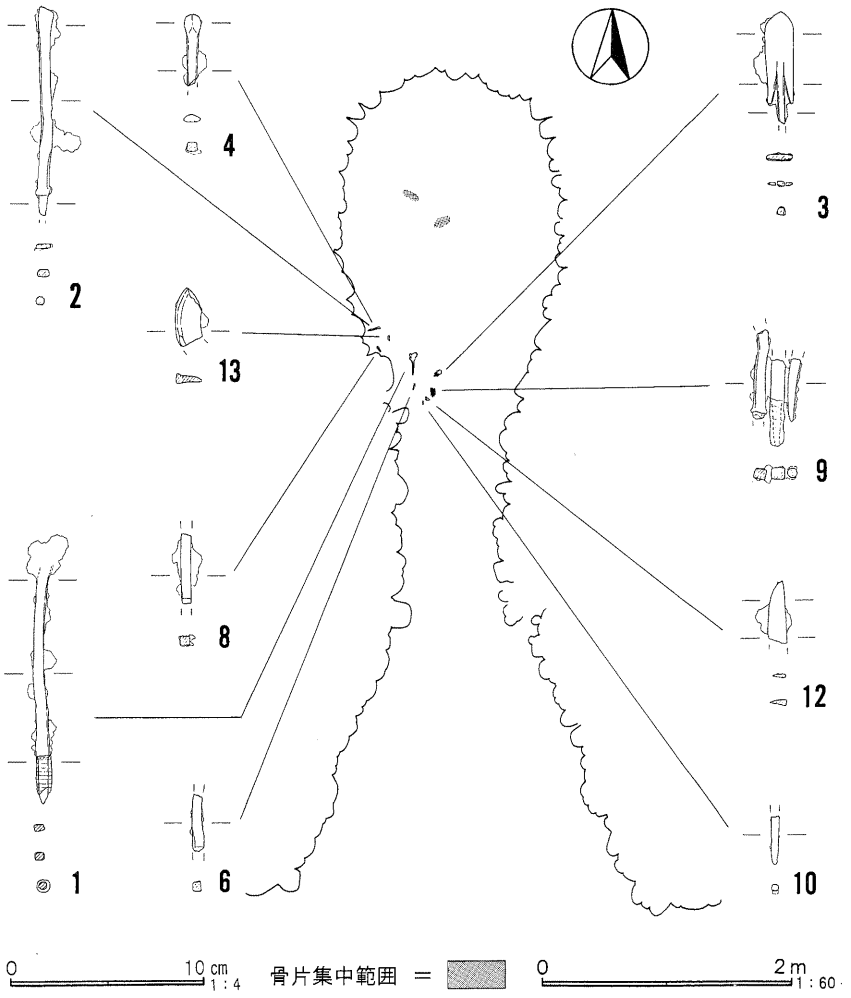

第23図　第 8 号墳石室

土坑状を呈していたことから、やや幅広の陸橋になると思われる。周堀の幅は2.5〜4.3mと一定せず、深さは最深部で0.8mを測る。各周堀からは焼土が検出され、南東部の土坑状を呈する周堀からは、土師器坏（16）が底面に据えられた状態で検出された。本墳も埴輪は検出されていない。

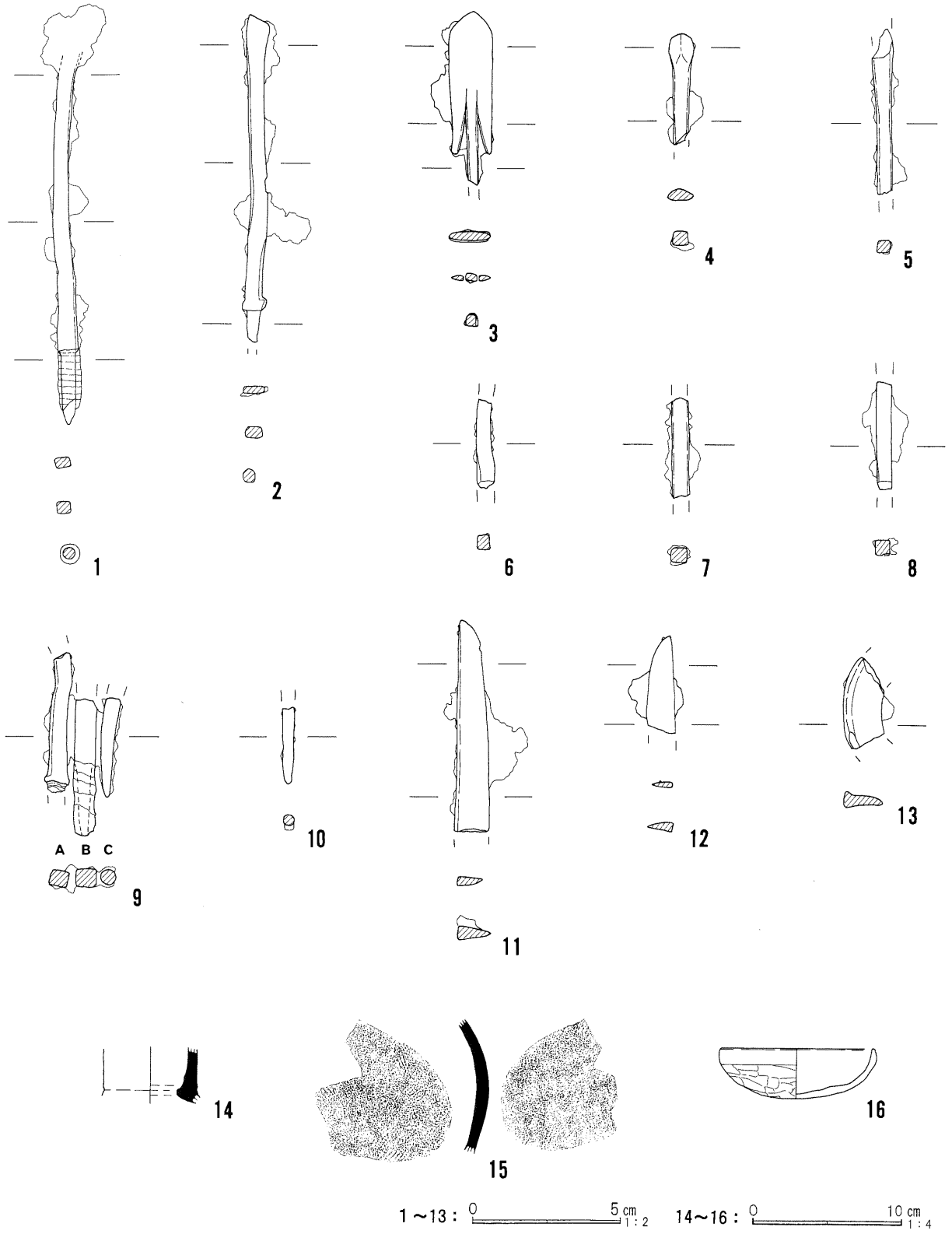
**主体部（第23図）**

主体部は河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。天井部は既に崩落し、玄室奥壁から羨道部東側壁にかけて上部大半を欠くが、残存状態は比較的良好であった。石室の主軸はN－1°—Wを示し、ほぼ南に開口する。石室の規模は全長4.4m、玄室の長さは3m、幅は奥壁が0.5m、ほぼ中央の最大幅が1.7m、玄門部が0.9mを測る。羨道部は長さが1.4m、幅は0.7m程である。羨道部と玄室の比率は、ほぼ1：2の割合になる。平面形態は玄室が馬蹄形を呈し、ほぼ中央が最大幅となる。羨道部はほぼ直線的であり、前面にはハの字に開く前庭部が広がる。なお、前庭部でも羨門部に近い所から焼土がまとまって検出された。奥壁及び側壁は河原石による小口積みであり、残りの良い西側壁は約0.8mの高さまで残存していた。根石には径10cm前後、厚さ5cm程の円形ないし楕円形の扁平な河原石が使用されており、一・二段据えられていた。根石の上には主に長軸35cm、短軸15cm、厚さ10cm前後の石が積まれていたが、羨門部にはさらに大きい河原石が根石段階から配置されていた。梱石は羨門部と玄門部で大きさが異なる。羨門部では長軸40cm、短軸20cm、厚さ15cm程であったが、玄門部ではそれらより一回り小さいものが据えられていた。また、羨道部の床面には玄門部の梱石とほぼ同じ大きさの石が長軸を南北に向けて敷かれており、玄門部の梱石との区別が明確でない。玄室床面には主に拳大の河原石が敷かれていたが、奥壁付近の床面東側には側壁に使用されたものとほぼ同じ大きさの石が敷かれていた。閉塞施設は、羨道部に梱石とほぼ同じ大きさの河原石が向きも梱石にあわせて積み上げられており、その間に拳大の河原石や小砂利が充塡されていた。

石室は掘り方内に構築されており、東側が調査区外にあるため短軸は不明であるが、長軸は7.5m程を測り、長方形を呈すると思われる。墳丘構築面からの深さは0.35mを測る。




第24図　第8号墳石室　鉄製品・骨片出土状況




第25図　第８号墳出土鉄製品・土器

## 出土遺物

出土遺物は、鉄製品（第25図１～13）、土器（14～16）がある。鉄鏃をはじめとする鉄製品は、石室玄室から、土器は石室外から検出された。玄室ほぼ中央では人骨片も僅かではあるが検出された。

第９表　第８号墳出土鉄製品観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 法　量・重　量・残　存　状　態・備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(14.3)cm、最大幅0.6cm、最大厚0.5cm。重量(13.3)ｇ。完形。鏃身部錆化顕著。 |
| 2 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(10.75)cm、最大幅0.8cm、最大厚0.4cm。重量9.6ｇ。茎部欠。 |
| 3 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(5.9)cm、最大幅(1.5)cm、最大厚 鏃身部0.3cm、篦被部0.4cm。重量(7.9)ｇ。鏃身～篦被上部のみ。 |
| 4 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(3.8)cm、最大幅(0.85)cm、最大厚0.5cm。重量(3.1)ｇ。鏃身～篦被上部のみ。 |
| 5 | 前庭部 | 鉄　鏃 | 最大長(5.65)cm、最大幅(0.7)cm、最大厚0.6cm。重量(3.5)ｇ。篦被部のみ。 |
| 6 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(3.0)cm、最大幅(0.5)cm、最大厚0.5cm。重量(2.0)ｇ。篦被部のみ。 |
| 7 | 前庭部 | 鉄　鏃 | 最大長(3.4)cm、最大幅(0.55)cm、最大厚0.5cm。重量(3.3)ｇ。篦被部のみ。 |
| 8 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(3.7)cm、最大幅(0.5)cm、最大厚(0.5)cm。重量(3.9)ｇ。篦被部のみ。 |
| 9 | 玄　室 | 鉄　鏃 | A:最大長(4.8)cm、最大幅(0.8)cm、最大厚0.5cm。篦被部のみ。B:最大長(4.6)cm、最大幅(0.7)cm、最大厚(0.6)cm。篦被下～茎上部のみ。C:最大長(3.35)cm、最大径(0.5)cm。茎部のみ。重量Ａ＋Ｂ＋Ｃ=(11.4)ｇ。 |
| 10 | 玄　室 | 鉄　鏃 | 最大長(2.6)cm、最大径0.45cm。重量(0.8)ｇ。茎部のみ。 |
| 11 | 玄　室 | 刀　子 | 最大長(7.2)cm、最大幅(1.2)cm、最大厚0.5cm。重量(10.0)ｇ。茎部欠。 |
| 12 | 玄　室 | 刀　子 | 最大長(3.3)cm、最大幅(0.95)cm、最大厚0.3cm。重量(2.7)ｇ。切先のみ。 |
| 13 | 玄　室 | 不明鉄製品 | 最大長(3.1)cm、最大幅1.35cm、最大厚0.55cm。重量(2.9)ｇ。大半欠。環状。 |

第10表　第８号墳出土土器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 墳　丘 | 須恵器長頸瓶 | － | (3.7) | － | ABL | 灰色 | A | 頸部25％ | 末野産。 |
| 15 | 前庭部 | 須恵器　甕 | － | － | － | ABL | 灰色 | A | 胴部片 | 末野産。 |
| 16 | 周　堀 | 土師器　坏 | 10.4 | 3.4 | － | ABHIMJK | 橙色 | B | 完形 | |

### 鉄製品（第25図１～13）

１～10は鉄鏃。５・７は前庭部、それ以外は石室玄門部に近い西側礫床面から検出された（第24図）。鏃身部の形態は様々であるが、頸部との境に関は無く、関篦被ないし棘篦被を持つ有茎鏃である。１は唯一の完形品であるが、鏃身部の錆化が顕著であり、形状は不明である。茎部には弦が残存する。２は端刃造片刃箭式。茎端部のみ欠く。３・４は鏃身部のみの検出である。３は両丸造腸抉柳葉式。４は片丸造鑿箭式。５～８は篦被部片。３・４とは接合関係になかったが、同一個体になる可能性がある。９は篦被部及び茎部が３本合わさって検出された。Ｂの茎部には弦が残存する。10は茎部先端のみである。11・12は刀子。11は切先から中段まで、12は切先のみ検出された。13は不明鉄製品。環状を呈する。

### 土　器（第25図14～16）

14・15は須恵器。ともに末野産。14は長頸瓶の頸部片。墳丘から出土した。15は甕の胴部片。外面には叩き目、内面には微かに青海波文がみられた。前庭部から出土した。16は土師器坏。北武蔵型坏。完形品。口縁部が僅かに内傾する。丸底。周堀南東部底面から出土した。

### 小　結

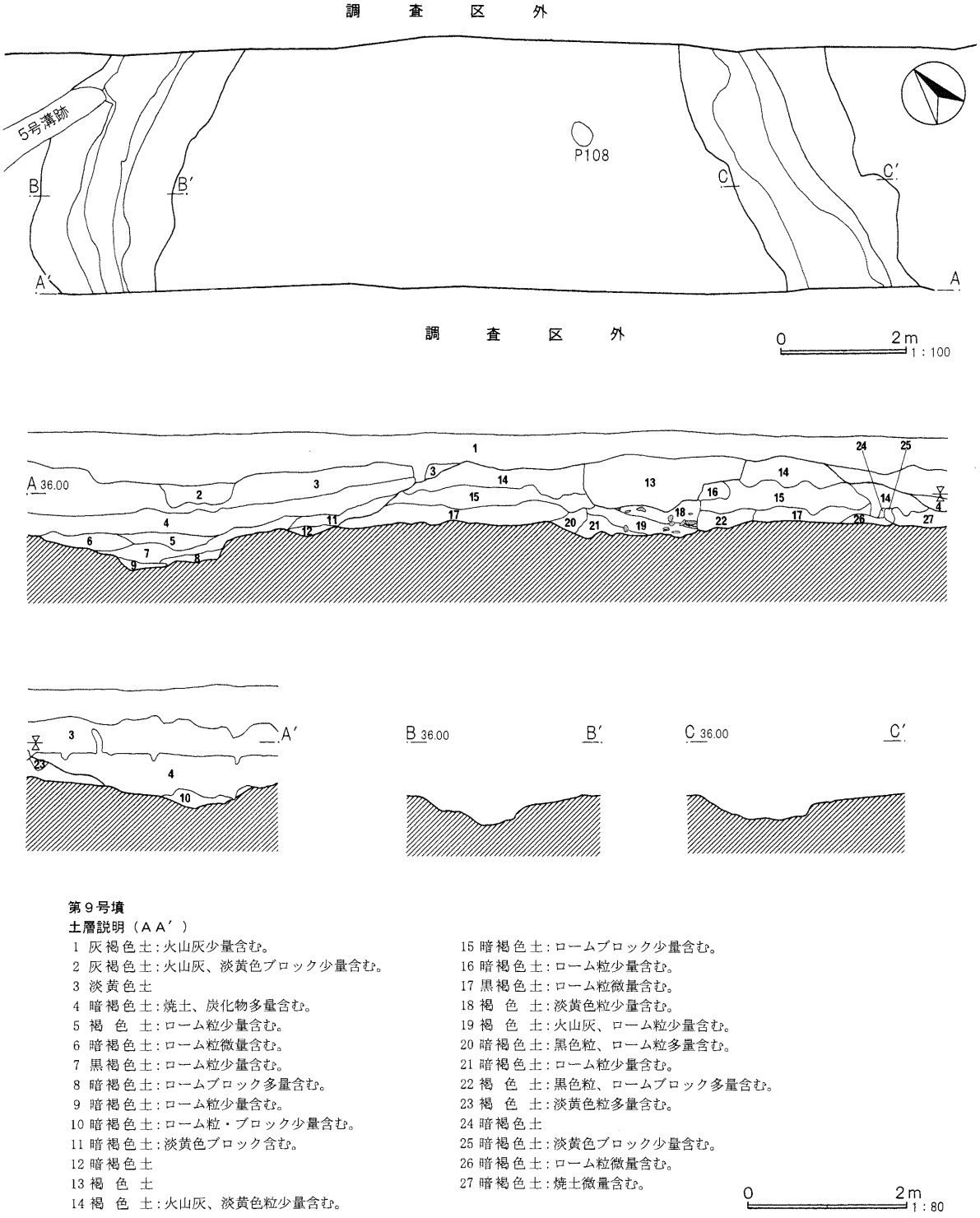
本墳は径約13mを測る。規模は本古墳群中、最大である。墳丘北東部ではいわゆる「掘り込み遺構」がみられた。主体部は河原石による胴張り型の横穴式石室であり、掘り方内に構築されていた。葺石は墳丘全体を覆っていたと思われる。前庭部では上段の葺石も若干検出された。周堀は全周せず、所々で途切れる。出土遺物や主体部の構造などから７世紀後半～８世紀初頭頃の築造と思われる。

## 第９号墳

### 位置・状態

第６区Ｏ～Ｑ―40～43グリッドに位置する。２号墳の東約60mにあり、本古墳群の東端に位置する。

検出できたのは周堀の北西部と東側のみである。墳丘は表土掘削時に削平してしまったために検出できなかったが、調査区壁での土層断面観察の結果、残存していたことが判明した。なお、周堀北西部は




第９号墳
土層説明（ＡＡ′）

1 灰褐色土：火山灰少量含む。
2 灰褐色土：火山灰、淡黄色ブロック少量含む。
3 淡黄色土
4 暗褐色土：焼土、炭化物多量含む。
5 褐　色　土：ローム粒少量含む。
6 暗褐色土：ローム粒微量含む。
7 黒褐色土：ローム粒少量含む。
8 暗褐色土：ロームブロック多量含む。
9 暗褐色土：ローム粒少量含む。
10 暗褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
11 暗褐色土：淡黄色ブロック含む。
12 暗褐色土
13 褐　色　土
14 褐　色　土：火山灰、淡黄色粒少量含む。
15 暗褐色土：ロームブロック少量含む。
16 暗褐色土：ローム粒少量含む。
17 黒褐色土：ローム粒微量含む。
18 褐　色　土：淡黄色粒少量含む。
19 褐　色　土：火山灰、ローム粒少量含む。
20 暗褐色土：黒色粒、ローム粒多量含む。
21 暗褐色土：ローム粒少量含む。
22 褐　色　土：黒色粒、ロームブロック多量含む。
23 褐　色　土：淡黄色粒多量含む。
24 暗褐色土
25 暗褐色土：淡黄色ブロック少量含む。
26 暗褐色土：ローム粒微量含む。
27 暗褐色土：焼土微量含む。

第26図　第９号墳

籠原裏遺跡の平安時代の５号溝跡、墳丘東側では時期不明のピット108に切られている。

**墳丘・外部施設（第26図）**

墳丘は現地表面下0.2～0.3mに下段のみ残存していたことが確認された。墳頂部は既に削平されていたが、墳丘の高さは約0.8mを測る。本墳は円形に回る周堀の状況から径約８mの小円墳と推定される。

墳丘盛土は、主に下から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の順に積み重ねられており、ほとんどの層にローム粒やロームブロックを含んでいた。盛土は全体的にしまりがあまり良くなかった。

葺石は崩落したものも含めて全く検出されなかったため、墳丘全体を覆っていたか不明である。

周堀は現地表面下1.3m程で検出された。北西部及び東側の一部のみ検出され、大半は調査区外にある。周堀の幅は1.8m前後を測り、深さは最深部で0.3mと浅い。底面にはやや凹凸がみられた。本墳も埴輪は検出されなかった。

**主体部**

主体部も墳丘同様、削平してしまったために検出できなかったが、表土掘削段階や調査区壁の土層断面で礫が全く検出されなかったことから、発掘調査以前に破壊されていた可能性が高い。規模など詳細は不明であるが、調査区壁の断面では床面に敷かれたと思われる河原石が若干検出された。本墳の主体部も他の古墳と同じく河原石を使用した胴張り型の横穴式石室であったと思われる。また、断面では石室構築箇所が墳丘構築面より若干窪んでいたのが確認された。平面的に掘り方として認められなかったことから、1号墳のように石室構築に際してやや低く整地したものと思われる。

**出土遺物**

本墳に伴う遺物は検出されなかった。

**小　結**

本墳は墳丘を検出できなかったが、径約8mの小円墳と推定される。主体部も検出できなかったが、他の古墳同様、河原石による胴張り型の横穴式石室であったと思われる。本墳に伴う遺物はないが、埴輪がないことから7世紀以降の築造と思われる。

## 2　その他の時代の遺物

各古墳からは他時代の遺物が多数検出された。遺物は縄文時代前・中期、古墳時代前期、平安時代、中・近世と幅広くみられ、これらはすべて同所に所在する籠原裏遺跡からの流れ込みである。遺跡の主体となるのは平安時代の集落跡であることから、同時代の遺物が多く検出された。時期はすべて9世紀後半～10世紀初頭に限定される。なお、須恵器甕は破片での検出が多く、時代の判別が困難であったが、その多くが平安時代の坏類とともに出土したことや整形技法の特徴などから同時代のものと判断した。

**第1号墳出土遺物（第27・28図）**

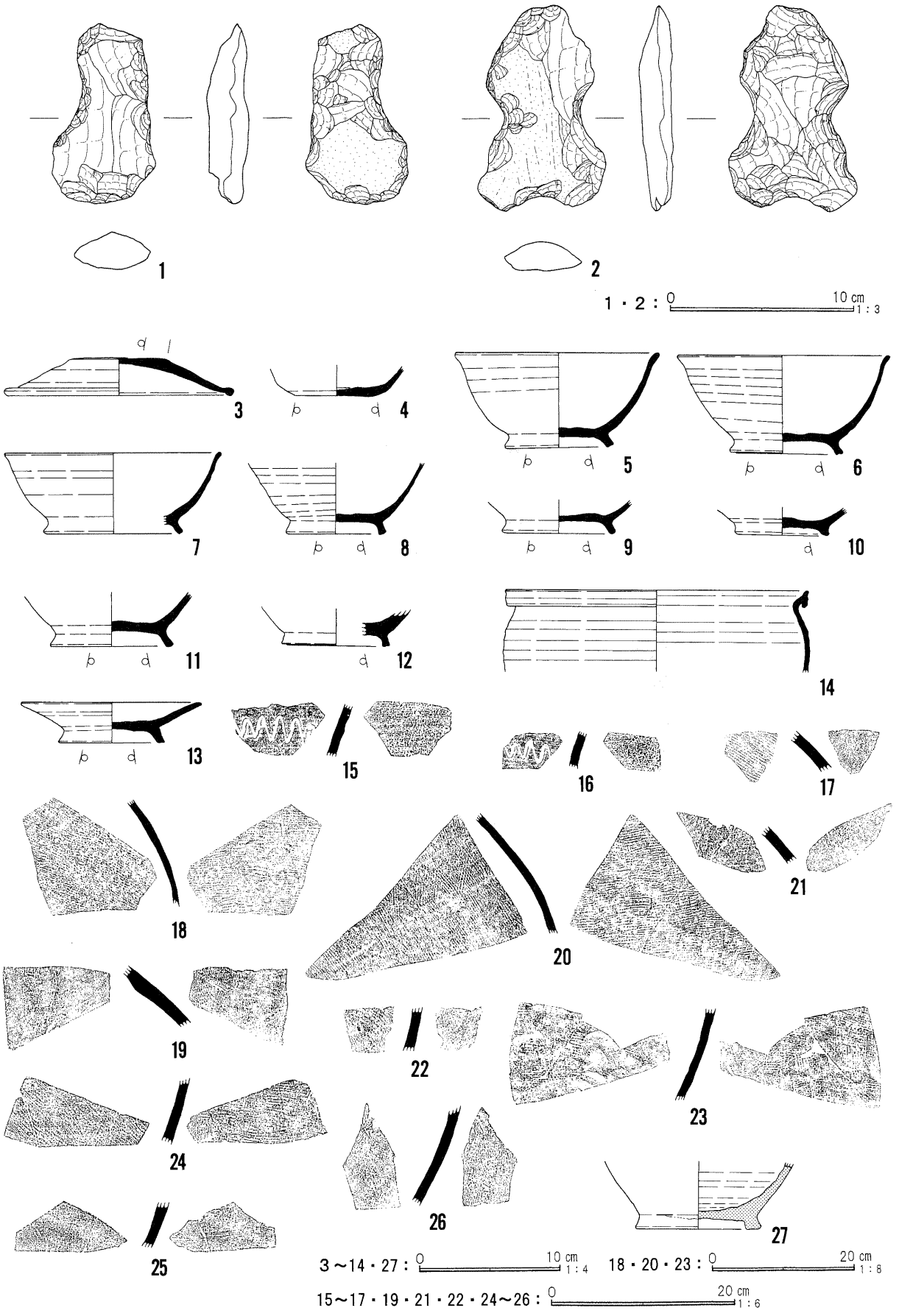
本墳からは縄文時代と平安時代の遺物が検出された。主に周堀からの検出が多い。

**縄文時代（第27図1・2）**

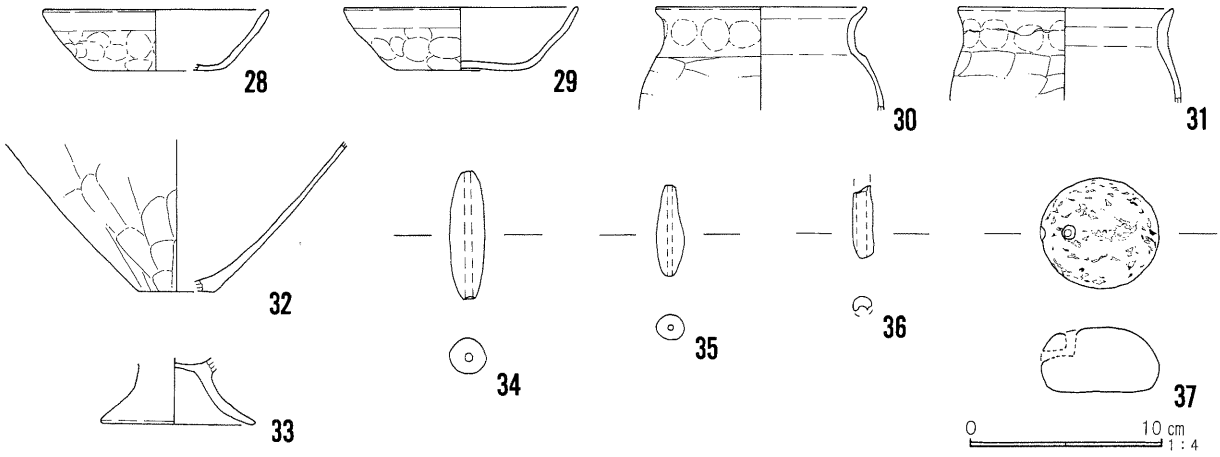
1・2は打製石斧。2・4号墳では縄文時代前期、籠原裏遺跡では縄文時代前期から中期中葉にかけての土器片が出土していることから、これらの石器も縄文時代前・中期いずれかのものと思われる。

**平安時代（第27・28図3～37）**

須恵器（3～26）は蓋、坏、高台付椀、高台付皿、鉢、甕がある。末野産がほとんどを占める。27は灰釉陶器瓶類の底部片。産地は不明である。底面中央に釉が付着している。土師器（28～33）は坏、甕、台付甕がある。甕の30・31は小型であり、台付の可能性がある。土錘は3点検出された。34が大型、35・36は中型のものである。37は軽石。側面に孔が貫通しており、紐を通した孔と思われる。




第27図　第１号墳出土遺物(1)　縄文・平安時代



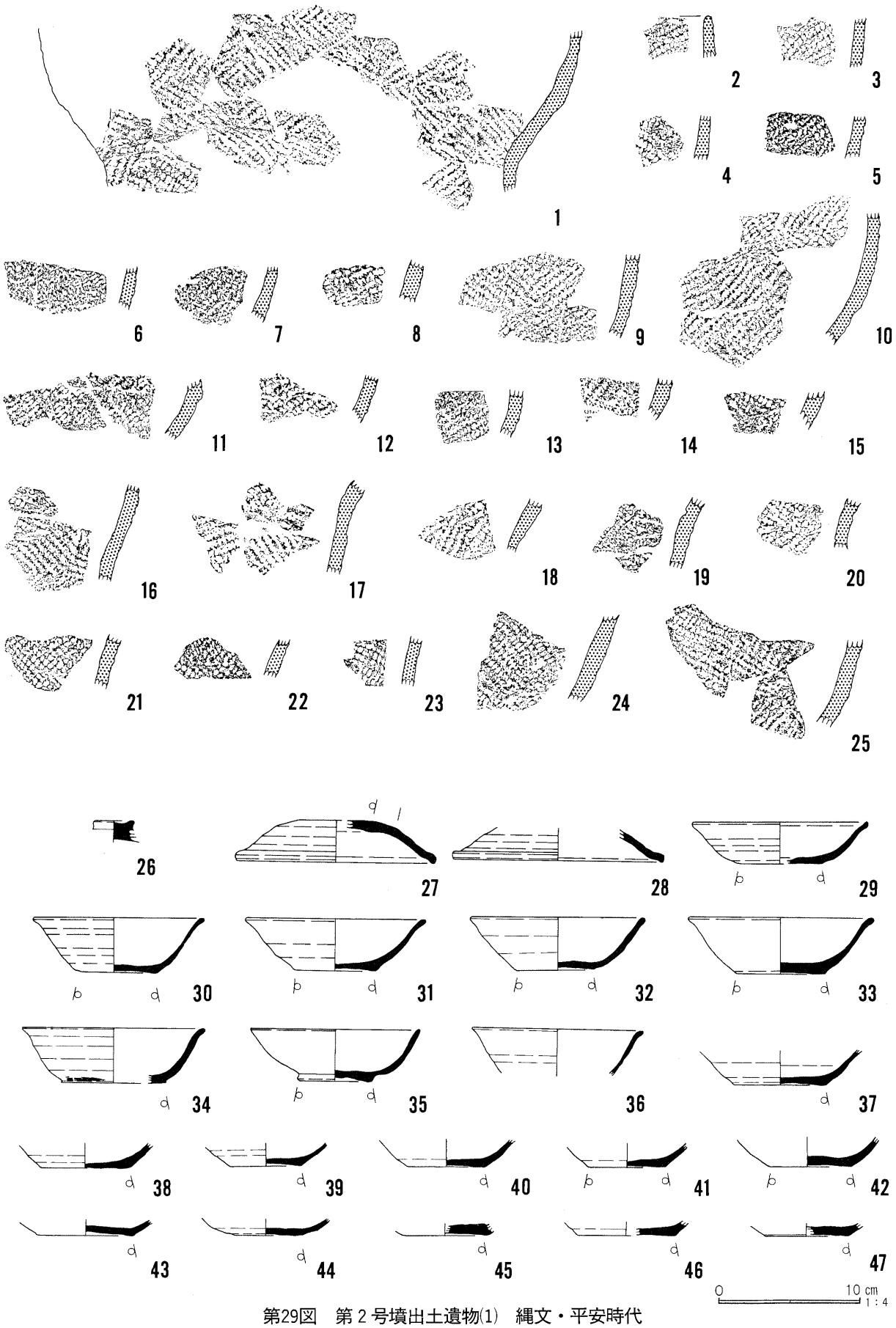

第28図　第１号墳出土遺物(2)　平安時代

第11表　第１号墳出土遺物（縄文・平安時代）観察表

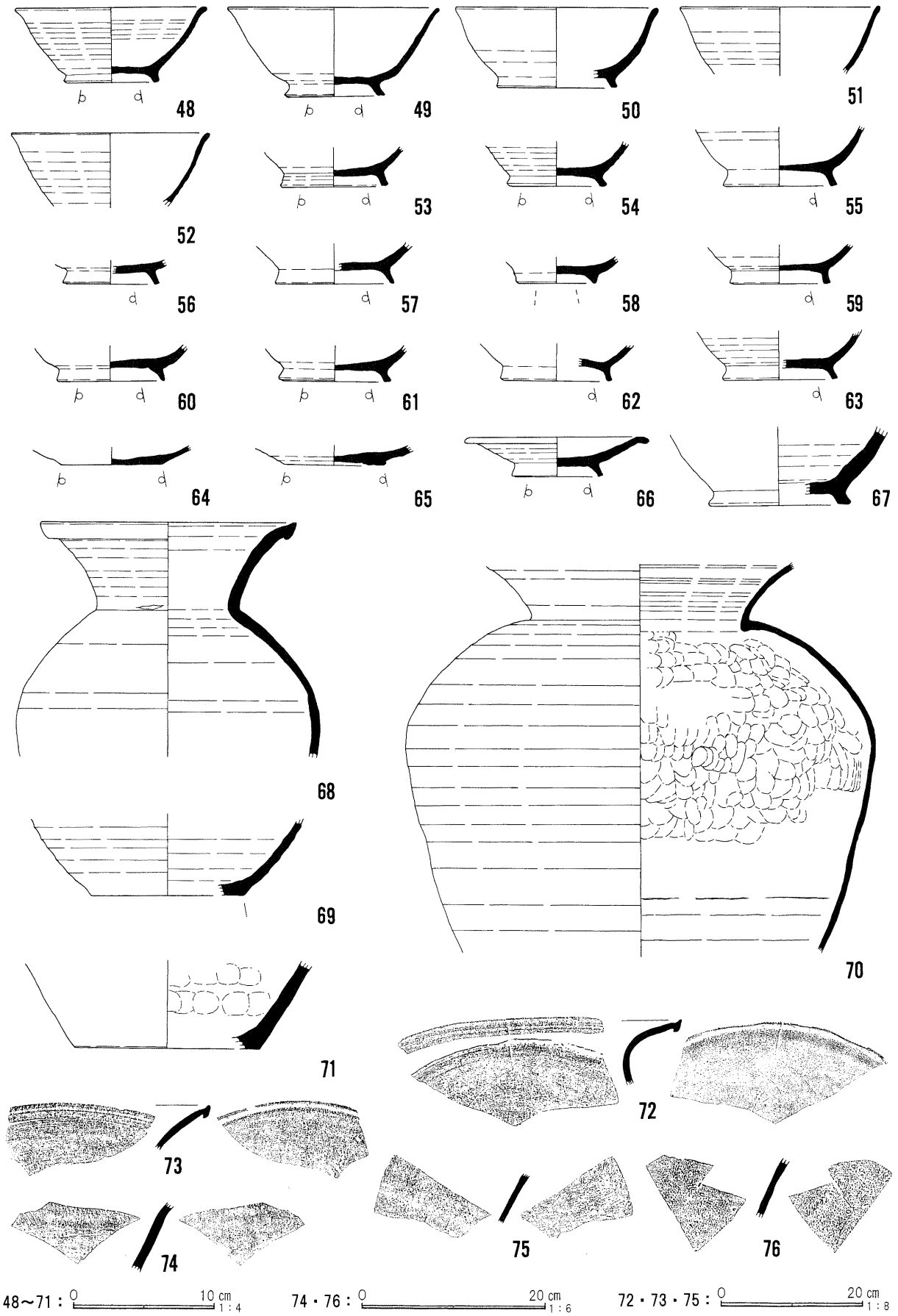
| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 打製石斧 | 最大長9.6cm、最大幅5.5cm、最大厚2.2cm。重量120ｇ。中粒砂岩。完形。 | | | | | | | |
| 2 | 石　室 | 打製石斧 | 最大長10.9cm、最大幅6.7cm、最大厚1.7cm。重量140ｇ。粘板岩。完形。 | | | | | | | |
| 3 | 周　堀 | 須恵器　蓋 | (16.6) | 2.6 | (7.0) | ABDLN | 灰黄褐色 | B | 20% | 末野産。 |
| 4 | 周　堀 | 須恵器　坏 | - | (2.2) | 6.0 | AHDLM | にぶい黄橙色 | C | 底部100% | 末野産。 |
| 5 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | 14.7 | 6.8 | 7.9 | ABCDHLN | 灰色 | A | 50% | 末野産。 |
| 6 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | 15.3 | 7.1 | 8.2 | ABEL | 黄灰色 | A | 80% | 末野産。 |
| 7 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | (15.6) | 5.8 | (10.0) | ALN | 青灰色 | A | 20% | 末野産。 |
| 8 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (5.1) | 7.2 | ABHJLN | 黒褐色 | A | 60% | 末野産。 |
| 9 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.4) | 8.2 | ADHLN | にぶい黄褐色 | B | 高台部50% | 末野産。 |
| 10 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.0) | 6.8 | ADGHNL | 灰色 | B | 高台部60% | 末野産。 |
| 11 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (3.9) | 8.8 | ADGILMN | 灰黄色 | C | 高台部80% | 末野産。 |
| 12 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.7) | (7.8) | ABL | 灰色 | A | 高台部25% | 末野産。 |
| 13 | 周　堀 | 須恵器高台皿 | (13.0) | 2.9 | 7.6 | AGHNL | 灰色 | B | 60% | 末野産。 |
| 14 | 周　堀 | 須恵器　鉢 | (21.8) | (5.8) | - | BGHL | 灰白色 | A | 口～胴20% | 末野産。 |
| 15 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABGNL | 灰色 | B | 頸部片 | 末野産。No.16と同一個体。 |
| 16 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHLN | 灰色 | A | 頸部片 | 末野産。No.15と同一個体。 |
| 17 | 石　室 | 須恵器　甕 | - | - | - | AFN | 暗灰色 | A | 胴上部片 | 南比企産。 |
| 18 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ACDFN | 灰色 | B | 胴上部片 | 南比企産。 |
| 19 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABELMN | 灰黄色 | B | 肩部片 | 末野産。No.25・26と同一個体。 |
| 20 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABEHLMN | 灰黄色 | B | 胴上部片 | 末野産。No.24と同一個体。 |
| 21 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABELMN | 灰色 | B | 胴上部片 | 末野産。 |
| 22 | 石　室 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHL | 灰色 | B | 胴下部片 | 末野産。No.23と同一個体。 |
| 23 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDHLN | 灰オリーブ色 | B | 胴下部片 | 末野産。No.22と同一個体。 |
| 24 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABKLMN | 灰黄色 | B | 胴下部片 | 末野産。No.20と同一個体。 |
| 25 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABELN | 灰黄色 | B | 胴下部片 | 末野産。No.19・26と同一個体。 |
| 26 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABEHKMN | 灰黄色 | B | 胴下部片 | 末野産。No.19・25と同一個体。 |
| 27 | 墳　丘 | 灰釉陶器　瓶 | - | (4.9) | 9.0 | AND | 灰黄褐色 | A | 底部100% | 底部内面中央に釉付着。 |
| 28 | 周堀・墳丘 | 土師器　坏 | (12.0) | 3.2 | (7.2) | BKM | にぶい橙色 | B | 20% | |
| 29 | 周　堀 | 土師器　坏 | (12.4) | 3.3 | (7.2) | BHM | にぶい橙色 | A | 25% | |
| 30 | 周　堀 | 土師器　甕 | 11.2 | (5.4) | - | ABEIKM | 明赤褐色 | A | 口～胴70% | 台付？ |
| 31 | 周　堀 | 土師器　甕 | (11.4) | (4.9) | - | BGIKM | 橙色 | C | 口～胴40% | 台付？ |
| 32 | 周　堀 | 土師器　甕 | - | (7.9) | (4.0) | ABEJK | 橙色 | A | 胴～底10% | |
| 33 | 周　堀 | 土師器台付甕 | - | (3.5) | 8.7 | ABDHJKM | 赤褐色 | B | 台部100% | |
| 34 | 石　室 | 土　錘 | 最大長6.7cm、最大径1.9cm、孔径0.45cm。重量23.3ｇ。完形。 | | | | | | | |
| 35 | 周　堀 | 土　錘 | 最大長4.8cm、最大径1.45cm、孔径0.25cm。重量8.2ｇ。完形。 | | | | | | | |
| 36 | 周　堀 | 土　錘 | 最大長(3.8)cm、最大径(1.1)cm、孔径(0.55)cm。重量(3.0)ｇ。半分欠。 | | | | | | | |
| 37 | 周　堀 | 軽　石 | 最大径6.2cm、最大厚3.4cm。重量64.8ｇ。完形。孔有。 | | | | | | | |

## 第２号墳出土遺物（第29～32図）

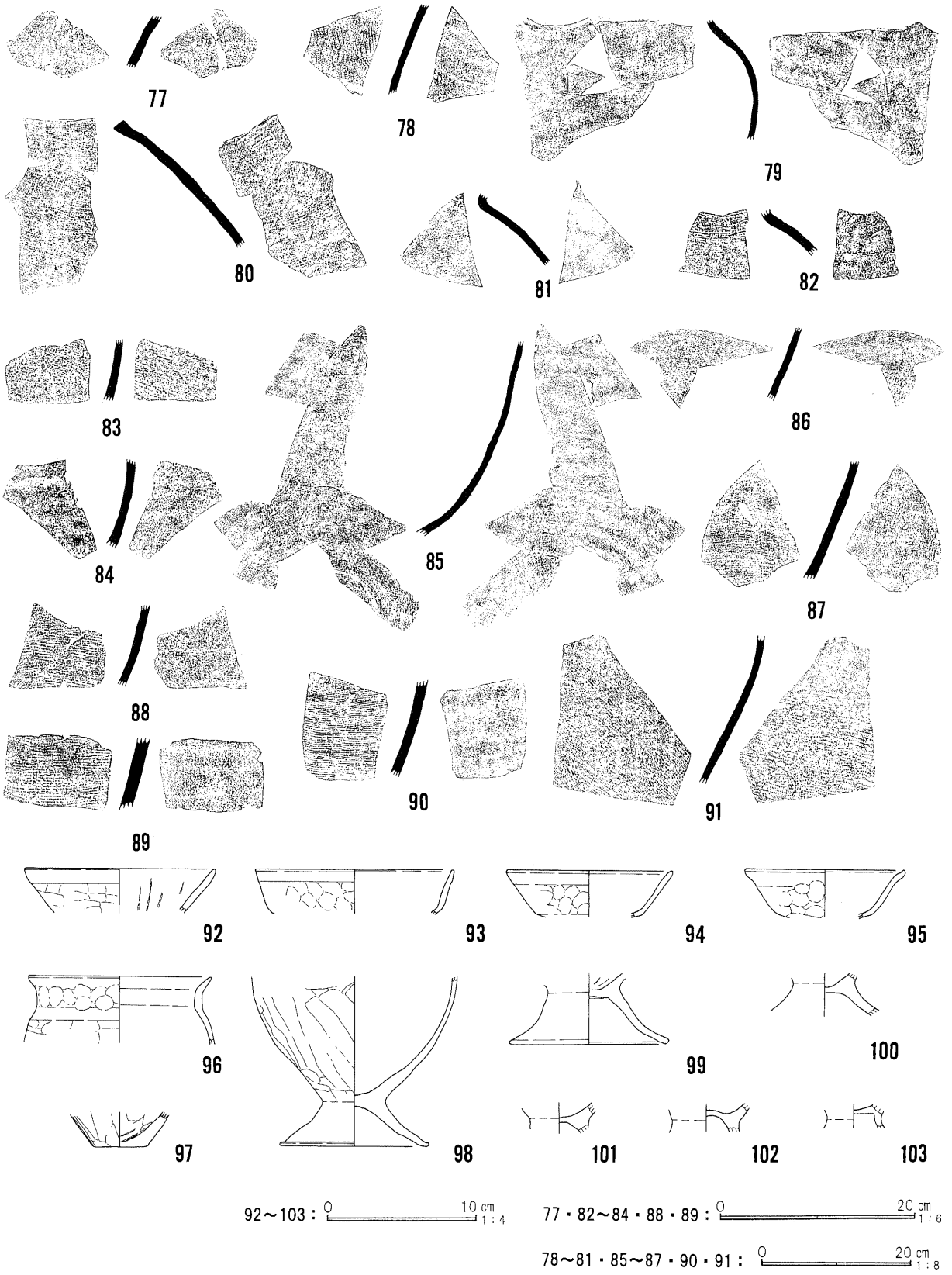
本墳からは縄文時代、平安時代、中世の遺物が検出された。平安時代の遺物は、前庭部及びその周辺からの検出が多い。



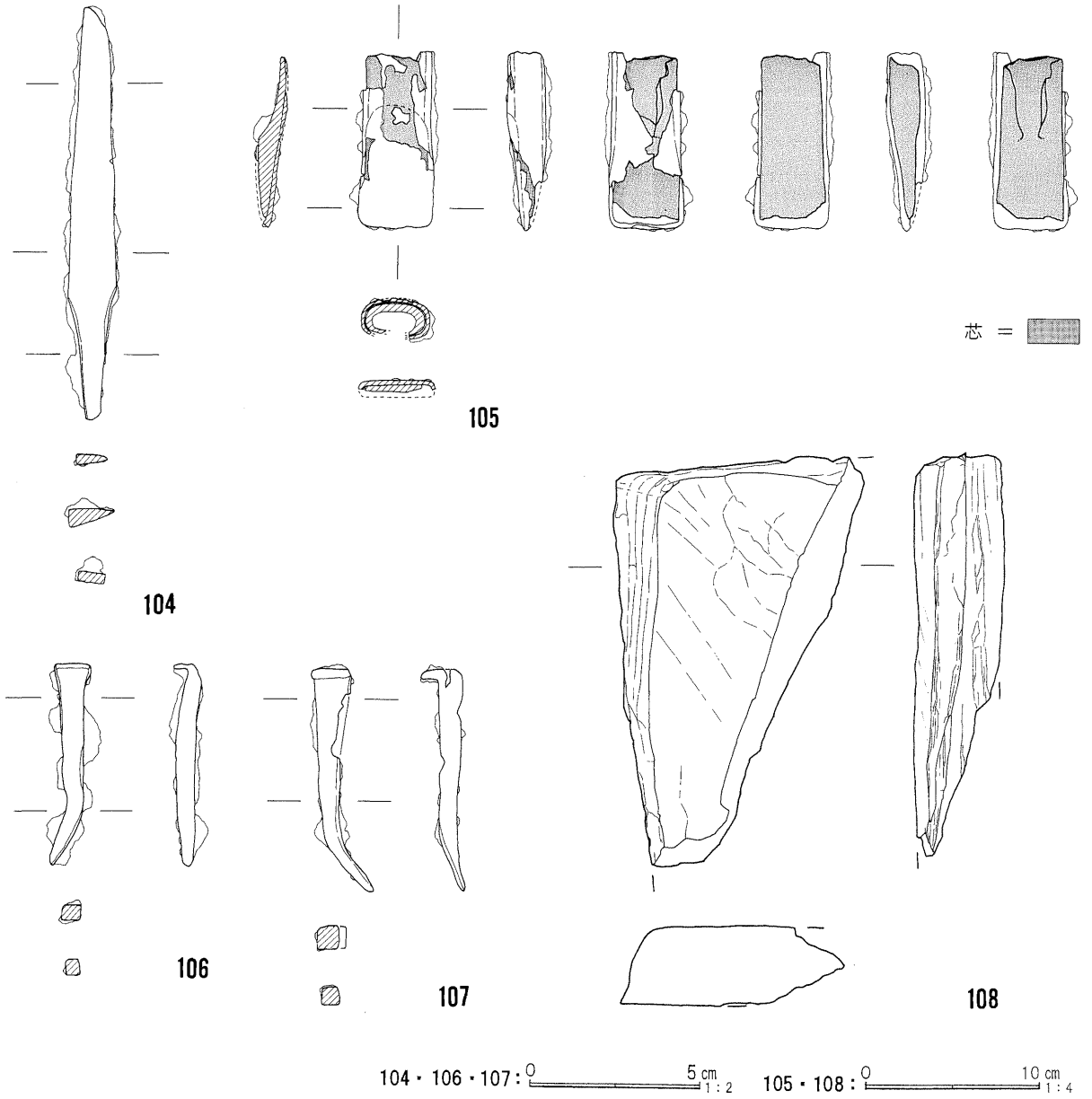

第29図　第２号墳出土遺物(1)　縄文・平安時代




第30図　第２号墳出土遺物(2)　平安時代




第31図　第２号墳出土遺物(3)　平安時代




第32図　第２号墳出土遺物(4)　平安時代・中世

**縄文時代（第29図１～25）**

縄文時代前期前葉・黒浜式土器の深鉢。すべて同一個体であるが、２～25は１と接合関係にない。胎土には繊維が含まれている。７のみ墳丘から出土し、その他は周堀北東部から出土した。

**平安時代（第29～32図26～107）**

須恵器（26～91）は蓋、坏、高台付椀、皿、高台付皿、瓶類、壺、甕がある。末野産を主体に南比企産も若干みられた。土師器（92～103）は坏、甕、台付甕がある。甕の96は小型であり、台付の可能性がある。鉄製品は刀子（104）、鉄斧（105）、鉄釘（106・107）がある。いずれも残りが良い。出土位置などから平安時代としたが、刀子は本墳に伴う可能性もある。

**中　世（第32図108）**

緑泥片岩製であり、周縁が丁寧に加工されている。板碑の破片であろうか。墳丘から出土した。

## 第12表　第２号墳出土遺物（縄文・平安時代・中世）観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | (11.6) | - | ABEGHIKMO | にぶい橙色 | B | 40% | 縄文前期。№２～25同一個体。 |
| 2 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEGHIKO | にぶい黄橙色 | B | 口縁部片 | |
| 3 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABDKJO | にぶい黄褐色 | B | 口縁部片 | |
| 4 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABCEJKNO | にぶい橙色 | B | 口縁部片 | |
| 5 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABCEHJKNO | にぶい橙色 | B | 口縁部片 | |
| 6 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEHIJKO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 7 | 墳　丘 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABDHIKO | にぶい褐色 | B | 胴部片 | |
| 8 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEHIKMO | にぶい褐色 | B | 胴部片 | |
| 9 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEGHKNO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 10 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEHIKO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 11 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEIJKO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 12 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEKMO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 13 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABCEHIJKO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 14 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEHKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 15 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 16 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABCEHIJKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 17 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEGHJKO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 18 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEHJKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 19 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABCEIJO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 20 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABDEHKO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 21 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEGHJKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 22 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEJKNO | にぶい黄橙色 | B | 胴部片 | |
| 23 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEJKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 24 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEGJKO | にぶい橙色 | B | 胴部片 | |
| 25 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEHJKO | 橙色 | B | 胴部片 | |
| 26 | 石　室 | 須恵器　蓋 | - | (1.5) | - | ABDGHN | 灰黄色 | C | つまみのみ | 末野産？ |
| 27 | 墳　丘 | 須恵器　蓋 | (14.6) | 3.0 | (5.4) | ABGNL | 灰色 | B | 25% | 末野産。歪み有。 |
| 28 | 周　堀 | 須恵器　蓋 | (15.3) | (2.3) | - | ABEIKM | にぶい黄色 | A | 口縁部15% | 末野産？ |
| 29 | 前庭部 | 須恵器　坏 | (12.6) | 3.0 | 6.0 | ABGL | 黄灰色 | B | 50% | 末野産。 |
| 30 | 前庭部 | 須恵器　坏 | (12.4) | 3.9 | 5.9 | ABHJKM | にぶい褐色 | A | 40% | 末野産？酸化焔焼成。 |
| 31 | 墳　丘 | 須恵器　坏 | (13.0) | 3.7 | 5.8 | ABDGHL | 黄灰色 | B | 50% | 末野産。 |
| 32 | 周　堀 | 須恵器　坏 | 12.7 | 3.9 | 5.6 | ABFGN | にぶい赤褐色 | A | 60% | 南比企産。 |
| 33 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (13.4) | 4.05 | 6.6 | BDGHKL | 外:黒褐 内:黄褐 | C | 45% | 末野産。酸化焔焼成。 |
| 34 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (13.2) | 3.9 | (7.6) | ABDHL | 灰色 | B | 20% | 末野産。 |
| 35 | 前庭部 | 須恵器　坏 | (12.3) | 3.7 | 5.5 | ABKM | 灰白色 | B | 60% | 産地不明。 |
| 36 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (12.4) | (3.3) | - | AGL | 暗灰色 | B | 口縁部20% | 末野産。 |
| 37 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (2.5) | (6.6) | ABHILN | 黄灰色 | B | 底部45% | 末野産。 |
| 38 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (1.8) | (6.6) | ADL | 灰白色 | B | 底部25% | 末野産。 |
| 39 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (1.7) | (5.2) | ABEGL | 灰白色 | C | 底部25% | 末野産。 |
| 40 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (2.0) | (5.6) | ABHL | 灰色 | A | 底部25% | 末野産。 |
| 41 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (1.7) | 5.9 | ABGL | 灰色 | A | 底部100% | 末野産。 |
| 42 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (2.2) | 6.4 | ABGHL | 褐灰色 | B | 底部100% | 末野産。 |
| 43 | 前庭部・墳丘 | 須恵器　坏 | - | (1.2) | (6.8) | ABDHJKLMN | 灰オリーブ色 | C | 底部40% | 末野産。 |
| 44 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (1.2) | (5.6) | ABDHLM | 灰色 | C | 底部40% | 末野産。 |
| 45 | 墳　丘 | 須恵器　坏 | - | (0.7) | (5.8) | ABFHM | にぶい黄橙色 | C | 底部40% | 南比企産。酸化焔焼成。 |
| 46 | 周　堀 | 須恵器　坏 | - | (1.0) | (7.2) | ADEFI | 褐灰色 | B | 底部30% | 南比企産。 |
| 47 | 周　堀 | 須恵器　坏 | - | (0.9) | (6.0) | ABGI | 灰白色 | B | 底部45% | 末野産。 |
| 48 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | (13.8) | 5.25 | 6.9 | ABHLN | 灰色 | B | 50% | 末野産。 |
| 49 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | (15.4) | 6.4 | 7.3 | ABDGHL | 灰色 | A | 45% | 末野産。 |
| 50 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | (14.6) | 5.7 | (8.7) | ABJL | 褐灰色 | A | 20% | 末野産。 |
| 51 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | (14.4) | (4.9) | - | BDGHI | にぶい褐色 | B | 口縁部15% | 末野産？ |
| 52 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | (14.3) | (5.3) | - | ABDHILM | 黄灰色 | B | 口縁部15% | 末野産。 |
| 53 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (2.8) | 7.8 | ABHL | 黄灰色 | B | 高台部45% | 末野産。 |
| 54 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (3.2) | 7.2 | ABEGLHM | 黒色 | B | 高台部40% | 末野産。 |
| 55 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (4.2) | (8.2) | ABHLN | 灰色 | A | 高台部25% | 末野産。 |
| 56 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (1.7) | (7.0) | ABIL | 灰色 | A | 高台部30% | 末野産。 |
| 57 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | - | (2.9) | (8.6) | ABHILM | 灰色 | C | 高台部45% | 末野産。 |
| 58 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | - | (1.9) | 5.8 | ABHJLM | 灰オリーブ色 | B | 高台部80% | 末野産。 |
| 59 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.8) | (7.2) | ABCHL | 灰色 | B | 高台部20% | 末野産。 |

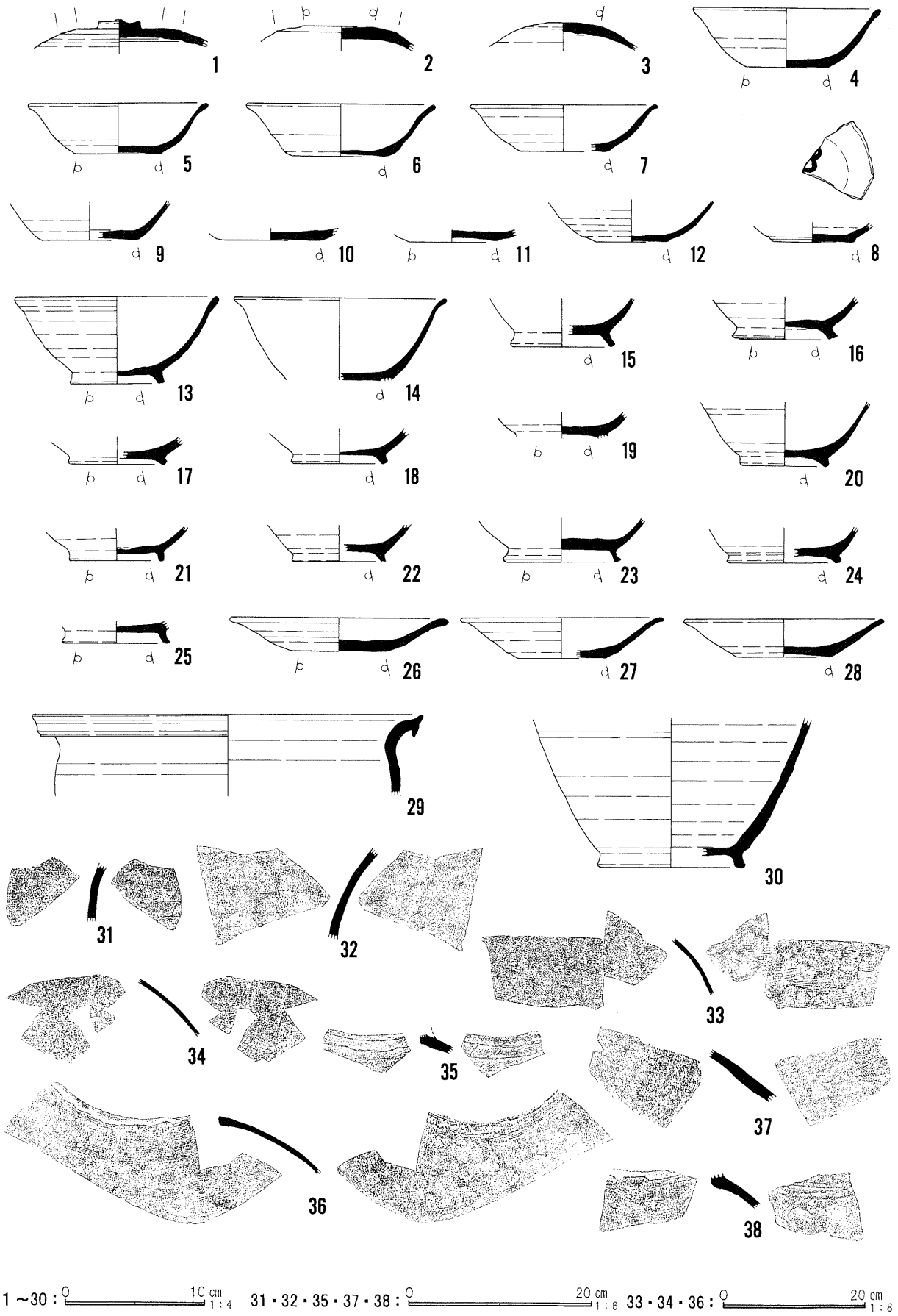
| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 60 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.6) | 7.8 | ABDGHLM | 灰色 | B | 高台部30% | 末野産。 |
| 61 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | - | (2.6) | 8.2 | ABDHL | 黄灰色 | C | 高台部80% | 末野産。 |
| 62 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.6) | (8.2) | ABEGHIJLM | 灰色 | B | 高台部20% | 末野産。 |
| 63 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (3.5) | (8.2) | ABL | 灰色 | A | 高台部50% | 末野産。 |
| 64 | 前庭部 | 須恵器　皿 | - | (1.3) | 7.4 | ABGHKL | 灰黄色 | B | 底部30% | 末野産。 |
| 65 | 周　堀 | 須恵器　皿 | - | (1.5) | 7.3 | ABGHLM | 黄灰色 | B | 底部40% | 末野産。 |
| 66 | 周　堀 | 須恵器高台皿 | (13.4) | 2.8 | 6.6 | ABGL | 褐灰色 | A | 40% | 末野産。 |
| 67 | 墳　丘 | 須恵器　瓶類 | - | (5.6) | 10.3 | ABGHKL | 黄灰色 | B | 底部60% | 末野産。 |
| 68 | 墳丘・前庭部 | 須恵器　壺 | (18.4) | (16.7) | - | ABGHIL | 灰色 | B | 口～胴20% | 末野産。 |
| 69 | 周　堀 | 須恵器　壺 | - | (5.5) | (11.0) | ABHL | 灰色 | B | 底部10% | 末野産。 |
| 70 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | (28.3) | - | AL | 灰色 | A | 頸～胴40% | 末野産。 |
| 71 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | (6.3) | (13.4) | ABGHIJLM | 黄灰色 | C | 底部10% | 末野産。底部手持ちヘラ削り。 |
| 72 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 灰色 | A | 口縁部片 | 南比企産。歪み有。№74と同一個体。 |
| 73 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABGLN | 灰オリーブ色 | A | 口縁部片 | 末野産。内外面自然釉付着。 |
| 74 | 石　室 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 灰色 | A | 頸部片 | 南比企産。№72と同一個体。 |
| 75 | 石　室 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDGHL | 褐灰色 | B | 頸部片 | 末野産。 |
| 76 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | AFH | 暗灰色 | A | 頸部片 | 南比企産。№77と同一個体。 |
| 77 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABF | 暗灰色 | A | 頸部片 | 南比企産。№76と同一個体。 |
| 78 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 灰色 | A | 頸部片 | 南比企産。内外面自然釉付着。 |
| 79 | 墳丘・前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 暗灰色 | A | 肩部片 | 南比企産。外面自然釉付着。 |
| 80 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABGHL | 灰色 | A | 肩部片 | 末野産。 |
| 81 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFH | 灰色 | A | 肩部片 | 南比企産。外面自然釉付着。 |
| 82 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHL | 黄灰色 | B | 肩部片 | 末野産。 |
| 83 | 石室・前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHL | 黄灰色 | B | 胴下部片 | 末野産。 |
| 84 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | AB | 灰色 | B | 胴下部片 | 末野産。内面自然釉付着。 |
| 85 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHL | 灰色 | A | 胴下部片 | 末野産。 |
| 86 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDFN | 灰色 | A | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 87 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHILN | 灰色 | A | 胴下部片 | 末野産。 |
| 88 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 灰色 | B | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 89 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 灰色 | B | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 90 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFN | 灰色 | B | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 91 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDEGHIJK | 黄灰色 | B | 胴下部片 | 末野産。 |
| 92 | 前庭部 | 土師器　坏 | (13.0) | (3.0) | - | BCNM | 橙色 | B | 口縁部20% | 内面放射状暗文有。 |
| 93 | 前庭部 | 土師器　坏 | (13.6) | (3.0) | - | BGHIK | にぶい赤褐色 | B | 口縁部15% | |
| 94 | 墳　丘 | 土師器　坏 | (11.2) | (3.2) | (7.2) | ABHIJKM | 明赤褐色 | B | 20% | |
| 95 | 墳　丘 | 土師器　坏 | (10.9) | (3.3) | (6.4) | BEGN | にぶい橙色 | B | 15% | |
| 96 | 墳　丘 | 土師器　甕 | (12.5) | (4.5) | - | ABHIJKMN | 明赤褐色 | A | 口～胴25% | 台付？ |
| 97 | 周　堀 | 土師器　甕 | - | (2.4) | (3.7) | ABIJKM | 内:橙 外:灰褐 | B | 底部40% | |
| 98 | 前庭部 | 土師器台付甕 | - | (11.4) | 10.2 | ABCGHKM | 明赤褐色 | B | 胴～台40% | |
| 99 | 周　堀 | 土師器台付甕 | - | (4.9) | 10.9 | BDGHIKMN | 明赤褐色 | B | 台部80% | |
| 100 | 周　堀 | 土師器台付甕 | - | (2.9) | - | ABCHIJKM | 明赤褐色 | B | 接合部100% | |
| 101 | 前庭部 | 土師器台付甕 | - | (2.1) | - | ABCGHIJKM | 褐灰色 | B | 接合部100% | |
| 102 | 前庭部 | 土師器台付甕 | - | (1.9) | - | ABEGHIJKM | にぶい橙色 | A | 接合部100% | |
| 103 | 周　堀 | 土師器台付甕 | - | (1.6) | - | ACGHIJKM | 明赤褐色 | A | 接合部100% | |
| 104 | 周　堀 | 刀　子 | 最大長12.3cm、最大幅1.4cm、最大厚0.55cm。重量18.0ｇ。完形。 | | | | | | | |
| 105 | 墳　丘 | 鉄　斧 | 最大長10.45cm、最大幅4.4cm、最大厚2.2cm。重量(220)ｇ。芯部完存、外側大半欠。 | | | | | | | |
| 106 | 周　堀 | 鉄　釘 | 最大長5.9cm、最大幅1.1cm、最大厚0.7cm。重量7.5ｇ。完形。 | | | | | | | |
| 107 | 周　堀 | 鉄　釘 | 最大長6.6cm、最大幅1.15cm、最大厚1.2cm。重量(7.0)ｇ。一部欠。 | | | | | | | |
| 108 | 墳　丘 | 板　碑？ | 最大長(24.0)cm、最大幅(14.5)cm、最大厚4.7cm。重量(2,070)ｇ。緑泥片岩。大半欠。 | | | | | | | |

### 第３号墳出土遺物（第33・34図）

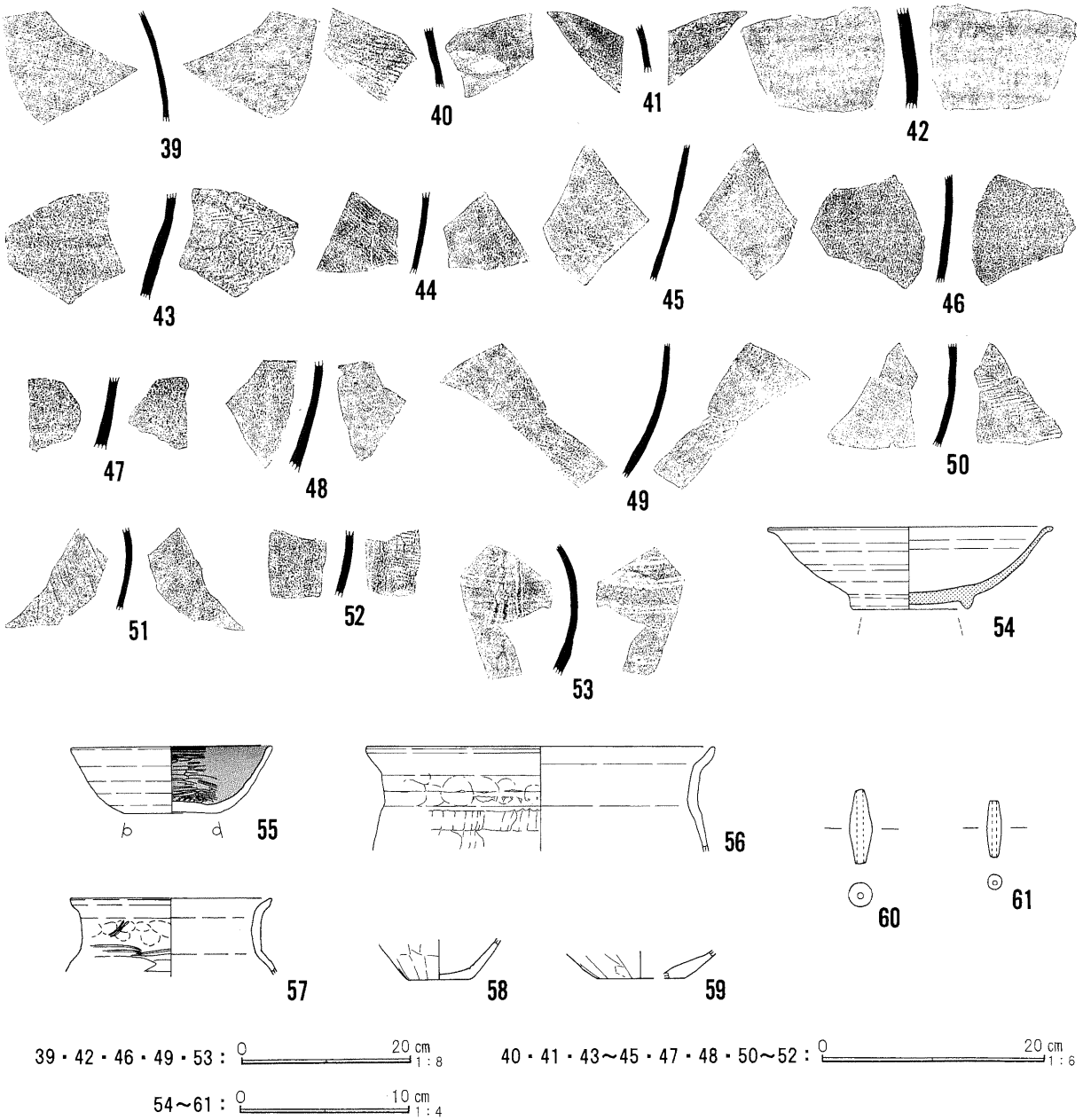
本墳からは平安時代の遺物のみ検出された。これらは周辺にある住居跡からの流れ込みと思われる。

### 平安時代（第33・34図１～61）

須恵器（１～53）は蓋、坏、高台付椀、皿、鉢、瓶類、甕がある。末野産と南比企産があるが、前者が多い。54は灰釉陶器高台付皿。東濃産。無釉である。土師器（55～59）は坏、甕がある。甕の57は小型であり、台付の可能性がある。、土錘は２点検出された。60が中型、61が小型のものである。




第33図　第３号墳出土遺物(1)　平安時代




第34図　第３号墳出土遺物(2)　平安時代

第13表　第３号墳出土遺物（平安時代）観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 須恵器　蓋 | - | (2.0) | - | ABHL | 灰色 | B | 75% | 末野産。 |
| 2 | 周　堀 | 須恵器　蓋 | - | (1.7) | 5.1 | ABGHIL | 灰色 | B | 天井部30% | 末野産。 |
| 3 | 周　堀 | 須恵器　蓋 | - | (2.0) | (5.5) | ABGL | 灰色 | B | 天井部40% | 末野産。 |
| 4 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (13.5) | 4.2 | 6.0 | ABEGHIMN | にぶい黄褐色 | C | 60% | 末野産？酸化焰焼成。 |
| 5 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (12.9) | 3.6 | 6.0 | AGHIL | 灰色 | B | 70% | 末野産。 |
| 6 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (13.7) | 4.8 | (6.2) | ABEGH | にぶい褐色 | B | 40% | 末野産？酸化焰焼成。 |
| 7 | 周　堀 | 須恵器　坏 | (13.6) | 3.3 | (6.6) | ABDHJL | 灰色 | B | 20% | 末野産。 |
| 8 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (1.5) | (6.2) | ABGHIL | 灰色 | B | 底部30% | 末野産。底部内面墨書有。 |
| 9 | 前庭部 | 須恵器　坏 | - | (2.8) | (6.9) | ABCHL | 灰色 | B | 底部30% | 末野産。 |
| 10 | 墳　丘 | 須恵器　坏 | - | (0.9) | (7.2) | ABDGHIL | 灰白色 | B | 底部25% | 末野産。 |
| 11 | 墳　丘 | 須恵器　坏 | - | (0.9) | 6.4 | ABDHIL | 灰オリーブ色 | B | 底部100% | 末野産。 |
| 12 | 周　堀 | 須恵器　坏 | - | (3.0) | (5.2) | ABHL | 灰色 | B | 底部25% | 末野産。 |
| 13 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | (14.7) | 6.2 | 6.9 | ABGHIL | 灰色 | B | 40% | 末野産。 |

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | (15.4) | (5.9) | - | ABEHIML | 明赤褐色 | B | 40% | 末野産。酸化焔焼成。 |
| 15 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (3.5) | (7.6) | ABEHIM | 褐灰色 | C | 高台部20% | 末野産。 |
| 16 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (3.1) | 7.6 | ABHIL | 灰色 | B | 高台部90% | 末野産。 |
| 17 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (2.0) | (7.1) | ADGHIKL | にぶい褐色 | C | 高台部60% | 末野産。酸化焔焼成。 |
| 18 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (2.5) | (6.9) | ABHILM | 灰黄色 | C | 高台部25% | 末野産。 |
| 19 | 前庭部 | 須恵器高台椀 | - | (1.9) | - | ABHIL | 灰色 | B | 高台部60% | 末野産。 |
| 20 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (4.7) | (6.4) | ABCDHIM | 浅黄色 | C | 高台部30% | 末野産？ |
| 21 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.5) | 6.8 | ABCDHKLM | 灰黄色 | C | 高台部100% | 末野産。 |
| 22 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.7) | (6.8) | ABHEL | 灰色 | A | 高台部30% | 末野産。 |
| 23 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (3.15) | 8.5 | ABDHIM | 明赤褐色 | B | 高台部30% | 末野産？酸化焔焼成。 |
| 24 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (2.6) | (8.2) | ABHIJKLM | 灰色 | C | 高台部30% | 末野産？酸化焔焼成。 |
| 25 | 周　堀 | 須恵器高台椀 | - | (1.6) | 7.8 | ABGHIL | 灰色 | B | 高台部45% | 末野産。 |
| 26 | 前庭部 | 須恵器　皿 | (15.6) | 2.4 | 6.8 | ABCGHIL | 灰色 | B | 70% | 末野産。 |
| 27 | 周　堀 | 須恵器　皿 | (14.6) | 2.9 | (6.4) | ABEGHIJK | にぶい黄橙色 | C | 25% | 末野産？酸化焔焼成。 |
| 28 | 周　堀 | 須恵器　皿 | (14.4) | 2.7 | (6.6) | ADGHIJL | にぶい黄褐色 | C | 45% | 末野産。 |
| 29 | 前庭部 | 須恵器　鉢 | (28.2) | (5.8) | - | ABHIL | 灰白色 | C | 口縁部10% | 末野産。 |
| 30 | 前庭部 | 須恵器　瓶類 | - | (10.7) | (10.7) | ABHIL | 灰黄色 | B | 胴～底40% | 末野産。 |
| 31 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABL | 灰色 | A | 頸部片 | 末野産。 |
| 32 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHIL | 灰黄褐色 | B | 頸部片 | 末野産。 |
| 33 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABEHL | 灰色 | A | 肩部片 | 末野産。 |
| 34 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDFN | 灰色 | A | 肩部片 | 南比企産。 |
| 35 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDHIL | 灰色 | B | 肩部片 | 末野産。No.36・38と同一個体。 |
| 36 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABCIL | 灰色 | A | 肩部片 | 末野産。No.35・38と同一個体。 |
| 37 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABML | 灰色 | B | 肩部片 | 末野産。 |
| 38 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHIL | 灰色 | B | 肩部片 | 末野産。No.35・36と同一個体。 |
| 39 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHL | 青灰色 | A | 胴上部片 | 末野産。 |
| 40 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFH | 黄灰色 | B | 胴上部片 | 南比企産。 |
| 41 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABF | 灰色 | B | 胴上部片 | 南比企産。 |
| 42 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABEFIN | 灰色 | A | 胴上部片 | 南比企産。 |
| 43 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABGHKL | 灰色 | A | 胴下部片 | 末野産。 |
| 44 | 前庭部 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABDHIL | 灰色 | A | 胴下部片 | 末野産。 |
| 45 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFGH | 灰黄色 | C | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 46 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABEHIL | 灰色 | B | 胴下部片 | 末野産。 |
| 47 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABCGL | 灰色 | C | 胴下部片 | 末野産。 |
| 48 | 墳　丘 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABCGHIJ | 内:褐 外:灰 | B | 胴下部片 | 末野産？ |
| 49 | 墳丘・周堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABHIL | 黄灰色 | B | 胴下部片 | 末野産。 |
| 50 | 墳丘・周堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFHN | 灰色 | A | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 51 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABFHI | 黄灰色 | B | 胴下部片 | 南比企産。外面自然釉付着。 |
| 52 | 周　堀 | 須恵器　甕 | - | - | - | ABEFGI | 灰色 | B | 胴下部片 | 南比企産。 |
| 53 | 前庭部 | 須恵器　瓶類 | - | - | - | ABL | 灰色 | A | 胴部片 | 末野産。内外面釉付着。 |
| 54 | 前庭部 | 灰釉　高台皿 | (17.0) | 4.85 | 7.2 | ABN | 灰白色 | B | 40% | 東濃産？無釉。 |
| 55 | 墳　丘 | 土師器　坏 | (12.1) | 3.95 | 5.6 | ABCGHIM | 内:黒 外:赤褐 | B | 35% | 内面ミガキ、黒色処理。 |
| 56 | 前庭部 | 土師器　甕 | (20.9) | (6.2) | - | ABCGHIJKM | 明赤褐色 | B | 口～胴20% | |
| 57 | 周　堀 | 土師器　甕 | (12.0) | (4.5) | - | ABEGHIKN | にぶい赤褐色 | B | 口～胴10% | 台付？ |
| 58 | 前庭部 | 土師器　甕 | - | (2.4) | (3.8) | BEGIJK | 明赤褐色 | B | 底部25% | |
| 59 | 前庭部 | 土師器　甕 | - | (1.7) | (5.2) | ABCGHIJKN | 橙色 | B | 底部25% | |
| 60 | 周　堀 | 土　錘 | 最大長4.4cm、最大径1.3cm、孔径0.4cm。重量6.8g。完形。 | | | | | | | |
| 61 | 周　堀 | 土　錘 | 最大長3.3cm、最大径0.85cm、孔径0.3cm。重量2.1g。完形。 | | | | | | | |

### 第４号墳出土遺物（第35図）

本墳からは縄文時代、平安時代、中世の遺物が検出された。遺物は土器のみである。

### 縄文時代（第35図１～３）

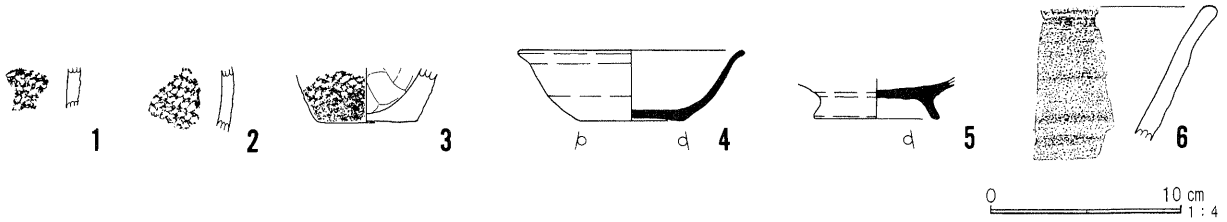
縄文時代前期の深鉢。接合関係はないが、すべて同一個体である。胎土に繊維を含まない。周堀出土。

### 平安時代（第35図４・５）

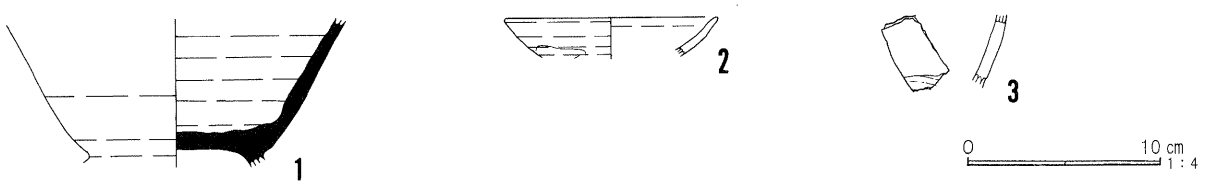
ともに須恵器である。４は坏、５は高台付椀。末野産。墳丘から出土した。

### 中　世（第35図６）

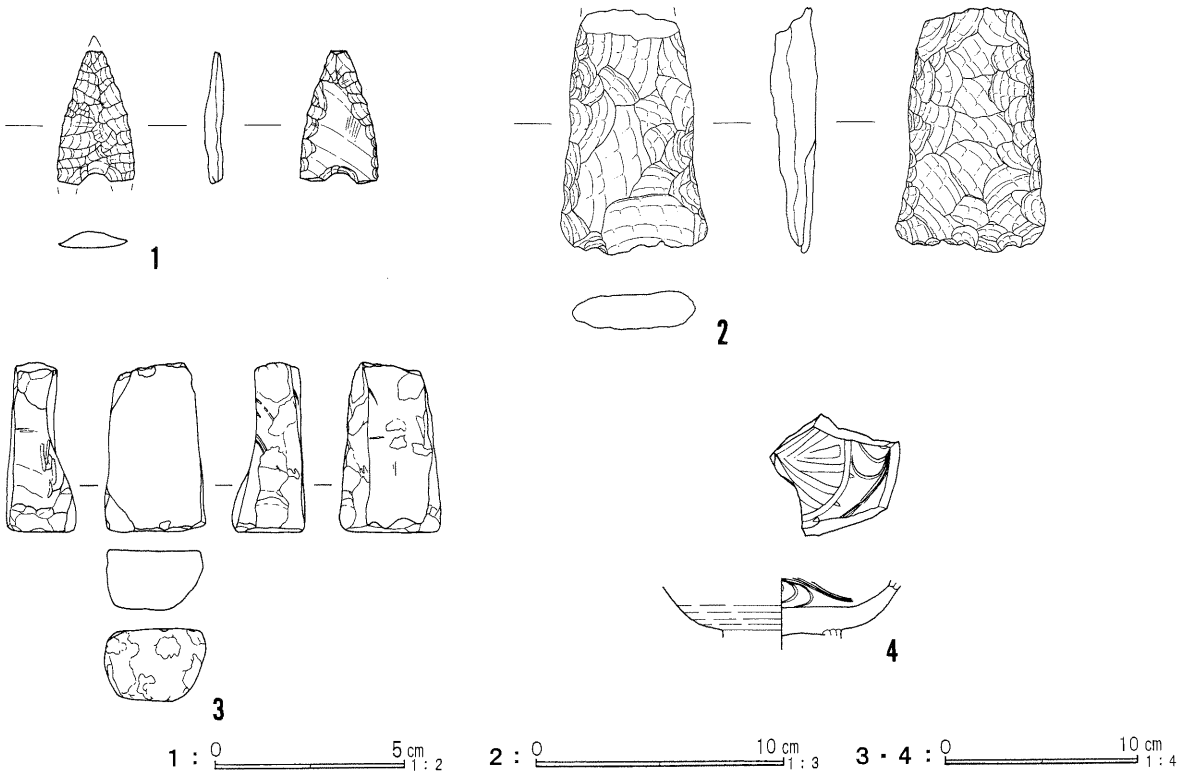
鉢の口縁部片。常滑産である。釉はない。墳丘から出土した。



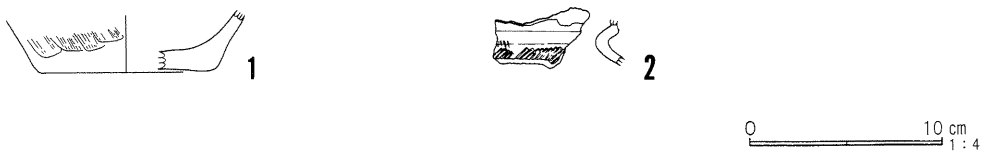

第35図　第４号墳出土遺物　縄文・平安時代・中世




第36図　第７号墳出土遺物　平安時代・近世




第37図　第８号墳出土遺物　縄文・平安時代・中世




第38図　第９号墳出土遺物　古墳時代前期

第14表　第４号墳出土遺物（縄文・平安時代・中世）観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABEJKM | 橙色 | B | 胴部片 | 縄文前期。№２・３と同一個体。 |
| 2 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | - | - | ABIJKMN | 明赤褐色 | B | 胴部片 | 縄文前期。№１・３と同一個体。 |
| 3 | 周　堀 | 縄文土器深鉢 | - | (2.8) | (5.4) | ABDGHIJKMN | 橙色 | B | 底部45% | 縄文前期。№１・２と同一個体。 |
| 4 | 墳　丘 | 須恵器　坏 | (12.0) | 3.7 | 5.6 | ABGHIL | 灰色 | B | 45% | 末野産。 |
| 5 | 墳　丘 | 須恵器高台椀 | - | (2.1) | (6.7) | ABIJL | 灰色 | B | 高台部40% | 末野産。 |
| 6 | 墳　丘 | 陶器　鉢 | - | - | - | - | 灰白色 | A | 口縁部片 | 常滑産。 |

第15表　第７号墳出土遺物（平安時代・近世）観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 前庭部 | 須恵器　瓶類 | - | (7.8) | - | ABC | 灰白色 | A | 胴下部60% | 末野産。 |
| 2 | 周　堀 | 陶器　緑釉皿 | (11.8) | (2.1) | - | - | 灰オリーブ色 | A | 口縁部20% | 瀬戸美濃産。内外面灰釉。 |
| 3 | 前庭部 | 陶器天目茶碗 | - | - | - | - | 黒色 | B | 体部片 | 瀬戸美濃産。内外面鉄釉。 |

第16表　第８号墳出土遺物（縄文・平安時代・中世）観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 石　室 | 石　鏃 | 最大長(3.5)cm、最大幅2.05cm、最大厚0.4cm。重量(2.7)ｇ。チャート。切先、基部欠。 | | | | | | | |
| 18 | 石　室 | 打製石斧 | 最大長(9.65)cm、最大幅5.8cm、最大厚1.8cm。重量(110)ｇ。中粒砂岩。上部欠。 | | | | | | | |
| 19 | 前庭部 | 砥　石 | 最大長9.0cm、最大幅5.3cm、最大厚3.9cm。重量210ｇ。凝灰岩。ほぼ完形。五面使用。 | | | | | | | |
| 20 | 墳　丘 | 青磁　椀 | - | (2.9) | - | - | オリーブ灰色 | A | 底部15% | 龍泉窯系。 |

第17表　第９号墳出土遺物（古墳時代前期）観察表

| 番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色　調 | 焼成 | 残存率 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 周　堀 | 土師器　壺 | - | (3.2) | (9.5) | BEJK | にぶい黄橙色 | B | 底部30% | |
| 2 | 周　堀 | 土師器　甕 | - | - | - | BHIJK | 淡黄色 | B | 口縁部片 | Ｓ字甕。 |

### 第７号墳出土遺物（第36図）

本墳からは平安時代、近世の遺物が検出された。近世の遺物は周辺の土坑からの流れ込みと思われる。

#### 平安時代（第36図１）

須恵器瓶類の胴下半部である。高台部を欠く。前庭部から出土した。

#### 近　世（第36図２・３）

陶器。瀬戸美濃産。２は緑釉皿。周溝から出土した。３は天目茶碗。前庭部から出土した。

### 第８号墳出土遺物（第37図）

本墳からは縄文時代、平安時代、中世の遺物が検出された。

#### 縄文時代（第37図１・２）

１は石鏃、２は打製石斧である。１は切先と基部、２は上部を欠く。これらの石器も１号墳出土の石器と同じく縄文時代前・中期いずれかの時期のものと思われる。ともに石室覆土から検出された。

#### 平安時代（第37図３）

砥石。ほぼ完形品。五面使用している。凝灰岩製。前庭部から出土した。

#### 中　世（第37図４）

青磁椀の底部片。内外面に釉が施され、内面には文様が描かれている。龍泉窯系。墳丘から出土した。

### 第９号墳出土遺物（第38図）

本墳からは古墳時代前期の土師器が検出された。ともに破片での検出である。

#### 古墳時代前期（第38図１・２）

１は壺の底部片、２はＳ字甕の口縁部片である。ともに周堀から出土した。

# V　調査のまとめ

ここでは出土遺物や主体部について第Ⅳ章では説明し切れなかったことについて補足し、帰属時期の裏づけを行った上で改めて各古墳（既に報告済みである10号墳も含めて）の築造時期について述べてみたい。出土遺物や主体部の帰属時期については、既に各研究者によって編年が提示されていることから、これらを参考にしてみていくことにする。また、１号墳はその平面形態から八角形を呈する八角墳と判断したが、ここでその根拠を提示し、どのような特徴を有するのかについて述べるとともに、１号墳と同じくこれまで八角墳とされてきた２・10号墳についても新たな見解を述べておく。そして最後に古墳群の被葬者像についても近年明らかになってきた周辺遺跡との関係を交えて述べてみたい。

**出土遺物について**

伴う遺物が検出された古墳は、１・３・５・７・８号墳の５基である。検出数は少ないが、各古墳から出土した遺物のうち、指標となるものを取り上げてみていくこととする。

１号墳出土遺物で指標となるのは、刀装具の双脚足金具（第９図４）である。双脚足金具とは、大刀を横向きに佩用するため鞘に二個一対で装着される刀装具のことであり、県内では東松山市西原古墳群１号墳や毛呂山町西戸古墳群９号墳に出土例（第39図）がある。以下、まず各古墳群及び古墳と出土した双脚足金具について説明し、二例と比較した上で籠原裏１号墳出土例の時期決定を行いたい。

東松山市西原古墳群は、都幾川左岸の標高約60mを測る菅谷台地東端部に立地しており、現在までに４基の円墳が確認されている(金井塚他1976)。双脚足金具の出土した１号墳は、径８～13mの葺石を有する不整円墳である。主体部は河原石と緑泥片岩を使用した胴張り型の横穴式石室であり、石室からは方頭大刀や銅椀、鉄鏃、刀子などが出土している。

西原１号墳出土の双脚足金具は、全長103.6cmを測る方頭大刀に装着された状態で検出されており、一ノ足及び二ノ足とも残存する(第39図１)。ともに銅製で、四角錘台状の枠形櫓金に棟側が丸く張り出す腹帯を鋳付けすることで段が造り出されており、腹帯の断面形は幅の狭い環状を呈する。一ノ足は最大高4.8cm、枠形櫓金の最大長2.7cm、最大幅1.3cm、最大高0.6cm、帯執引通孔の最大長１cm、幅0.5cm、腹帯は長径4.5cm、短径2.2cm、幅0.3cm、厚さ0.2cmを測る。二ノ足は最大高4.5cm、枠形櫓金の最大長2.8cm、最大幅1.4cm、最大高0.6cm、帯執引通孔の最大長1.2cm、幅0.7cm、腹帯は長径4.1cm、短径2.2cm、幅0.3cm、厚さ0.2cmを測り、一ノ足、二ノ足ともにほぼ同じ大きさである。

毛呂山町西戸古墳群は、越辺川左岸の標高約48mを測る河岸段丘上に立地しており、円墳を主体として現在までに14基の古墳が確認されている（毛呂山町教委1987・1998)。双脚足金具の出土した西戸９号墳は既に消滅しており、墳形及び規模など詳細については不明であるが、土地所有者が開墾時に石室らしき遺構から出土した遺物を採集していた。遺物には刀装具、鉄鏃、刀子などがあり、これらの遺物については、大谷徹氏によって資料紹介がなされている（大谷1989)。

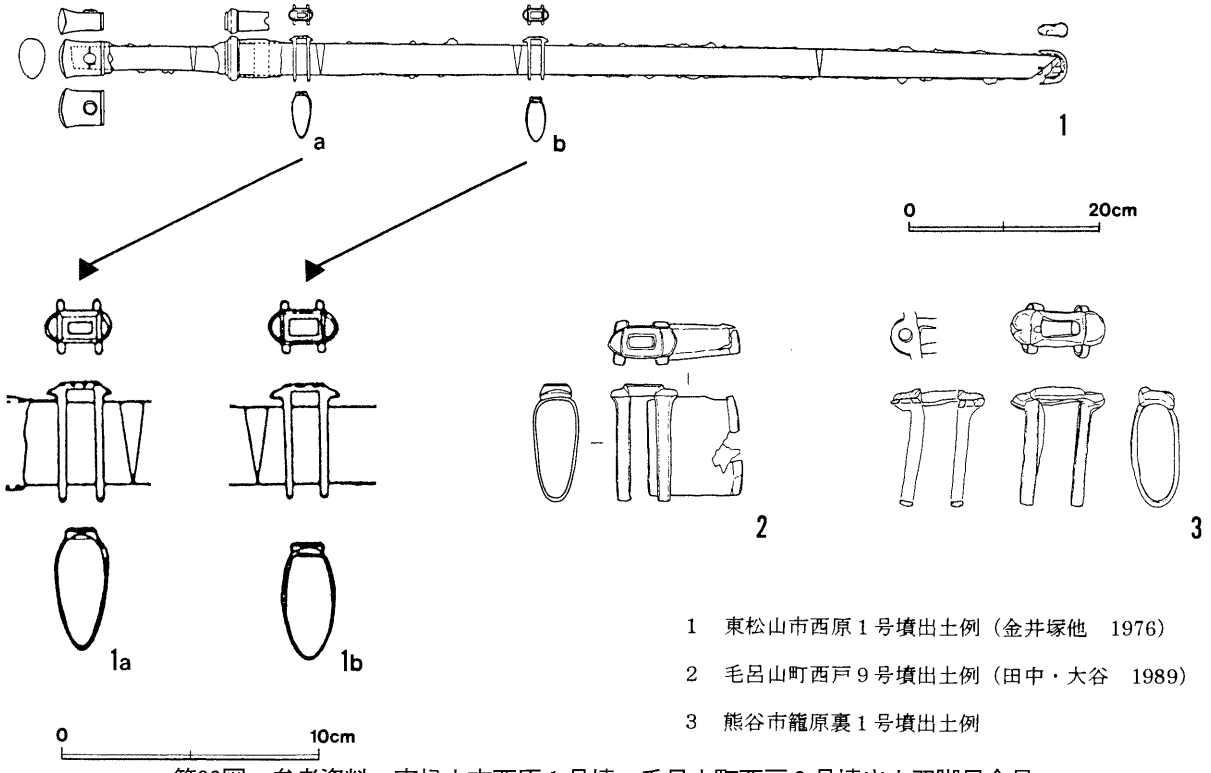
西戸９号墳出土の双脚足金具は、鞘口金具と接合した状態であり、一ノ足のみの検出である。銅製で、枠形櫓金に段を持ち、双脚より張り出した櫓金に棟側の幅を広げた腹帯が鋳付けされている。腹帯の断面形は幅広の板状を呈する。最大高4.5cm、枠形櫓金の最大長2.7cm、最大幅1.2cm、最大高0.5cm、帯執引通孔の最大長1.0cm、幅0.4cm、腹帯は長径4.1cm、短径1.8cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmを測る。

双脚足金具については、穴沢咏光・馬目順一氏らによる研究がある（穴沢・馬目1979）。両氏によって設定された編年によると、双脚足金具は枠形櫓金に段を持ち、櫓金が双脚より張り出す形態から枠形櫓金が張り出さず、四角錘台状を呈するものへと変化するとされている。そして、両氏は設定した編年に基づいて西原１号墳例を７世紀第３四半期に位置づけている。西戸９号墳例については、大谷氏によって西原１号墳例と比較され、穴沢・馬目両氏の編年に基づいて同じく７世紀第３四半期に位置づけられており、出土した鉄鏃とも年代的に矛盾しないことが付け加えられている（大谷1989）。

ここで籠原裏１号墳出土例をみてみる。本例は一ノ足か二ノ足かは不明であるが、１点のみの検出である。枠形櫓金に段を持ち、櫓金が双脚より張り出す形態であることから、上記二例と同じである。しかし、腹帯の棟側が丸く張り出す造りになっている点では西原１号墳例に、腹帯がやや幅広の板状を呈する点では西戸９号墳例にそれぞれ類似しており、籠原裏１号墳例は両者をあわせた様相を呈している。また、高さはほとんど変わりないが、枠形櫓金の長さは3.7cmと二例に比べて１cmも大きく、またそれに伴って双脚間の幅も若干広くなっており、やや異なった特徴を有している。

以上の点からみると、枠形櫓金の長さに違いがあるが、形態的には二例の持つ要素をあわせ持っており、籠原裏１号墳例も７世紀第３四半期に位置づけて良いと考えられる。１号墳では墳丘から須恵器平瓶の口縁部片が検出されているが、口縁端部の造りからみてTK46型式並行以降と思われ、双脚足金具とも時期的に矛盾しない。よって、１号墳出土遺物は７世紀第３四半期頃のものと考えられる。

３号墳出土遺物には、鉄鏃（第15図１）と土師器坏（２）があるが、鉄鏃は箆被部のみの検出であり、有茎鏃であること以外は不明である。前庭部から検出された土師器坏は在地産暗文坏であり、「北島型坏」と呼ばれるものである（田中1991ｂ）。口径は推定で13cmを測り、口縁端部が僅かに外反する。体部は緩やかに内湾し、内面には放射状暗文が施されている。底部は欠いているがやや平底に近い形になると思




1　東松山市西原１号墳出土例（金井塚他　1976）

2　毛呂山町西戸９号墳出土例（田中・大谷　1989）

3　熊谷市籠原裏１号墳出土例

第39図　参考資料　東松山市西原１号墳・毛呂山町西戸９号墳出土双脚足金具

われる。在地暗文土器について詳細な分析を行った田中広明氏の分類（田中1991ｂ）ではII～III期に該当することから７世紀末～８世紀初頭のものと思われる。

５号墳出土遺物は、周堀出土の土師器甕（第18図１）１点のみである。底部付近のみの検出であるため時期決定に苦しむ。胴部が膨らみ、底部が円柱状を呈する点からみると、やや古い様相を呈するように思われるが、具体的な時期については明確にできない。

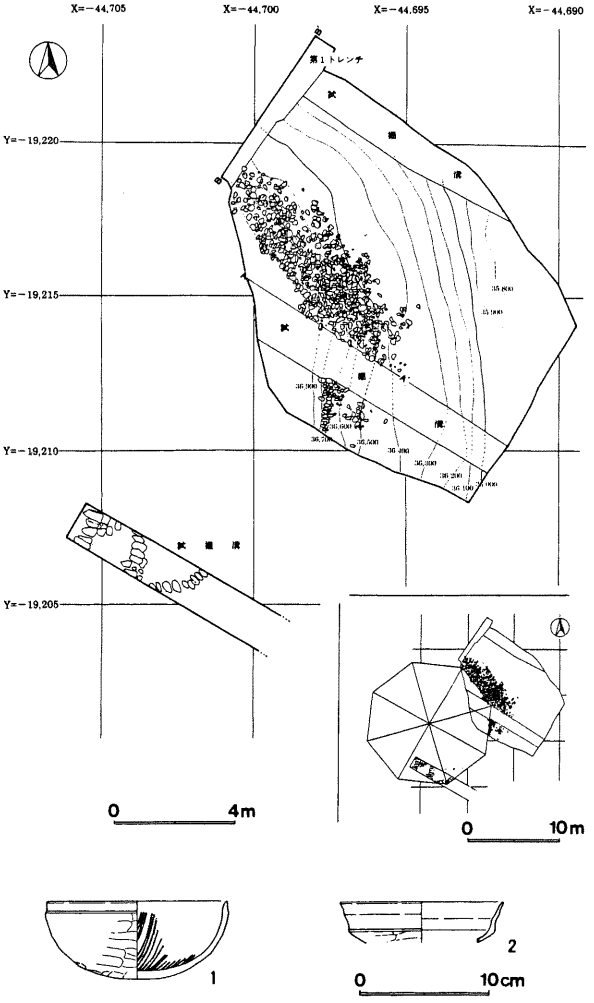
７号墳出土遺物には、周堀出土の須恵器蓋（第20図１）と前庭部出土の壺の肩部片（２）がある。蓋は宝珠つまみを持ち、内面にかえりを持つ。２は破片での検出であるが、長頸壺の肩部片と思われる。産地は不明であるが、ともに７世紀末～８世紀初頭に位置づけられる。

８号墳出土遺物では、鉄鏃（第25図１～10）と土師器坏（16）がある。鉄鏃は玄室西側床面から検出された。原位置を保っていないもののまとまって検出されたことから一括性があると思われる。完形品はほとんどないがすべて有茎鏃であり、鏃身部と頸部の境に関が無く、関篦被ないし棘篦被を持つ。

県内の古墳出土の鉄鏃については、田中正夫・瀧瀬芳之氏らによって設定された時期区分があり、Ｉ期～Ｖ期に分けられている（田中・瀧瀬他1984）。その時期区分に沿ってみてみると、８号墳出土鉄鏃は残存する鏃身部によるセット関係からＶ期（７世紀中頃から後半）に該当すると思われる。３はその形態から柳葉式としたが、他の鉄鏃との一括性を重視するならば長三角形式の範疇で捉えた方がいいかもしれない。周堀から検出された土師器坏は、口径10.4cm、器高3.4cmを測る完形品で、口縁部が僅かに内傾し、丸底を呈する北武蔵型坏である。荒川左岸の中流域における７世紀後半の土器群について考察した坂野和信氏の分類（坂野1998）によると、16はＤ期（７世紀末～８世紀初頭）に該当する。

８号墳出土遺物は若干時期差が見うけられるが、両者が共伴する可能性もあることから、両者を含めて７世紀後半～８世紀初頭と幅を持たせておく。

既に報告済みの10号墳では、墳丘上から土師器の在地産暗文椀（第40図１）と有段口縁坏（２）が検出されている（籠原裏遺跡調査会2000）。１は口縁部が内湾し、端部は僅かに外反する。丸底であり、内面には放射状暗文が施されている。２は底部を欠くがその器形からやや深身になると思われる。口縁部は外反しながら立ち上がり、段は一段のみ有する。１は田中氏の在地産暗文Ｉ～II期（田中1991ｂ）、２は坂野氏のＢ期新段階～Ｃ期（坂野1998）、また有段口縁坏について詳細な分析を行った田中広明氏の分類では第IV期（田中1991ａ）に該当することから、10号墳出土遺物は７世紀後半のものと考えられる。




第40図　参考資料　第10号墳・出土遺物

以上、古墳に伴う遺物は7世紀第3四半期から7世紀末～8世紀初頭までのものが検出されている。

**主体部について**

主体部が明確に検出された古墳は、1・3・4・7・8号墳である。すべて荒川中流域にみられる河原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。破壊などによって検出できなかった2・9号墳もその痕跡からみて同じく河原石を使用した胴張り型の横穴式石室であったと思われる。

荒川中流域左岸に所在する花園町小前田古墳群では、瀧瀬芳之氏によって横穴式石室の分類が示されている(瀧瀬1986)。氏は横穴式石室をその平面形態から無袖式、両袖式、胴張A式、胴張B式の4つに分類している。そして、埴輪の有無から無袖式・両袖式→胴張A式→胴張B式という年代差を想定し、これに出土遺物の時期を加味して小前田古墳群の変遷を提示している。氏は埴輪を持たない古墳で奥壁の幅が狭く、玄室の側壁に顕著な胴張りを有するものを胴張B式としており、出土遺物の時期とあわせて胴張B式の石室を持つ古墳に7世紀前半の年代を与えている。籠原裏古墳群で検出された横穴式石室は、氏の胴張B式に大別されるものの奥壁の幅がさらに狭くなり、玄室の平面形態が馬蹄形状となる点で新しい様相を呈すると思われる。奥壁が狭く、玄室の平面形態が馬蹄形状を呈する石室は、荒川右岸に所在する川本町鹿島古墳群や籠原裏古墳群の南西約2kmに位置する熊谷市三ヶ尻古墳群などに類例がある。鹿島古墳群では8・16・19・25号墳、三ヶ尻古墳群では三ヶ尻林1号墳が該当し、三ヶ尻林1号墳を調査した小久保徹氏は、鹿島古墳群との比較から7世紀後半という年代を与えている(小久保1983)。また、荒川中流域にある古墳群の横穴式石室について考察した塩野博氏は、鹿島古墳群8・19号墳を7世紀後半、16・25号墳及び三ヶ尻林1号墳を8世紀初頭に位置づけている(塩野1991)。

以上のことからみると、籠原裏古墳群で検出された横穴式石室は上限が7世紀後半、下限は8世紀初頭となる。横穴式石室の平面形態だけでは具体的な時期を把握することは困難であるが、玄室の平面形態が馬蹄形状を呈する石室は、7世紀後半から8世紀初頭にかけてのものとする。なお、4号墳は唯一奥壁が緑泥片岩一枚で構築され、胴の張りが他に比べて若干弱いが、この形態は鹿島古墳群においても存在し、終末期まで残ることから他と時期差はないと思われる。

**築造時期について**

上記の出土遺物と主体部の時期を組み合わせると、以下のとおりとなる。

1号墳は双脚足金具が7世紀第3四半期頃のものであり、墳丘出土の須恵器平瓶も双脚足金具とほぼ同時期のものであることから、主体部の時期も加味して7世紀後半頃の築造と考えられる。1号墳からは大刀自体は検出されていないが、双脚足金具を含む刀装具の存在から7世紀中頃以降に盛行する方頭大刀が副葬されていたことが想定され、このことも築造時期の裏づけになると思われる。

3・7号墳は出土土器が7世紀末～8世紀初頭に位置づけられるが、追葬ないし埋葬後の儀礼に伴う可能性も考えられる。そして主体部の時期は7世紀後半以降と思われることから、築造時期は7世紀末～8世紀初頭段階かそれ以前の7世紀後半を遡らない段階の築造としか言えない。

5号墳は出土した土師器甕が底部付近のみであり、また古墳自体がほとんど調査区外にあるため時期の特定は困難である。築造時期は埴輪がないことを重視して7世紀以降とする。

8号墳は出土遺物を7世紀後半～8世紀初頭頃とやや幅をみており、主体部は7世紀後半以降と思われることから、築造時期を7世紀後半～8世紀初頭としておきたい。

10号墳は調査が墳丘北東部のみであり、検出された土器は7世紀後半に位置づけられる。主体部は未調査であるが、試掘調査で前庭部付近のみプランが確認されており、他と同じく河原石による胴張型の横穴式石室である。よって、現時点では築造時期を7世紀後半頃とする。

遺物の出土しなかった2・4・6・9号墳については、埴輪がないことや主体部の構造などから判断せざるをえない。2・9号墳は主体部が胴張型の横穴式石室であったが、玄室の平面形態が馬蹄形状を呈するものか不明であるため7世紀以降の築造としか言えない。また、6号墳は東側にある16号土坑から7世紀末～8世紀初頭頃の須恵器長頸瓶が検出されており、何らかの関係があるとは思われるが詳細は不明であるため、同じく7世紀以降の築造としか言えない。4号墳は伴う遺物はないが、主体部が馬蹄形状を呈する胴張型の横穴式石室であることから7世紀後半以降の築造と思われる。

籠原裏古墳群のうち、時期が判別された古墳は7世紀後半から8世紀初頭までの短い期間に収まる。しかし、出土遺物の僅少さや皆無であること、また出土遺物は追葬ないし埋葬後の儀礼などに伴う可能性もあるため、各古墳の具体的な前後関係を把握することは難しい。ただ7世紀後半頃の築造とした1・10号墳は、古墳群の中でもやや先行するものとみて間違いないと思われる。周辺には7世紀後半以前の古墳が存在する可能性もあるが、現時点では7世紀後半以降のものが多く、追葬及び埋葬後の儀礼などが行われた可能性も含めて古墳群は8世紀初頭まで機能していたと考えられる。

**籠原裏古墳群1・2・10号墳について**

まず1号墳について。1号墳はその平面形態から八角墳と判断したが、ここでその根拠を提示し、八角墳としてどういった特徴を持つかについて述べる。なお、八角墳はその呼称も様々であり、「八角墳」の他に「八角形墳」という用語も多くみられる。ともに同じ古墳を指す用語であるが、紙数の都合もあり、定義については触れられない。本報告では「八角墳」を使用することをお断りしておく。

八角墳に限らず多角形状を呈する古墳であることを示す基準として第一に挙げられるのは、葺石の配列状況である。1号墳では前庭部付近や墳丘東側で検出された葺石（A～D：第5図参照）が直線的な配列状況を示している。葺石は所々を欠くが、一辺約5mで直線的に配置されており、八角形の辺に沿って巡っている。そして残存する葺石に伴って等高線も八角形状を呈しており、墳丘も裾部をみると北東辺がやや膨らんでいるが、他は葺石と同じく一辺約5mの八角形状を呈している。周堀も幅約2.5mでややいびつではあるが八角形状に巡っており、主体部を挟んだ稜角（C・D）の延長線上から掘り込まれている。また周堀北辺と南西辺の稜角（E・H）の延長線上には張り出し部が設けられており、ちょうど稜角の位置にあるのはなんらかの意味を持つものと想定される。

以上のことをまとめると下記のとおりとなる。

① 残存する葺石は約5m単位で直線的な配列になっており、八角形の辺に沿って巡っている。

② 等高線も葺石の残存箇所では直線的であり、八角形状を呈する。

③ 墳丘裾部のラインが八角形状を呈する。

④ 周堀は主体部を挟んだ稜角の延長線上から掘り込まれており、八角形状に巡る。また、北辺と南西辺の稜角の延長線上には張り出し部が設けられている。

1号墳は全国各地の八角墳とされる古墳と違い、いわゆる「外護列石」が存在しない点、また稜角に大きい石を配置しない点などから八角墳とするにはやや不安な面もあるが、平面形態を主とした上記4

点を根拠に八角墳とみなすこととして、次に１号墳の八角墳としての特徴について述べる。

地方の八角墳は近年における検出例の増加に伴い、正八角形を呈する畿内の八角墳とは様相が異なることが指摘されている。脇坂光彦氏は地方の八角墳の特徴として、正八角形を呈するものがないことや墳丘が小規模であることなどを挙げている(脇坂1992)。また、小林利晴氏は東京都多摩市稲荷塚古墳の調査結果から畿内と地方の八角墳について比較検討し、地方の八角墳は施工誤差により正八角形にはならないこと、畿内の八角墳は墳丘が強固な版築技法による築造であるのに対して地方の八角墳は版築技法を用いないことを述べている(小林1996)。地方の八角墳でも群馬県吉岡町三津屋古墳は、唯一正八角形を呈するものであり、その整然とした状況から多くの場合例外として扱われているが、三津屋古墳も含めるならば両氏の指摘は必ずしも的確であるとはいえない。ただ三津屋古墳以外の八角墳においては通有の特徴であることは確かであり、１号墳にも当てはまる事項といえる。

１号墳は石室開口部を南辺中央に据えた八角形を呈する。残存する葺石から内角をみるとＡは138°、Ｂは134°、Ｃは145°、Ｄは138°を示す。また参考に葺石の崩落した墳丘裾部ではＥが140°、Ｆは136°、Ｇは134°、Ｈは142°を示す。通常正八角形ならば内角は135°となるが、１号墳では135°前後を示すものの均一ではないことから正八角形にはならない。そして、墳丘は本古墳群では大きい部類に入るが大規模とは言えず、築造方法も版築による築造ではなく周辺にある円墳と変わらない。また梅澤重昭氏は、三津屋古墳及び稲荷塚古墳を例に八角墳は墳丘に八角形プランを採用しながらも石室構造は地域の伝統を踏まえている（梅澤1997）とするが、このことも１号墳に該当する事項といえる。

東日本の八角墳とされる古墳については、尺度（唐尺：30.3cm、高麗尺：35.6cm）や対比率を用いた築造企画が想定されている。三津屋古墳は周堀、墳丘第一段、第二段の八角形の一辺が唐尺で40、30、20となり、八角形一辺を基にした築造企画であった可能性が指摘されている(瀧野1997)。また、稲荷塚古墳では高麗尺で石室全長が20尺、墳丘２段目対角間が60尺、周堀対角間が100尺を測ることから１：３：５の比率で築造されたことが述べられている(桐生1997)。しかし、その一方で山梨県一ノ宮町経塚古墳では、計測地をいずれの尺度で換算しても納得できる数値を算出することができない（吉岡1997）とされており、尺度や対比率を用いた企画性が八角墳すべてにみられるとは限らないようである。

１号墳については、石室全長と墳丘の八角形一辺が約５ｍ（唐尺では約16尺、高麗尺では約14尺）を測り、ほぼ同一となることから石室全長を基に墳丘を築造した企画であったことが予測される。しかし、墳丘一辺と周堀一辺（約8.5m、唐尺：約28尺、高麗尺：約24尺）は比例せず、また墳丘対角間（約13m、唐尺：約43尺、高麗尺：約37尺）及び対辺間（約12m、唐尺：約40尺、高麗尺：約34尺）と周堀を含めた対角間（約22m、唐尺：約73尺、高麗尺：約57尺）及び対辺間（約20.5m、唐尺：約68尺、高麗尺：約58尺）に稲荷塚古墳のような対比率を求めることはできない。１号墳は墳丘については企画性を持った築造と言えるが、周堀は墳丘との対比率などをあまり重視せずに掘られたと思われ、稜角Ｅ・Ｈの延長線上にある張り出し部は、その産物と考えることもできるのではないだろうか。

地方の八角墳は通有の特徴を有するものの築造企画や構造など細部においてはそれぞれ異なる特徴を有している。１号墳も地方の八角墳として通有の特徴を持ちながらも、築造企画では前述のとおり他例とやや異なる。また構造の面でも不安材料として挙げた外護列石がない点、稜角に大きい石を配置しない点などは他例と異なる特徴とみても良いのではないだろうか。八角墳自体の類例が少ないため確証は

得られないが、１号墳については上記の特徴を有する八角墳として想定しておきたい。

次に２号墳について。２号墳は１号墳とともに発掘調査時から八角墳とされてきた。しかし、整理調査の結果、２号墳を八角墳とするには難があると判断した。確かに残存する葺石から平面形態を復元すると多角形状を呈しているが、その角度は110～157°とまちまちであり、１号墳のような規則性はみられない。また周堀も幅、形状がいびつであり、八角形として捉えることはできない。２号墳の葺石の直線的な配列は、むしろ築造段階で生じた作業単位によるものと考えられるのではないだろうか。２号墳は多角形状を呈するものの規則性がみられないことから、円墳の範疇で捉えることにしたい。

10号墳（第40図）は、墳丘北東部１/４程のみ調査された。葺石はほとんど崩落していたが、東側葺石の根石付近のみ原位置にあり、直線的な配列であった。稜角は推定で137°を示す。また葺石に伴って等高線も直線的であり、八角形の辺に沿った形状をしている。前庭部付近の葺石も上面一部のみの確認であるが138°の角度で八角形の辺に合致している。10号墳の八角形を想定すると一辺は１号墳と同じく約５mとなる。ただ石室全長が不明なため企画性については定かではない。また１号墳同様、外護列石がなく、稜角に大きい石を配置した様子もみられない。10号墳は八角墳とするのに適当な要素を持っているが全体を調査したわけではないため、現時点ではその可能性が高いという見解に留めておきたい。

以上、１・10号墳については八角墳ないしその可能性があるものと判断した。地方の八角墳は単独で存在するものが多くみられるが、１・10号墳は円墳を主体とする古墳群中に存在するという点で他例と異なる事例といえる。ただし、両墳は円墳より時期的にやや先行する点は注意しておくべきであろう。

八角墳はその存在について批判もあるが、三津屋古墳のように明らかに八角墳と認められるものが地方にあるのも事実である。１・10号墳は外護列石がないこと、稜角に大きい石を配置しないことから八角墳とするにはやや不安な面もあるが、これらを特徴とみるかあるいはもっと根本的な理由として八角墳でないことを示すのか意見の分かれる所であろう。ただ、両墳は平面的に八角形状を呈し、地方の八角墳としての特徴も持っている。また本古墳群周辺は渡来系と目される幡羅郡に属するが、群馬県内でも八角墳（可能性のあるものも含）が多くみられる西毛地域は、渡来系氏族の地域とされている。こうした点からも両墳を八角墳として認めることのできる一因になるのではないだろうか。

**被葬者像について**

籠原裏古墳群は、出土遺物と主体部の検討から主に７世紀後半から８世紀初頭頃までの古墳群と考えられ、現時点では長期間にわたって継続して築造される古墳群ではない。北武蔵における古墳時代後・終末期の古墳の様相について論じた杉崎茂樹氏は、６世紀前後から７世紀代まで築造された古墳群を「500年前後型」、７世紀前後から全般にわたって築造されたものを「600年前後型」と分類した（杉崎1993）が、籠原裏古墳群は後者に該当するものの現時点では後者でも後半に限定される。

７世紀後半という時期は、本古墳群の北西約２kmに所在する古代幡羅郡衙の推定地である深谷市幡羅遺跡や８世紀初頭頃の創建とされる西別府廃寺、７世紀後半から平安時代末までの長期間にわたって祭祀の行われた西別府祭祀遺跡などの郡衙及び関連遺跡が出現する時期である。西別府廃寺は創建時期が本古墳群の最終段階にあたるが、幡羅遺跡や西別府祭祀遺跡とはまさに同時期に出現ないし並存していたこととなり、これらの遺跡群との密接な関係が想定される。そして、このことは被葬者の問題に直結すると思われ、特に１号墳の存在は大きな意味を持つと思われる。

1号墳は八角墳という特異な平面形態であり、双脚足金具を含む刀装具の存在から方頭大刀が副葬されていたことが想定される。方頭大刀は有力な終末期古墳に副葬されるものであったと考えられており、西戸9号墳出土遺物について論じた大谷氏は、双脚足金具を含む刀装具の存在から西戸9号墳に方頭大刀が副葬されていた可能性を指摘し、さらに近隣に所在する7世紀末の建立とされる鳩山町小用廃寺と結びつけて被葬者が小用廃寺を造営し得る有力者氏族であった可能性を示唆している（大谷1989）。

籠原裏古墳群は郡衙及び寺院、祭祀遺跡などが密集する地域に近接していることから、被葬者はこれらの造営に係わった有力者氏族であった可能性が考えられる。そして、その内容からみて1号墳被葬者を頂点とし、また渡来系氏族的要素を備えていたとも考えられるのではないだろうか。

以上、紙数の都合もあり駈足で述べた。不足な面があることは否めないが、終末期古墳あるいは八角墳の資料として今後活用していただけたら幸いである。

**引用・参考文献**

紙数の都合により報告書は、必要と思われるもののみ掲載した。


穴沢咏光・馬目順一　1979　「郡山市牛庭出土の銀作大刀」『福島考古』第20号　福島県考古学会

梅澤重昭　1997　「東日本の八角形墳丘古墳の性格と画期」『考古学ジャーナル』№414，1997

大谷　徹　1989　「東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)」　『研究紀要』第5号　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

金井塚良一他　1976　『西原古墳群』　考古学資料刊行会

桐生直彦　1997　「稲荷塚古墳の八角形墳丘プラン」『考古学ジャーナル』№414，1997

熊谷市籠原裏遺跡調査会　2000　『籠原裏古墳群10号墳』

熊谷市教育委員会　2004　『籠原裏遺跡』

小久保徹　1983　「Ⅷ結語」『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集

小林利晴　1996　「八角形墳について」『稲荷塚古墳』　多摩市教育委員会

埼玉県　1982　『新編　埼玉県史』資料編2

塩野　博　1991　「荒川中流域沿岸の古墳について―横穴式石室の変遷―」『埼玉考古学論集　設立10周年記念論文集』　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

白石太一郎　1982　「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集

杉崎茂樹　1993　「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集

瀧瀬芳之　1986　「Ⅵ結語 小前田古墳群について」『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集

瀧瀬芳之　1991　「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集　設立10周年記念論文集』　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

瀧野　巧　1997　「三津屋古墳の八角形墳丘」『考古学ジャーナル』№414，1997

田中広明　1991a　「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集　設立10周年記念論文集』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中広明　1991b　「東国の在地産暗文土器」『埼玉考古』第28号　埼玉考古学会

田中正夫・瀧瀬芳之他　1984　「埼玉県における古墳出土遺物の研究1―鉄鏃について―」『研究紀要』1983　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ

多摩市教育委員会　1996　『稲荷塚古墳』

坂野和信　1998　「7世紀後半の土器様相について」『樋の上／皇山』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集

毛呂山町教育委員会　1987　『松の外遺跡・西戸古墳群』

毛呂山町教育委員会　1998　『松の外遺跡・西戸古墳群』

吉岡弘樹　1997　「経塚古墳の八角形墳丘プラン」『考古学ジャーナル』№414，1997

脇坂光彦　1992　「八角形墳」『季刊考古学』40号

# 写　真　図　版

籠原中央第一土地区画整理事業地内全景(真上から)

籠原中央第一土地区画整理事業地内全景(東から)

図版2

第1区(昭和61年度調査A区)全景(南西から)

第4区(昭和62年度調査B区)全景(真上から)

第５区(昭和63年度調査Ａ区)全景(真上から)

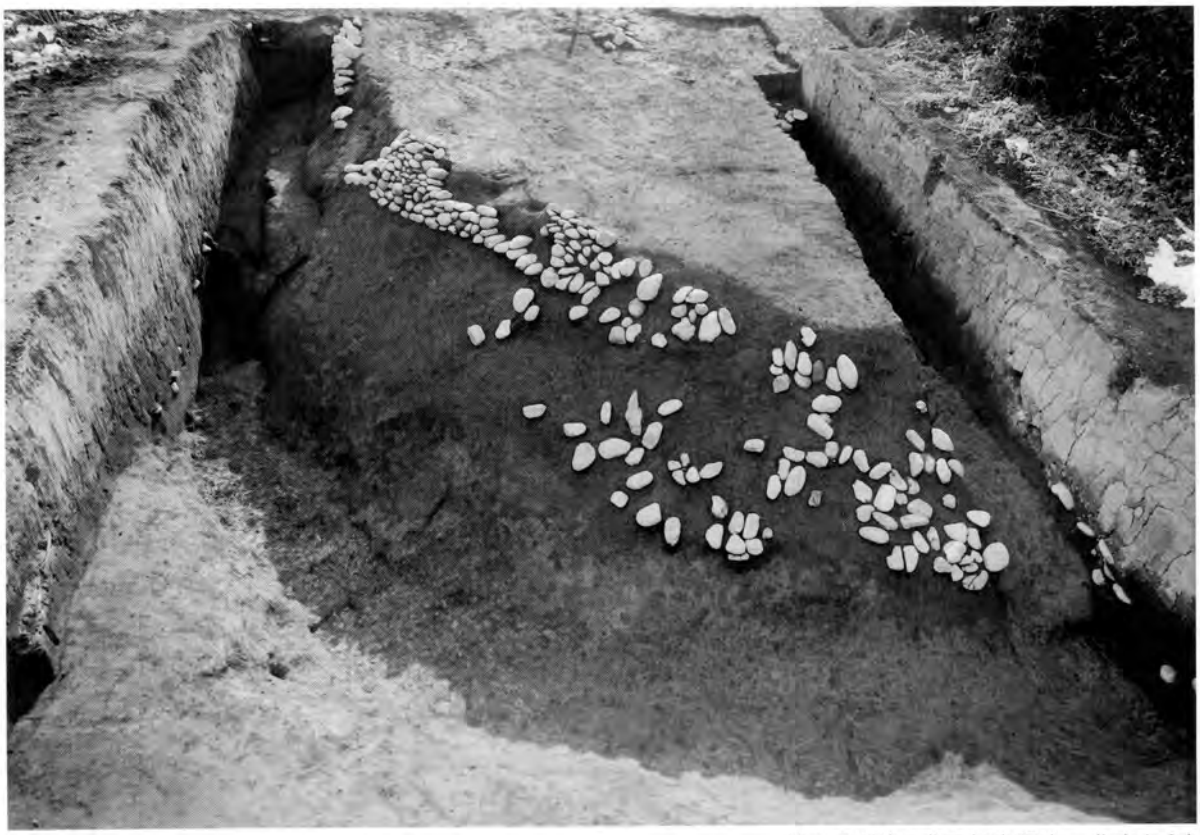
第５区(昭和63年度調査Ａ区)全景(南西から)

図版４

第１区(平成元年度調査Ｂ区)全景(南西から)

第６区(平成元年度調査Ａ区)全景(西から)

第１号墳(昭和61年度調査・南から)



第１号墳(平成元年度調査・北東から)

図版６

第１号墳(平成元年度調査・南東から)

第１号墳(平成４年度調査・北東から)

第１号墳石室(南から)

第１号墳石室(西から)

図版８

第１号墳　葺石崩落状況(昭和61年度調査)

第１号墳　北東側周堀土層断面(平成４年度調査)

第１号墳　葺石崩落状況(平成元年度調査)

第１号墳石室近景

第１号墳　葺石崩落状況(平成４年度調査)

第１号墳石室(前庭部から)

第１号墳　南東側周堀(昭和61年度調査)

第１号墳石室　羨門部付近(東から)

第１号墳石室　玄門部付近(東から)

第１号墳石室　玄室東側壁(礫床除去後)

第１号墳石室　玄門部付近(西から)

第１号墳石室　玄室西側壁(礫床除去後)

第１号墳石室(礫床除去後)

第１号墳石室　羨道部東側壁(礫床除去後)

第１号墳　玄室奥壁(礫床除去後)

第１号墳石室　羨道部西側壁(礫床除去後)

図版10

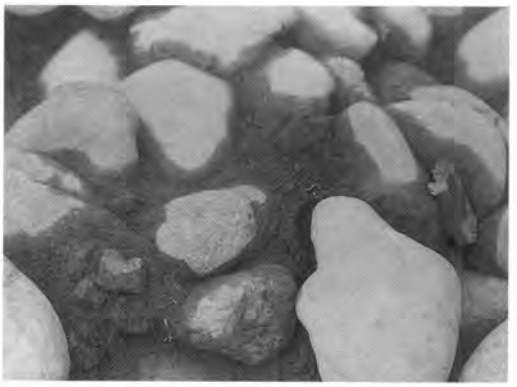
第１号墳　前庭部東側葺石

第１号墳　前庭部西側葺石

第１号墳石室　刀装具出土状況

第１号墳石室　双脚足金具出土状況

第１号墳石室　鞘口･鞘尻金具出土状況

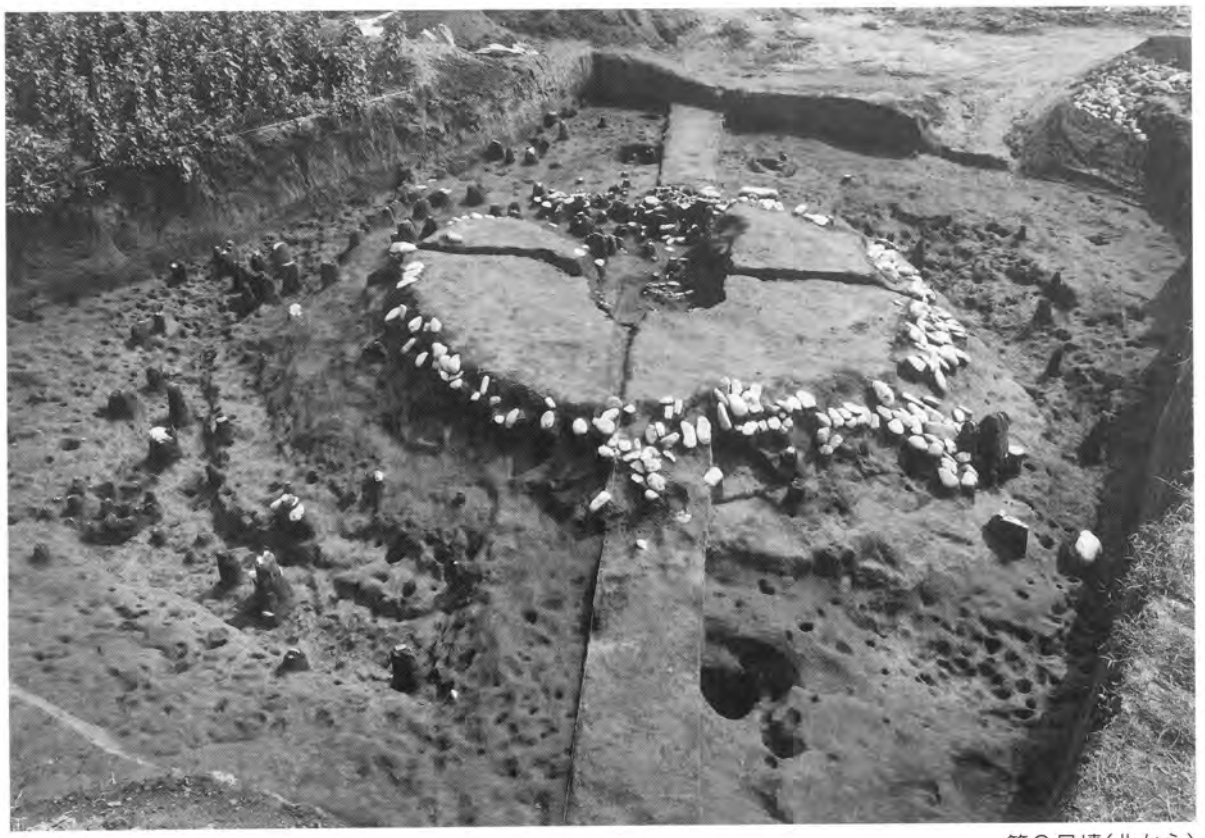


第１号墳石室　鞘口金具出土状況

第１号墳石室　鞘尻金具出土状況

作業風景

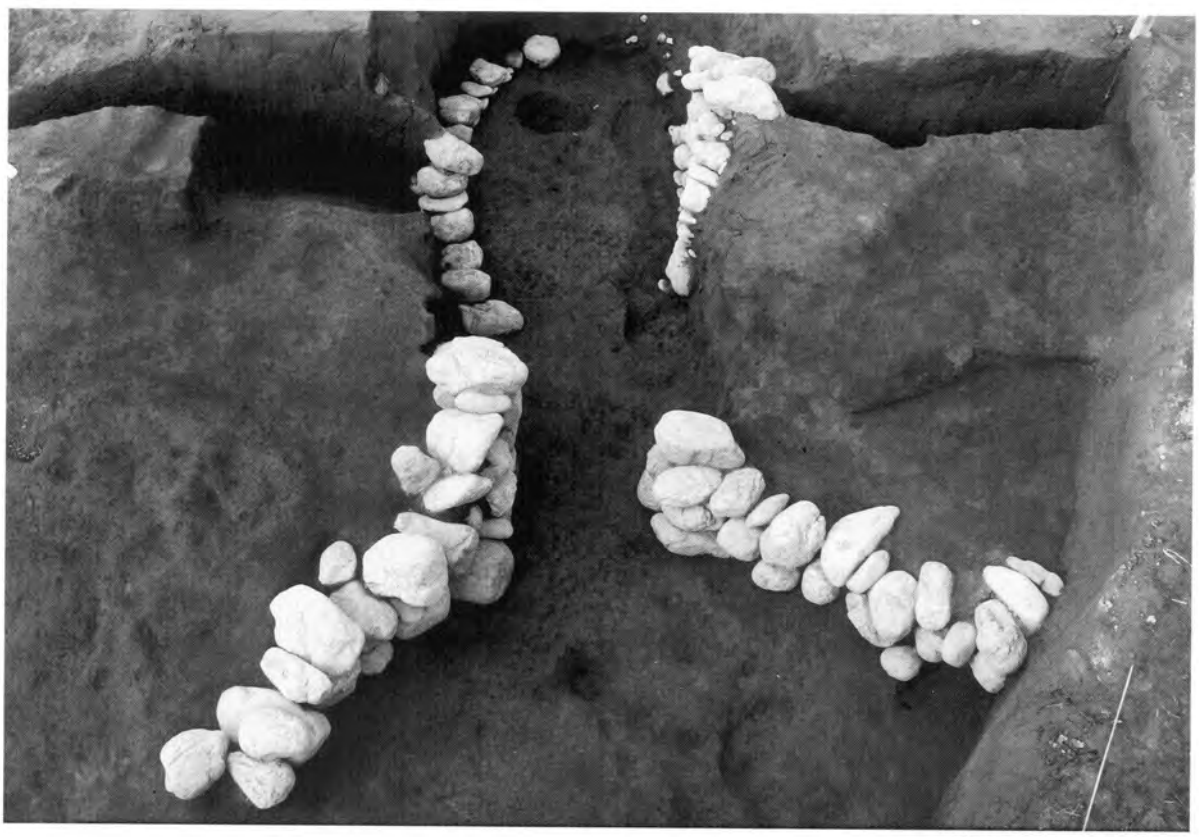
第２号墳(南から)



第２号墳(北から)

図版12

第３号墳(南から)



第３号墳石室(南から)

第２号墳　主体部(南から)

第２号墳　前庭部礫・遺物出土状況

第３号墳石室(前庭部から)

第３号墳石室　玄室東側壁

第３号墳石室　羨道部西側壁

第３号墳　前庭部東側葺石

第３号墳　前庭部西側葺石

図版14

第４号墳(南西から)

第４号墳石室(南から)

第４号墳石室　玄室奥壁

第４号墳石室　玄室東側壁(礫床除去後)

第４号墳石室　玄室西側壁

第４号墳石室　玄室西側壁(礫床除去後)

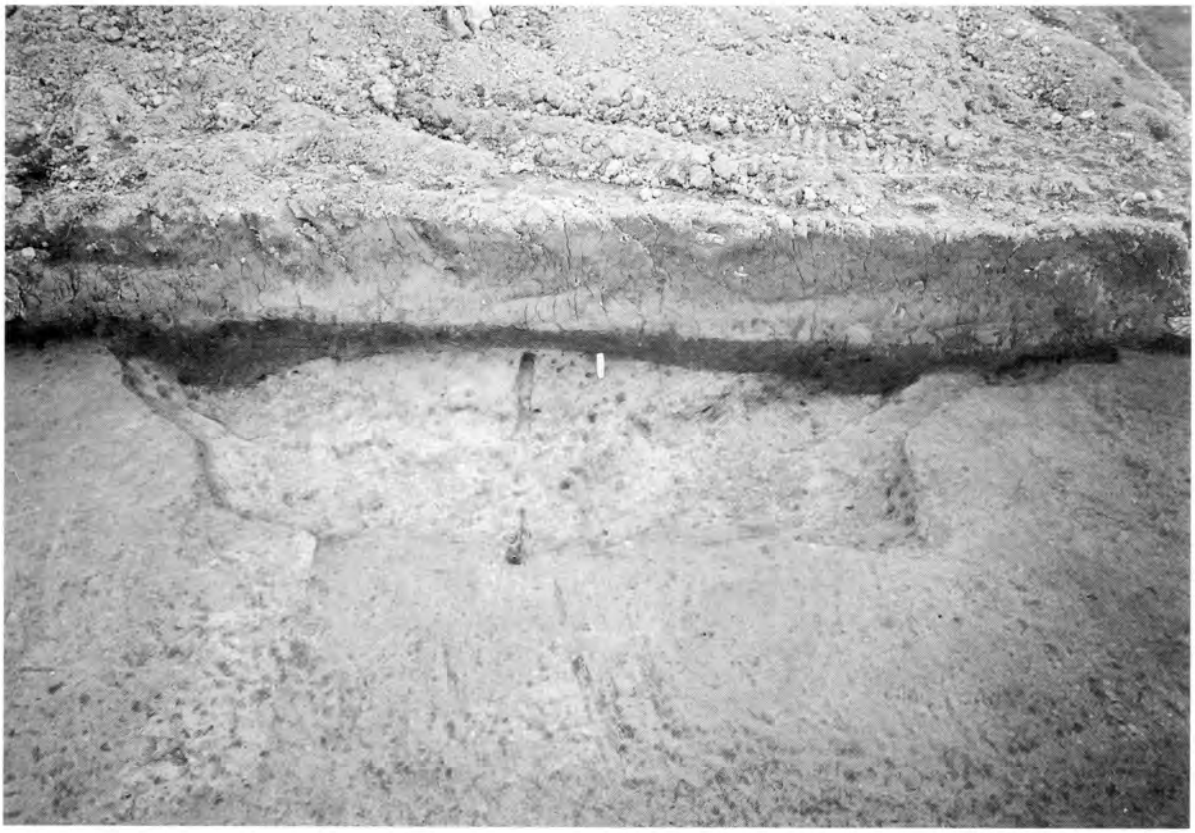
第４号墳(礫床除去後)

第４号墳石室　羨道部東側壁(礫床除去後)

第４号墳石室　玄室奥壁(礫床除去後)

第４号墳石室　羨道部西側壁(礫床除去後)

図版16



第５号墳(北西から)

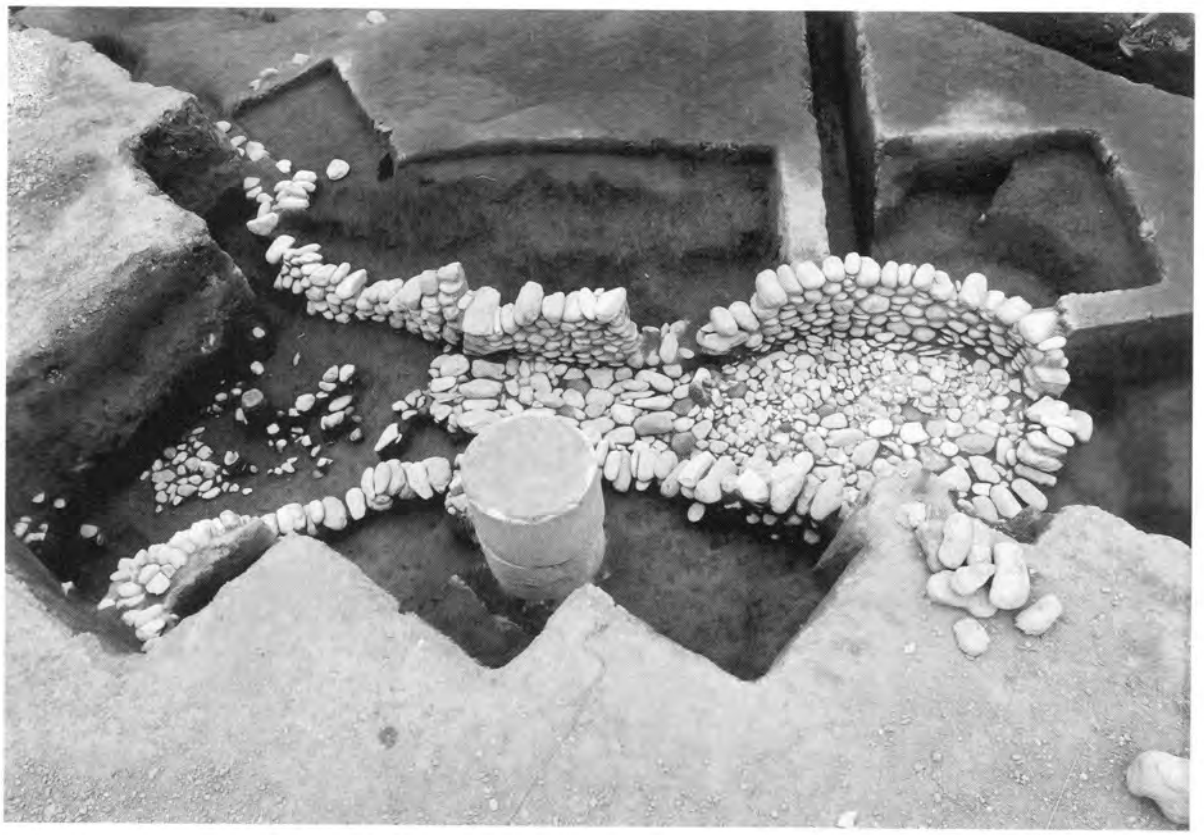
第６号墳(南東から)

第７号墳(南東から)

第８号墳(南から)

図版18

第８号墳石室(南から)



第８号墳石室(東から)

第８号墳　北東側周堀(南東から)

第８号墳　前庭部西側葺石

第８号墳　南西側周堀(南東から)

第８号墳石室　玄室西側壁(南から)

第８号墳石室　玄室西側壁(東から)

第８号墳石室　羨道部西側壁(南から)

第８号墳石室　羨道部西側壁(東から)

第８号墳　前庭部東側葺石

図版20

第８号墳　玄室西側壁(礫床除去後)

第９号墳　墳丘土層断面(北西から)

第８号墳石室　人骨出土状況

第９号墳　墳丘土層断面(北東から)

第８号墳石室　鉄鏃出土状況

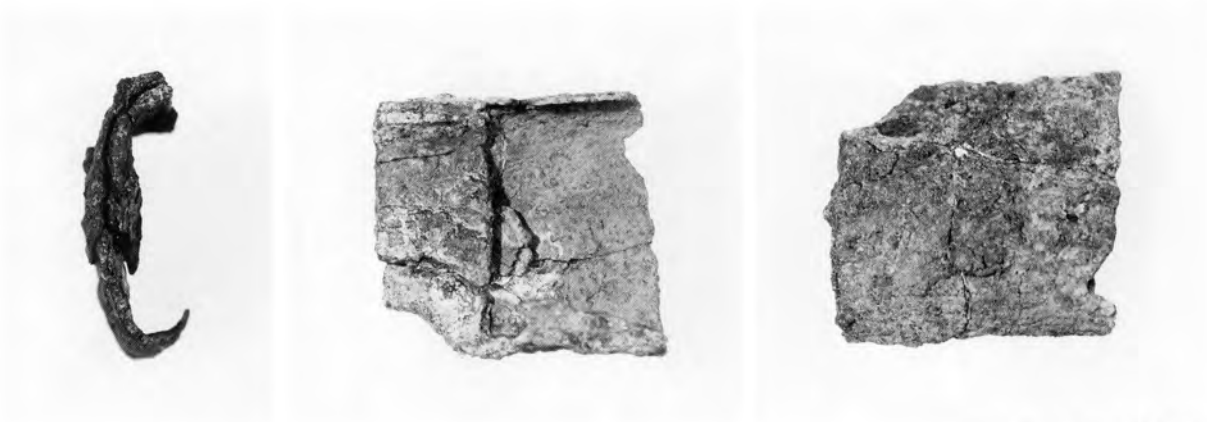
第９号墳　北西側周堀

第８号墳　周堀内土器出土状況

第９号墳　東側周堀

第１号墳　刀装具一括(第９図１～６)

第１号墳　第９図１・２



第１号墳　第９図３

第１号墳　第９図４

第１号墳　第９図５

第１号墳　第９図７

第１号墳　第９図６

第１号墳　第９図８

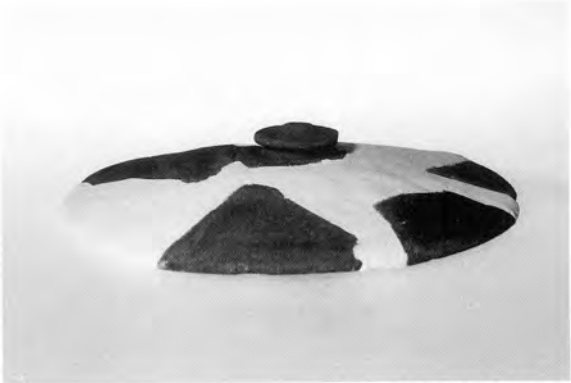
第７号墳　第20図２

第３号墳　第15図１

第８号墳　第25図15表

第５号墳　第18図１

第８号墳　第25図15裏

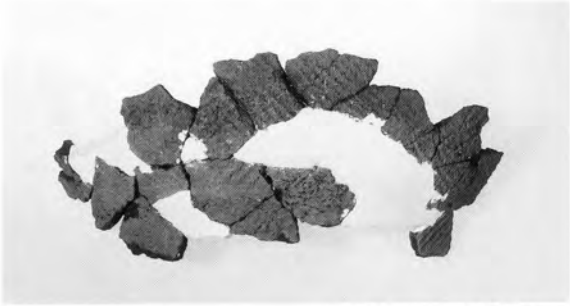


第７号墳　第20図１

第８号墳　第25図16

第８号墳　第25図１～８

第８号墳　第25図９～13



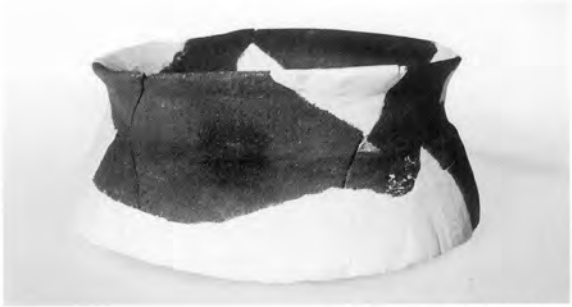
第28号墳　第29図１

第１号墳　第27図27

第４号墳　第35図３

第１号墳　第28図29

第１号墳　第27図５



第１号墳　第28図30

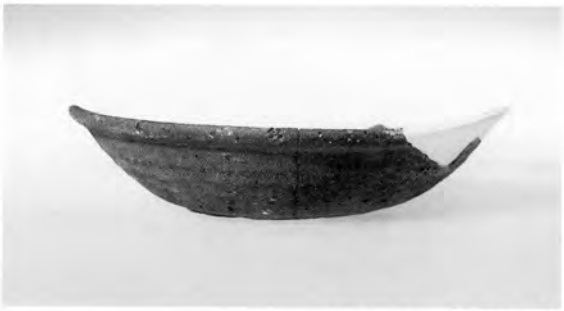
第１号墳　第27図６

第１号墳　第28図31

第１号墳　第27図13

第１号墳　第28図33

図版26



第２号墳　第29図29

第２号墳　第30図67

第２号墳　第29図32

第２号墳　第30図70

第２号墳　第29図35

第２号墳　第30図48

第２号墳　第31図98

第２号墳　第30図49

第２号墳　第31図99

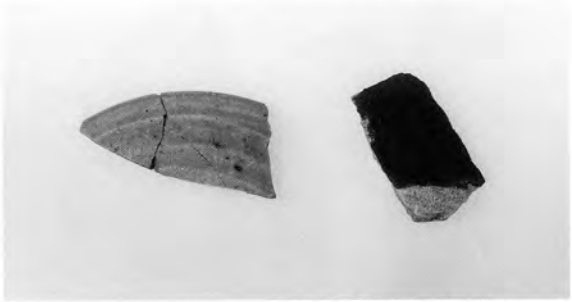
第３号墳　第33図１

第３号墳　第33図30

第３号墳　第33図５

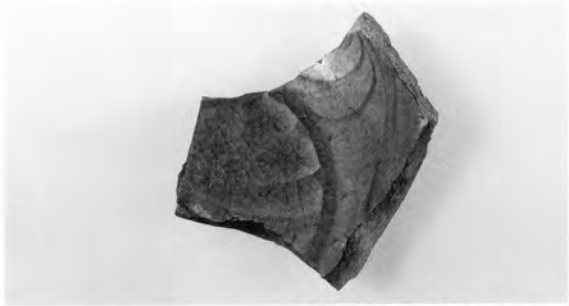
第３号墳　第34図54

第３号墳　第33図８墨書



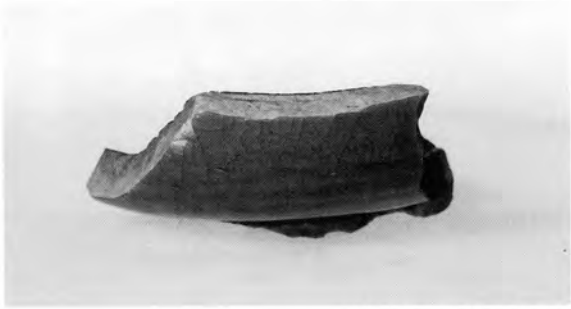
第７号墳　第36図２・３

第３号墳　第33図13



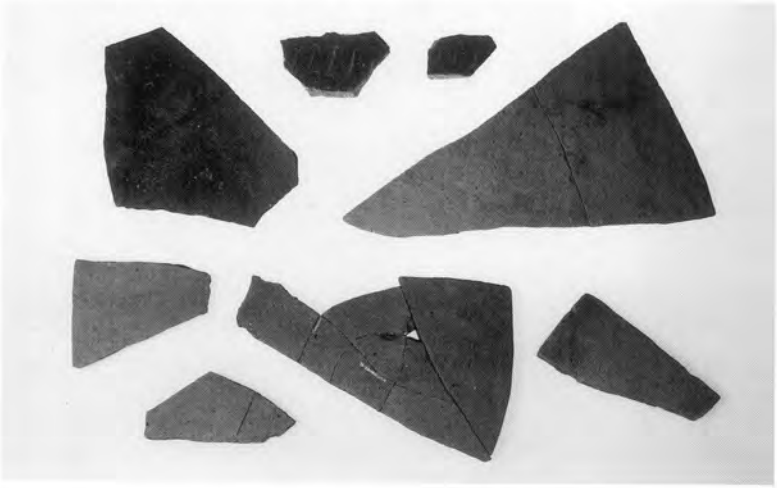
第８号墳　第37図４内面

第３号墳　第33図26



第８号墳　第37図４

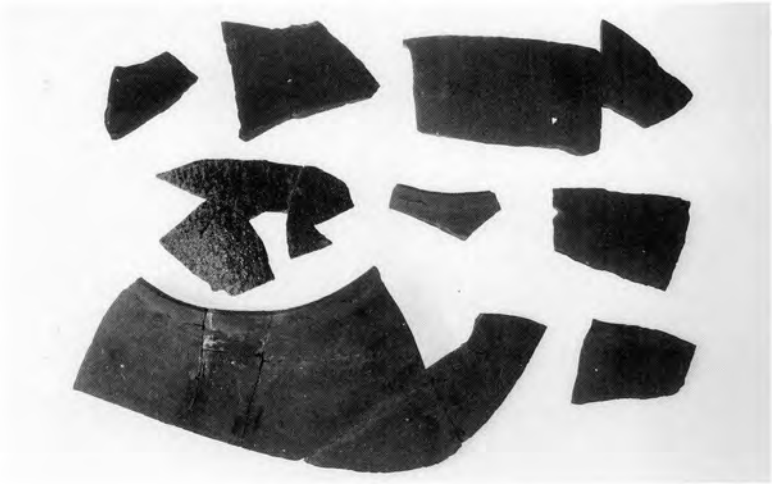
図版28



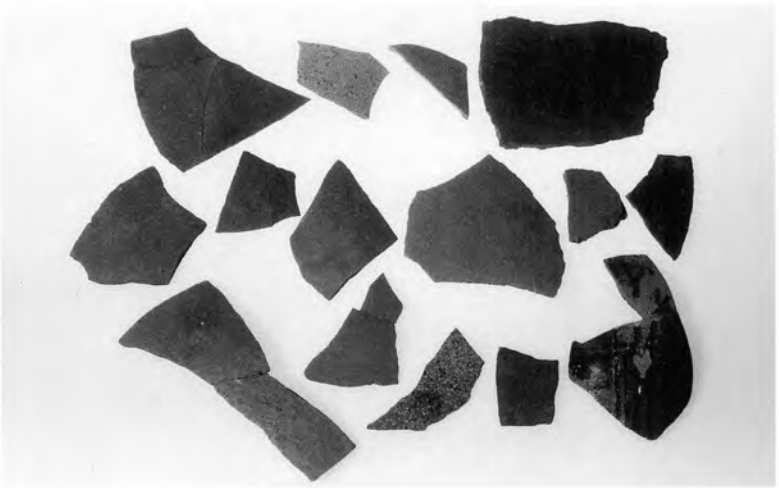
第１号墳　第27図15・16・18～20・23～25

第２号墳　第30図72～75・第31図78～80

第２号墳　第31図85～88・90・91



第３号墳　第33図31～38



第３号墳　第34図39～53

第１号墳　第28図34～36
第３号墳　第34図60・61

第２号墳　第32図104･105

第２号墳　第32図106･107

第１号墳　第27図１･２
第８号墳　第37図２

第８号墳　第37図１

第１号墳　第28図37

第８号墳　第37図３

第２号墳　第32図108

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | かごはらうらこふんぐん |
| 書名 | 籠原裏古墳群 |
| 副書名 | 平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 |
| 巻次 | — |
| シリーズ名 | — |
| シリーズ番号 | — |
| 編著者名 | 松田 哲 |
| 編集機関 | 埼玉県熊谷市教育委員会 |
| 所在地 | 〒360－8601 熊谷市宮町２-47-１ TEL048-524-1111 |
| 発行年月日 | 西暦2005（平成17）年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>(° ′ ″) | 東経<br>(° ′ ″) | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| かごはらうらこふんぐん<br>籠原裏古墳群 | くまがやしおおあざにいぼりほか<br>熊谷市大字新堀801他 | 11202 | 96 | 36°<br>10'<br>40" | 139°<br>20'<br>11" | 19860801<br>～<br>19861015 | 2,694 | 区画整理<br>街路築造<br>工事 |
| | くまがやしおおあざにいぼりほか<br>熊谷市大字新堀355-2他 | | | | | 19871112<br>～<br>19880307 | 1,100 | |
| | くまがやしおおあざにいぼりほか<br>熊谷市大字新堀787-2他 | | | | | 19890208<br>～<br>19890331 | 540 | |
| | くまがやしおおあざにいぼりほか<br>熊谷市大字新堀353-1他 | | | | | 19891009<br>～<br>19900129 | 900 | |
| | くまがやしおおあざにいぼりほか<br>熊谷市大字新堀803-5他 | | | | | 19931110<br>～<br>19940107 | 100 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 籠原裏古墳群 | 古墳跡 | 縄文時代前･中期 | — | 縄文土器・石器 | １号墳は平面形態が八角形を呈する八角墳であり、主体部からは刀装具が出土した。 |
| | | 古墳時代前期 | — | 土師器 | |
| | | 古墳時代末 | 古墳　9基 | 須恵器・土師器<br>鉄製品・銅製品 | |
| | | 平安時代 | — | 須恵器・土師器<br>灰釉陶器<br>土製品・鉄製品<br>石製品 | |
| | | 中・近世 | — | 陶磁器・石製品 | |

平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
—熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書II—
**籠　原　裏　古　墳　群**
平成17年３月31日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／朝日印刷工業株式会社

さくらのまち“熊谷”